

では非常な發展で加州に於て有数の農産地になりました様な次第です。」

五九郎「此所の停車場附近には珍らしく樹木があるですね、是が即ち砂漠の中にあるオーシスと言ふものかね。」

三太郎「四方は見渡す限り平野で遙に黄白色の土砂から成る丘陵が見える丈ですね、旅行しても不愉快な所でこんな場所を四時間も五時間も走るのは汽車旅行も楽しみでないですね。」

隣人「今の停車場のある所はあれで太平洋の海面より二十二尺低いさうです。是から進むに従つて下るのですが、右の方遙かに大きな湖水が見えませう。あれがサルトン湖と言ひまして我々の汽車はあの湖岸を通ります。其處の停車場は海面下二百六十四尺の間處であると言つて居ります。」

五九郎「サルトン湖と申しますと其湖水は鹽分を含んで居るのでございませうか。」

隣人「左様でございます、何でも昔はカリホルニヤの灣がすつと此邊一杯に入り込んで居たらしいのであります。其後途中に山が出来るかそれとも大地震で地盤が隆起したのか、兎に角太平洋から切り離されてしまつたが、先刻の話の如く此地方一帯は年中上晴天で降雨がない爲に段々乾

き、次第に陸地と化して今ではあの湖水だけが残つて居るらしいです。海面以下二百六十四尺と言ひますから、萬一此次の大地震でカリホルニヤ灣を境して居る丘陵が破れたなら、此邊一帯は太平洋の一部と化して二百尺以上の深さある海底となるわけであります。」

三太郎「此汽車は大變動が烈しく、出發にも停車にも非常な激動を感じるが米國の汽車は何處でもこんなですか、是なら日本の汽車の方が遙かに優つて居る様に思はれます。」

隣人「米國の汽車は元來世界一に出来て居る筈であるが、戦争の爲に國家が鐵道全部を監理する事になりました。然るに今度戦争が治つたから此三月一日に再び元の會社に引き渡す事に決定して居るのです。それですから政府の方ではどうせ二月一杯使用するだけと云ふので、枕木が腐つてもレールが曲つても、修繕せずに其儘にして三月一日を待つて居るものですから斯んなにひどくなつたのであります。」

其内アリゾナ州に入れば往々にして蟹氣樓が見えると云ふ噂を聞いたが、夜が来たので寢臺にもぐりこみ翌朝眼をさまして見ると附近の山は灰白色を呈して居るので、或は多少の降雪があつたのかとも推察せられた。既にしてニューメキシコ州に入れば土砂は赤色を帯び到る處に風車があ

る。何れも掘井から地下水をくみ上げる動力に利用されて居る。つまり降雨がない爲に地下水を以て灌漑用となして居るのだ。太平洋と大西洋との分水嶺と云ふ建札がある。分水嶺と言つても山や丘があるのではなく、灰をかきならした様な平原の中に小川の如き溝があるだけである。是より先は凡て太平洋方面に流れて行くので最初に眼に止つた川は、リオグランデである、河幅は可なり廣いけれども水は殆んど無く向岸には礫山らしい物がある。

## 二四 米墨の國境

汽車はエル・パソ市に着いた、附近には丘陵連綿として居るが、樹木は殆んどなく、満山灰白色にて如何にも熱帯地方の砂漠然たる感がある。ブラットホームの中途迄行くと後から呼び止める者がある。こんな處に自分を知つて居る者が居ない筈だと思ひ乍ら、兎に角後方を振り向いて見たらそれは探偵であつた。

探偵「パスポート」旅行免状を持つて居ますか。」

五九郎「何にするのですか。」

探偵「持つて居るなら出して見せなさい、私は其筋の係員です。」

面倒くさい事を言ふ。上陸許可に成つてから旅券は丁寧にしまひ込んである。それをこんな處で出すのは容易でない。幸にして桑港に上陸する時に貰つた十二月廿九日にコレア丸にて上陸した者に相違ないと言ふ證明書が紙入の中にあつたからそれを見せた。米國內を旅行する際に大きな手荷物を携帯する事は鐵道規則で禁ぜられてあるが、此證明書あれば特別に運搬して呉れるのである。

探偵「是は駄目です、もつと大きな是位の紙で寫眞を張り附けた物を持つて居る筈でせうから夫を見せなさい。」

と言つて手眞似で旅券の大きき迄示して要求するので、誤魔化す事も出来ずいや／＼乍ら胸巻から引きすり出した、彼は旅券から必要な個所を移し取つて去つた。こんな處で調査せずとも旅店でしたらよささうなものでないかと言ふ感が起きた。改札口を出ると直に待合室にて地圖を買求め見物の方針を定めたが、第一に余を驚かしたのは有色人種待合室とか白婦人待合室など云ふ札が張られてある事である。電車に乗つて見ると其處にも有色人席が區別されてある。停車場前

のホテルに一室を借りて荷物を置き見物に出掛けた。

市の西南より東北に涉りて標高五千尺に達する山がある。岩層斜に走りて樹木全く無く、灰白色の土塊満山を掩ひ左方遙に無線電信柱が天に聳えて居る。東南一帶はメキシコの大平原である。今日は概ね曇天にて東の一部は晴れて居るが、西の空には雷雲が屹立し天候不穩の兆があるから遠征を中止し山腹にある高等學校參觀に出掛けた。直譯すれば高等學校であるが其實質は日本の中等學校に相當する物で中學校、女學校、農學校、工業學校、高等學校等の凡てを集めた物と見れば間違ひはあるまい。米國自身が既に合衆國であるから學校も亦こんな風に集合して居るのかも知れん。従つて生徒は各自に科目を選んで專習する事に成つて居るのは當然である。物理の先生や化學の先生がそれ／＼自分の受持つて居る部分を案内し、最後に語學の先生ガレット氏が残りの部分を案内して呉れた。ヒリツピン島に數年間滞在した事が有るとか言ふ事で非常に親切な人であつた。

ガ氏「此學校では日夜學校を開いて語學殊に會話の普及を計畫して居ります。米國には米國の言葉を知らない人が數へ切れぬ程居るので困ります。國語の統一が目下の米國では何よりの急務

です。」

三太郎「日本人には日本語を知らない者などは一人も居りませんが米國は流石に大國ですね、殊に合衆國ですから色々な言葉を話す人の集合で一才日本の如き小さい所では想像もつかん

ね。」

ガ氏「日本人はみんな日本語を知つて居るのですか、誠に結構な事ですね。今晚から私の受持つて居る初年級の授業が始まりますから參觀に来て呉れませんか。」

五九郎「今夜ですか、夜では一寸参り兼ねます。」

ガ氏「何か先約がありますのですか。」

五九郎「別に用事はありませんですが旅行先で夜は遠方に出掛けない事にして居りますから。」

ガ氏「世界風が恐ろしいのですか、北部諸州では大層流行するさうだが此邊では心配ありません。」

五九郎「世界風が恐ろしいのではありません。私は十數年來冷水浴をやつて居りますので風邪に犯された事は全然ありませんですから、此學校はこんな山腹ですからね、晝はなんでもあり

ませんが夜になつて一寸學校の在る場所を探がすのも容易ではありませんから。」

「ガ氏」そんな理由ですか、それなら私がお迎ひに上ります。午後七時に授業が始まりますから六時二十分頃にあなたのホテルに迎ひに参りますからお出なさい。」

斯う迄強ひられてはそれでもいやだと斷わる事も出来ないのて承諾する事にした。實は夜の外出を避けて居る理由は世界風でなく米國名物の強盗が恐ろしい爲である。米國の強盗は時と場所とを嫌はず間斷なく出沒するので、毎日新聞記事を見ると慥に日本のスリよりも頻繁に實行され白晝さへ往來で遠慮なくやるのであるから、夜間の外出殊に斯の如き郊外の山腹迄出掛けるのは死出の山に旅する程に恐ろしく思はれたのである。ピストルを胸に突き付けて手を上げと來たら萬事窮すで如何ともする事が出来ない譯だ、然し米國名物の潛賊が恐ろしいから夜間はお断りすると言ふ事を彼に向つて言ひ切る勇氣はどうしても出来ないのであつた。

五九郎「では参りませう、一度來たのですから夕方なら大概道は知れます故にお迎ひには及びません、午後七時迄には必ず参ります、けれども歸りは十時過ぎですと此邊は眞暗で方角も何も私には分りませんから明るい通りに出る迄御一緒に願ひたいです。」

「ガ氏」お請合します、歸りは私の宅もあちらの方面ですから電車のある處迄お送り致します。」

市内を見物し乍らホテルに歸り、少し休息して居ると、夕方から雷鳴天地に轟き沛然として雨來り風さへ加へて道路は忽ちにして川の如くに變化した。六時になつても止まぬ。此風雨を犯してある山迄出掛けるのは非常な難事であるが、あれ程固い約束をしたのであるから違約するのも本意でない。今日行かなければ再び會つて言譯すべき機会が一生の内に無いかも知れん、日本人は約束を守らんとは言はれては自分一人の事でなくなるから、眞綿て首を包みマスクを掛け脚絆を附けて出掛けた。幸にして雨は霽れたが途中で眞暗に成つた。風雨の後であり殊に食事の時刻であるから往來には人の影も見えない。晝は山腹にある學校の建物を目あてに行つたが、其建物が眞暗で見えない爲に全で見當がつかぬ。横の通りに人影でもあればそれに聞いて見たくもあるが、或はそれが強盗ではあるまいかと云ふ念が起り成る可く大急ぎで通り過ぎる氣にも成る。不安の念に徘徊する事約三十五分間にして漸く學校の燈火を見付、それを便りに登つて行くと裏門に出た。間もなく授業が開始されたから二三の教室を參觀し最後に或女教員が英語を教へて居る教室に行つた。生徒は概ねメキシコ人でスペイン人其他の者も混り男女合せて四十餘名居る、實物

教育主義で先生は手に洋傘を持ち乍ら始めた。

先生「是は何ですか、知つて居る方がありますか。」

生徒「アンブルラ。」

先生「さうです、それをかう云ふ風に綴ります、メキシコ語で何と言ひます乎。」

生徒「バラグナス。」

先生「メキシコではバラグナス、アメリカではアンブルラ、それから傘を斯うする事を何と言ひますか。」

生徒「オーブン。」

先生「さうです、オーブンでも差文ありませんが傘を開く場合にはオーブンでなくリーズと言ふのが普通です、それをメキシコ語で何と言ひますか。」

生徒「アブリル。」

斯んな調子で熱心に授業を續けて居たが先生は次第に教壇の右側に進み、竟には其教壇の上に腰を掛け生徒の机の方に足をふんばり乍ら雄辯を振つて居る。

三太郎「流石は米國一流の教授法は異つた物だね、いくら活潑な新しい婦人でも日本の女教員ではあの眞似は出来まい。」

五九郎「あんな事を日本の女學校でやつたら教室の神聖を汚す者として早速懲戒免職されるにきまつて居るさ。」

三太郎「あれでは成る程日本人が米國風に同化する事は容易であるまい、少くとも我々の様に日本で教育された人間では教壇に腰を掛けて講義する様な眞似は一寸出来ない藝當ですからね。」

夜遅く歸つて来たがホテルの直ぐ前には道を隔て、鐵道があり。列車の運轉絶間なく容易に眠れない。精神を落ち着けてやつと眠つても二時間と経たぬ間に再び眼が醒める、消化不良で弱り切つて居る際である故に益々興奮して来る。夜の明けのを待つて公園に出掛け新聞を讀んで見ると、メキシコ人の米國に對する大陰謀に關する記事がある。

五九郎「大統領カランザ及び其幕僚が企てたサン・ヂエゴの計畫に依ると、米國の南部諸州即ちテキサス、アリゾナ、ニュー・メキシコ、コロラド、及びカリホルニアの各州を占領して此處に獨立の共和國を新設する豫定である。之に對して獨逸は經濟的援助を與ふるのみならず日本と相談

して行動を共にする内約があつた。此計劃にはカランザ黨の黒人ばかりでなくアリゾナ州の前税團長なども組して居り。最初的一幕は先づ國境にある黒人兵並に南部諸州の市民たる黒人が反亂を起して、黒人日本人及び獨逸人を限き、十六歳以上の者を全老壯の別なく逆殺するに始まり、其騒ぎに乗じて墨國より攻め入る筈で、六名の日本軍人は其間に往復して連絡を保ち何れも日本の軍籍を失ひたるが、其内の主要人物は名古屋三郎氏であると書いてある、こんな事が成効したら世の中も面白くなるですね。」

三太郎「本當にそんな事を企て、居る者があるかも知れんさ、墨國の革命軍中にはカランザ黨と言はずオブレゴン派と言はず參謀部あたりの要職に日本人が澤山居るそうですから、勿論姓名はメキシコ風に變へて居る故に外形には顯はれんけれども、直接面會して見ると私は何野何兵衛ですと言ふ風に日本語でやつて来るそうです。」

五九郎「此陰謀の主腦者の一人たるド・ラ・ローザの自白に依れば、五十人で國境を荒し廻つた丈で米國の陸軍では五千人を繰出す必要があつたと書いてありますよ。」

三太郎「それこそ一騎當千と迄は行かないが墨人の一人は米兵の百人に相當すると言ふ勘定です

ね。」

五九郎「昨年十月十五日メキシコ首府の第二十三番館で開催された秘密會議には米國より二名の米人來會し、若し十一月初に米國にて大ストライキをやれば三百萬人の同盟者を得べく、太平洋沿岸にて一港大西洋沿岸にて二港を占領し得る確信あり、米國兵の多數之に加はる見込にて、此ストライキが成効すれば千八百四十八年の條約にて米國領となれる各洲を墨國に返却すると陳述したと書いてありますよ。」

三太郎「米國に於ける獅子身中の蟲は勞働者と黒人とですから、こんな大きな身體を持つて居ても何時内部の革命で倒れるか豫想する事が出来んさ、米國は其内亂が恐ろしいから假裝敵を日本に置いて自國の統一を企て、居るのでせう。」

五九郎「内亂の序幕として四十三四の暴徒が起きたが、其際には捕虜とした米人を一列にして先づ獨逸人乎と問ひ然らずと答ふれば直に殺したと書いてある。」

三太郎「米國の新聞に書いてあるのだから果して其通りであるかどうか全部を信する譯には行かないさ、然し米國がそんな事にびく／＼して居なければならぬ理由がある事を充分自覺して居

るかも知れん。」  
 新聞を見乍ら公園を散歩して居ると子供の遊戯場に出た。ブランコや遊動木や其他種々の機械運動具が設備されてあるが其處にも一々張札が附いてある。白人の子供とメキシコ人の子供とは同一の器具を使用する事が出来ない規定である。公園でさへ是であるから電車などは當然座席を區別して居る事言ふ迄もない。

### 二五 切支丹科學教會

公園を出てリオ・グランド河見物に出掛けた、途中は概ね墨人の舊市街で家屋は全部平屋建てのるが、恰も瀬戸物の玩具の様な正立方體に近き家が並列して居る。降雨少き爲か日本の如き勾配のある屋根は全く見られず、泥土にて作り上げた上部は凡て平面にて雨樋が一二尺突出してゐるに過ぎん、家屋の内も外も住民も凡て不潔にて如何にも劣等人種らしい感じがする、河岸に到れば橋の阿元に番兵が居り通行人を誰何する、河の此方にあるエル・パソ市は合衆國で、彼岸にあるジュアレ市は墨國であるならば是が本當の兩國橋である、橋の上には兩國聯合の電車が運轉して居

るけれども我々有色人には三途の川同様で、一度渡つたなら再び戻つて来る事が殆んど不能である、昨日も一名の墨國人が河を徒渉して米國に密入國を企て番兵に銃殺されたと新聞に書いてあつた。堤防の上から遙にジュアン市を望見して居ると番兵は怪しい奴がと言ふ眼附で睨んで居る。日本を出發した際には都合宜くば墨國見物に出掛けて見たい希望を持つて來たのであるが、當市に來て様子を探つて見るに、墨國の内亂は今も昔の儘にて汽車は時々轉覆される虞れがある故に夜間の運轉は全然中止され、更に最近ではベラ・クルーズ地方の大地震あり、災害の程度は通信機關破滅の爲に不明瞭ではあるが死者數千人あるは事實らしく、或新聞はメキシコ全滅とさへ報道し救済金を募集し居る有様なるに依り墨國行は中止してしまつた。

米國特有の宗教にクリスチャン・サイエンス・チャーチと言ふ一派がある、直譯すれば切支丹科學教會であるが、洋鬼大靈道とか米國大本教とでも譯したら當つて居るかも知れん、西曆千八百六十六年にボストンで一婦人マリー・エッデーが開いた物で非常な勢で米國に擴がり、今では少し大きな都會となれば必ず五つや十の新式なる大教會堂が建つて居る。新宗教の開基が東西何れも婦人であると言ふ事は注目すべき現象で、女ならでは夜の明けぬ國と云ふのは必ずしも我

日本ばかりではない。日曜と木曜の午前には説教があり夜は疾病治療をするのが普通となつて居る、彼等切支丹科學者の説に従へば病は錯誤の結果に過ぎざる物で、良心曇り目混乱するが故に病を治むる事が出来ぬのである、吾人は神の子である事を記憶せよ、物質は精神に從屬する物に過ぎぬ事を忘れてはならん。健康を保持する道は完全なる愛の所有者たるに限る。精神療法が不思議に見ゆるは懷疑と唯物主義の影に居るが故で、信仰と唯心論とに従へば成し得ざる物なき筈にて病を治する如きは茶飯事である。

日曜の午前に行つて見たが、講堂は階段教室の體をなし數百人を入れるべき設備がある。見た所では少しも宗教的臭味がなく、大學の物理學教室か然らずんば寄席に入つた様な感がある。説教は一定の教科書があり、毎日一章宛を講ずるので今日の題目は戀愛と言ふ所に當つて居た。來會者は何れも壯年乃至老者であるが病身の者多い事は當然である。

三太郎「四人も一所に牧師が教壇に出て來たがあれがみんなで説教するのでせうか。」

五九郎「教壇と云ふよりは舞臺と言ふ方が適當でないかね、男優が二人に女優が二人と合計四人ですから。」

三太郎「一人の男はピアノの前にすはつたからあれは樂器専門にやるんだね、成る程、それから一人の男と一人の女とは並んで着座したからあれが説教するのかも知れん。」

五九郎「全て寄席を見る様だね、あの男女が義太夫の掛合をやる體だね、横に立つて居る女優は何の役を務めるのだらう。」

其内に午前十一時の時計がなるとピアノに連れて讚美歌が歌はれ、それから牧師と來會者と交互に教科書を一句宛讀み上げた。恰も小學校の一年生が初めて讀本を教はる時の調子で、それから問題に成つた一人の女は獨唱をやつた。來會者の内には此獨唱を聞く爲に來て居るのも少くは無いらしい。夫が終ると説教が始まり男女交代に二三分間宛講演して行く。

五九郎「矢張り義太夫その儘だね、唯残念な事には英語でペラ／＼しやべるから聞くのに骨が折れる、面白いよりは苦しい位でないか、君には了解が出來たかい。」

三太郎「題目に依つて判断すれば推察が出來るでないか、聲は立てられぬ足音でさとれと言ふ句さへあるのに、あれだけ大きな聲で言ふのだから悟るに何の苦もあるまい、今の説教は所詮どうなんだよ。」



男「色で導き情で教へ、戀を天國への橋となし、渡して救ふエス様の誓ひは妙に有難し、色の聞路を照せよとて、夜毎にともす電灯は四季の螢よ雨夜の星か、星の光か、あゝ螢火か、憧れ出る我靈魂か、實にや外面如菩薩にても内面如夜叉のたとへに漏れず、其色如何に白くとも無間の猛火に黒む可く涙に戀に……」

女「怨めしや恥かしや、偽り多き御一言、誠と思ひ身を焦し、戀に心を悩ましてあらぬ思に狂ひしも只一筋に思ふ故、君が出世の障得ならば、思切れとはの給はで、誰かり申さん御計略か、餘りに酷き御心は色情の道、左はなきもの、憎くて人には惚れぬぞや、果敢な戀に朽果てん。是御覽ぜよお忘れか、假寝の逢瀬の川水の、淀みくつて月かさなり、君の御子を生みしかども君の浮名を憚りて、聖靈に感じ神よりの授かり者と偽はりて……」

男「結ぶの神も偽りや、何時の月日に結びそめ、寢初めし夜半の夢消えて、縁さへ薄き麻のシヤツ、ほころび切れしを頼みしが何の報か浮世の闇、戀愛の闇の暗がり……」

女「夕くくの我涙川、晴れて逢瀬の波枕、それを頼に浮身を送る、此年月を合はぬ縁かや、但は既に秋風か、印度の釋迦はよしんば左様になされたとも……」

男「おゝ恨み左もあゝん。言ひ出すべき折もなく今迄打過し……」

五九郎「良い加減に止め給へ、いくら戀愛と言ふ演題でも宣教師がそんな説教する筈があるまい」

「さ」

三太郎「宣教師は米人だから大和語で言はないが、彼等の言ふ事を意譯すればこんな物だと言ふのさ、早い噺が徳川時代に日本に来て居た宣教師が持つて居た聖書の裏に、立派な春畫を極彩色で畫いたのさへ博物館に行つて見ると今日迄残つて居るでないか、神即戀愛と言ふのが切支丹宗の標語ですからね。」

説教は濟んでから教會が成し居る事業の大體を來會者に紹介し、疾病治療希望の者は夜の會に來る様に勧め、最後に次の語を以つて終つた。

男「神の力に依つて病を治めたる者は古今枚擧に暇なき程あります。然れども精神的眞理は賣買し得る物ではありませんから、是を商品扱にすれば其神力を失ふ事になります。換言すれば精神的療法を以て金錢を得んと欲する者は、神に對する愛の大部を失へる者と言ふべきであります。とは言ふもの金錢は交換の媒介物に過ぎざる物でありますから、其勞力に對する相當の報酬

を受くる事は、必しも宗教家の威嚴に關するものでありません。」

此言葉が了ると再びピアノが奏せられ、其間に寄附を集める袋が來會者の右から左へと傳達せられた。五仙の白銅を投ずる者もあれば一弗の紙幣を奮發する者も少くない。歸りに再び公園を散歩して見ると子供の遊戯場がある。ブランコや木馬や其他色々の運動具が完備されて居るが、其處に張札があるのを見ると白人用と墨人用とに區別してある。子供の時から同一の器具を使用する事さへ禁止してあるのだから、電車などでも白人と有色人との席を同にする事は出來ず、芝居でも料理店でも全然區別されて居る。人種差別問題が米國に取つて非常に重大事件である事は、此處に來て始めて了解する事が出來た。勿論此市に限るのではなく米國の南部諸州は何處でも此通である。白人が斯く有色人種を虐待するが故に彼等は非常に日本人に好意を表する結果を生んだ。黒人が往來で我等に出會へば大多數の者は敬禮をして通る。汽車などでは僅かに覺えた日本語で「お早やう」などと言つて近付いて來り、中には他日萬一日米戦争があれば我等は立つて日本に組するなどと公言する者さへある。

人道主義を高唱する米國に在つて殊に四海同胞を主義とするキリスト教徒の如きは、斯の如き

問題に對して眞先に熟考すべき筈であるが、其教會堂でさへ白人と黒人とを區別して居るのであるから驚くの外はない。嘗つて或日本人が事情を知らずに一教會堂に入つた所が、それは黒人の教會堂で有つた爲に、彼等は日本人の來會を見て非常に喜んで、元來彼等は傳統的に自分等は白人より劣等なる者と思ひ込んで居たのであるが、有色人の一種である日本人が、日露戦争に於て日獨戦争に於て白人を立派に打ち破つたから有色人種必しも白人に劣る者ではない。假令自分等黒人は一躍して白人に勝つ事は不能であるとしても、日本人の尻馬に乗つて出掛ければ白人と對抗する事が出來ると考へて居る爲に、近年は誠心を以つて日本人を頼りにして居るのである。其日本人が自ら黒人の教會堂に參會したのである故に、彼等は恰も救世主が天から降つた如く喜んで、是非一場の講演をやつて呉れと頼まれて非常に困つたと聞かされた。

三太郎「僕ならば早速やつてやるんだがね。」

五九郎「日本語でしゃべるのなら僕でも出來るが英語演説では大抵の人は困るでせう。」

三太郎「言葉などは何でも構はんさ、心に共鳴する處があれば自然に其意が通ずる物でそれが何よりの雄辯なんだ。」

五九郎「若し君であつたらどんな事を話す所存ですか。」

三太郎「次の様な話でもしたら彼等も喜ぶでせう、私が此土地に來た時に未だ夜明前でありましたから公園に行つて休みましたが、其公園内には白い花が一杯に咲いて居りましたので、如何に白人の公園でも白い花ばかり植え込むとは極端でないかと思ひました。然るに暫くして旭日がさしてから見ると豈圖らんや今迄白いと見た花の大部分は、黄や赤や其他の色がある花ばかりで白い花は格別眼に附かなくなりました。」

諸君よ此世界は神の造り賜へる一大公園であります、唯悲い哉現今は夜明前であります。まだ闇の夜であります故に白い物だけが眼に附くのでございませう。然し乍ら遙に東の空をこゝろなさい、旭日が將に昇らんとして居ります。太陽の光が一度輝けば此世界は有色の世界と化する事疑ひありません。私は茲に滿堂の諸君の御賛成を得て、一日も早く旭日の光が此世界を照らす様に成らん事を神の子エヌ・キリストの御名に依つて、天にまします我等の父に祈りたいと存じます。」

二六 三三九度の御祝儀

米墨の國境に滞在する事約一週間にしてエル・パソ市を出發し、東の方六百二十三哩にあるサン・アントニオ市に向つた。沿道には果樹園多く烏や雀が群集して景氣よく騒いで居る。シーラブランカは禿山にて一本の樹木もなく、山脈を夢の間に横斷し翌朝ホンドウ附近に到れば、沿道の畑は概ね綿が栽培され高さ三四尺にも延びて居るかと思はれた。サン・アントニオ市に着して先づ眞先に自動車にて市内郊外の名所舊蹟を大觀した。幾多の古跡の内には最も注目されたのはアラモ・ブラッツの寺院である。自由の發生地と稱せられて居るが、左方の小庭内に高さ四尺程の石碑がある。志賀重昂氏が千九百十四年九月に鳥居強右衛門の故郷から運んで來た石材を用ひて建てたものである。

敵五千我百五十 彈盡況又絶糧粒

三十二人聞急馳 飛刀亂研冒圍入

入見將軍血被面 兵皆露刃嬰壁立

云々と當時の状況を説明してある如く、當時は千七百十六年に印度人教化の爲に建立せるものであるが、後に城砦に改造せられ千八百三十六年の大戦にはテキサスとメキシコとの決戦地であつ

た。トラビス將軍僅かに百五十名の志士と共に此處に籠城し、國家の爲に死守したのである。地名アラモはスペイン語にて綿樹を意味し、當地附近は最も良く綿を産すること今も昔に變はない。名所舊蹟を一通り大觀してからサン・ペドロ公園に行き、久し振りで鬱蒼たる緑樹の蔭に腰を下した。公園の一方からは清水が非常な勢で湧き出て居る、大體に於て熊本の水善寺境内に似た物であるが、流石は米國だけに其規模は廣大で、池の一部には二三百年を経たかと思はれる大鰐さへ放ち飼にして在る。勿論耶穌教國であるから出水神社など言ふ様な神社はないが、サン・ペドロと言ふ名を見れば何れ宗教家が開いた場所である事は疑ひない。日本ならば弘法大師の御靈場とでも云ふ類かと推察せられた。池の附近に立つて景色を眺めてみると、一人のメキシコ人が来て何乎私に尋ねたけれども、其言ふ事が了解出来ぬ爲に問返したら、知りませんかねと獨言を言つて去つてしまつた。彼が始めに言つた事を心の内で繰返し乍ら五分間程考へて見たら漸く意味が知れた。何の事はない、便所が此邊にあるまいかと云ふ質問なのであつた。便所の事であるからこつそり問ふたのであるが、聞き返されたのできまりが悪くなり去つたものと見える。有智無智三十里と言ふ支那の諺があるが、我々が會話で間誤付く第一の理由は聞いてから其意味

を知る迄に可成時間を要する點にある。彼等の團體は暫時の後に男女合せて三十名程に達したが、清水の流る、汀に並んで讚美歌を歌ひ、次に一人の男が熱心な説教をやつた。嘗てスコットランドに行つた際に、神は全宇宙を家として住ませ給ひ、天地の間に居まさざる處なきものである故に、宜しく青天床の下に於て神を祀る可きものである。人爲的に境界を附けた禮拜堂の内などで私に禮拜するのは神を汚す者である、と言ふ主張を考人から聞いた事がある故に、彼等も亦堂々とこんな公園でお祈りをするのかと思ふて居ると、其内の男女數名が河の真中迄進み乳の下迄水中に没し乍ら直立し、甲は祈禱をなして丙の上半身を押へて急に其頭が全部水中に没する迄に後向に倒れた。所詮彼等の内男二名女二名は浸禮を受けたのであつた、之を見て洗禮と浸禮との區別が始めて納得された。周圍に見て居た多くの白人も浸禮教會に屬して居らぬ者が多いと見えて冷笑的の會話も聞こえた。

白人甲「此河には男子若しくは男兒入るを許さずと建禮があるのに。」

三太郎「何處にそんな事が書いてありますか。」

五九郎「あの太木の幹に札が張り附けてあるよ。」

白人女「あれは遊泳する時の規則です。」

三太郎「成る程男と女とが一處に水泳をやつては悪いと言ふのです。」

五九郎「浸禮を受ける時ならば男と女とが一つ池に混浴しても差支ないのでせうか。」

三太郎「佛教なら一連托生と言ふ處で互に抱き合つても差支あるまい。」

白人女「神の前に立つ時には男とか女など言ふ區別はありません。」

三太郎「男女同權論ですね。」

五九郎「左様すると神前結婚など言ふ事は馬鹿氣た事です、神の前に立つては男女の區別がないなら結婚と言ふ事も意味のないものになる筈ですから。」

三太郎「そんな理窟を並べるものでないよ、宗教と云ふ物は感情の上になり立つ物で、感情は其時限りだから刹那々に都合の良い事を尤もらしく言つて居れば濟むさ。理學と宗教との根本的相違は其所にあるので、理學的の認識が他と異なる點は各部が組織的に統一されて居る事と、其相互間に矛盾がないと言ふ事です。理學者に非ざる者は初めの事と後の事とが矛盾しても一向平氣で居るので、宗教家は其代表者の随一です。」

五九郎「さう言へば慥にそんな物ですね、私の郷里で結婚のお祝ひに鶴と龜の御夫婦の様だと言つて芽出度がつて居るから、鶴と龜が夫婦になつて何故目出度いかと聞いて見たら、鶴は千歳龜は萬歳の壽命があると言はれて居る、其様に長命の男女が夫婦になるなら芽出度にきまつて居ると教へて呉れたが、我々から見ると斯んな不芽出度い事はあるまいと思ふね。」

三太郎「理學的に考へれば鶴龜の夫婦などは少しも芽出度ないさ、千年生きる鶴之助君の處に萬年の壽命ある龜子嬢が嫁入すれば、結婚後約千年も同棲する事が出来る迄だけ考へれば幸福の様であるけれども、千年経つて愈々鶴之助が死亡した後はどうです、龜子未亡人は残り九千年も浮世の荒波に漂はねばなるまい。若し又若いから再縁するとしても二度や三度では追付かず、七人も八人も亭主を見送る事に成る筈でせう、それにも關らず迷信家や御幣かつぎは鶴龜の夫婦なんて喜んで居るからあきれられるのですよ。其處で一つ千年の齡を保つ鶴一君と萬年の壽命ある龜子嬢との間に情意投合して浦島太郎を媒介者に頼んで正式に結婚が成り立ち、賣卜者の判断に任せて黄道吉日を選び芽出度結婚式を挙げたお嘲を致して見ませう。白金や金剛石で高砂の浦の島臺を飾り立て、庭の砂子は金銀の玉を連ねて敷妙の、五百重の錦や瑠璃の櫛、陣礮の行栴、瑠璃の橋、

池の汀の鶴龜は蓬萊山もよそならずと謠ふあたり、如何にも成金の結婚式場らしいではありませんか、成金氣質は日本在來の大和魂から生れ出た物であると國粹會の幹部あたりで主張するかも知れません。

龜は萬年の齡を得、鶴も千年をや重ぬらん、千代のためしの數々に、千代のためしの數々に、何を引かまし姫小松の縁の龜も舞ひ遊べは、丹頂の鶴も一千年の齡を君に授け奉り、と云ふ調子で結婚式も芽出度く終結し、並に一對の夫婦が出来ました。鶴と龜との夫婦であるから其間に子供が何匹生れたか何羽育つたかと言ふ様な精しいお話は略して置きますと、先づ何の變りもなく月日の經つのは早い物でございます。媒介者の浦島太郎は九華の帳を押し除けて玉の簾を巻揚けてつゝ立ち出て給へる姫様の花の顔ばせに眼がくらみ、高砂や此浦風に帆をあけて此浦風に帆をあけて、月もろ共に出で汐の波の淡路の島蔭や、遠く鳴尾の沖過ぎて、拂ふは白玉、立つは縁の空色も、映る海原や龍宮城に着きしかば、八大龍王は百千眷族引き連れ引き連れ、龍女が立ち舞ふ波瀾の袖、龍女が立ち舞ふ波瀾の袖、袖摺り逢ふも他生の縁と龍宮の乙姫様の處に二三日流連したと思つて居ると「鶴一危篤直ぐ歸れ」と云ふ赤札附の手紙を持つて飛魚が飛んで來た。千年

の壽命である筈なのに何の病氣であるかと怪しみ乍ら龜の甲に飛び乗り、太平洋を泳ぎ切り、大急ぎで日本に上陸して見ると自分の故郷は何處やら殆んど見當が附かない位に様子が變り、知人などは一人も見えない、それも其筈、鶴一君と龜子嬢との結婚式を舉げてから既に九百餘年を経過して鶴一君の千歳の壽命が丁度盡き果てたのであつた。龜子未亡人もあの若さで惜しい物だと云ふ評判が近郷近在に隠れないので、鶴一君の一週忌が済むや済まずに鶴次君の處に再婚する事になりました。

梅も色そひ松とても名こそ老木の若緑、空澄みわたる神神樂、歌をうたひ舞をまひ、舞樂を供ふる宮寺の聲も満ちたる有難さ、さす枝の梢は若木の花の袖、是は老木の神松の是は老木の神松の、千代に八千代にやれ石の、巖となりて昔のむすまで昔のむすまで、松竹鶴龜の齡を授くる此君の行末護れと我神託の告を知らする松風も梅も久しき春こそめでたけれ。

幾久しく祝ふ結婚式も無事に済んだので先づ是で一つ安心した浦島太郎、昔は龍宮の花の園に共に眺めし花の色、移れば變る習ひとは言ひ、今は日本の初秋の、獨り眺むる月影も濡るゝ顔なる袂を押さへ、黒潮を便りに再び龍宮の乙姫がもとに出掛けんものと、波路を分けて行く舟の仄

に見えし南洋のヤルト島あたりで椰子酒の御馳走になり、よも盡きじ萬代迄の椰子の葉の酒、酌めども盡きず、飲めども變らぬ夏の夜の盃、影も傾く入江に枯れ立つ足元はよろくと、酔ひに臥したる枕の夢、醒ると思へば泉は其儘、盡きせぬ宿こそめでたけれ、未だ秋風も吹かないから猶一二箇月滞在してと思つて居ると或る朝黒梓附の郵便が一通配達された、誰の死亡通知か知らと取る手遅しと封を開いたら、豈計らんや鶴次君が老衰の結果死亡したと云ふのであつた。千年の壽命がある筈なのに、此夏結婚したばかりで老衰とは合點が行かぬ、夫婦仲があまりによすぎたので腎虛になつたわけでもあるまいと潜航艇に飛び乗り故郷に歸つて見たらば、正直の處口本では既に千年程経過して居たのであります。

笙歌遙に聞ゆ孤雲の上、聖衆來迎す落日の前、鐘の音、念佛の聲、此身乍ら安樂國に生まる、輪廻の故郷隔たれば歡喜の心いくばくぞや、亡夫は不退轉の極樂世界に未亡人の壽命は無量一萬歳なれば猶餘す處八千歳、鶴の脛の長々し夜を衣片しき獨かも寢ん淋しさに絶え兼ねて鶴三君に三縁し、四度目は鶴四郎氏に嫁して見たが半生の五千歳にも未だ足らざれば、花の盛の年頃とて玉珠樓の風の昔、糸竹の調とりづくに心引かるゝ方もあり、引かるゝ儘に鶴五郎君と野合の夫婦

になつて見たがそれも千年経つか経たぬ間に秋草の葉末の露と消え果てたれば、今度は鶴六、次は鶴七、鶴八が死んだ頃には八千歳であつたがまだ二千年近くの壽命が残つて居りましたので、最後に鶴九郎氏と結婚する事になつたが、其際には流石長生の浦島太郎も八千歳の壽命が盡きて今は此世に亡き人の數に入つてしまひ、媒介者となつて呉れる人もなく二十世紀の自由結婚所は高砂の所は高砂の、尾トの松も年ふりて、老の波も寄り来るや、木の下蔭の落葉かくなる迄、命長らへて猶いつ迄か生の松。何時迄もく長く生き過ぎた結果として寄り来る老の波で蹴だらけになつた顔をセメント入れの白粉で固め乍ら、九度目の結婚式を挙げた龜子未亡人の悲慘なる物語、是が讀んで字の如く本當に慘々九度の御祝儀であります。

鶴や龜の長壽にあやかつたばかりで、九度も結婚をしなければならん様な慘々な目に逢ふ事になる、それではあまり芽出度もない故に、縁起直しとして初回の結婚式の晩に三々九度の杯を一度に纏めて飲んでしまへばそれで済む道理である、是が即ち三三九度の杯事の由來、そんなつまらない由來のある三々九度の杯事などをするのは馬鹿々々しいとさとられた方は、一層の事鶴龜など言ふ迷信的な縁起物を持出す事を止めれば良い。さうすれば禁酒令を犯して迄も三々九度の

杯を擧げる必要などは無くなる筈であります。

## 二七 精神療法の大家

そんな話をして居ると空中遙かに異様の音響が聞えて来たから、まさか天使の御降臨でもあるまいと思ひ乍ら天空を仰いで見ると、西の空から飛行機が一臺飛んで来り、公園の上で横轉や逆轉色々な曲乗を演じて飛び去つた。暫くすると、二十餘臺の飛行機が鴈木形に並んで西から東に飛んで行く様は全く鳥類と區別がつかない。當地は米國陸軍の飛行隊本部所在地である。

五九郎「飛行機も長足の進歩をした物だね、僅か十二年前に初めて飛行機を見た際には、理學の進歩した獨逸でさへ満足に飛べる飛行機が無くて、伯林の練兵場でチツベルが飛ぶとか飛ばぬとかで、あの寒い節に三日も見物に出掛けてやつと飛んだのを見る事が出来た程ですのに、今では全く鳥其儘ですから驚くね。」

三太郎「正直に言つたら鳥以上でせう。鳥類は天帝が造り給うた飛行機であるから、鳥を眞似て機械を造れば宜しいと思つたのがそもそもの誤であつたのです。造物主など云ふ下らない迷信

の爲にいくら飛行機の發明が遅れたか知れた物でない。鳥の飛ぶのを手本としたからこそ長い間鼓翼式に頭を痛めて居たが、とう／＼物に成らずに却て現今の様な鳥とは全然飛び方の違つた物が先に發明されたのです。」

五九郎「生物には營養を身體全部に循環させる爲に身體各部を血管や筋肉に連續する必要がある。従つて身體の一部を無限に一定の方向にのみ回轉させる時は、血管其他の筋肉が捻ぢ切れてしまふ恐れがある故に、必ず時々逆に戻す必要がある、是は力學上から言ふと非常に不經濟な事ではあるが生物としては止むを得ないです。」

三太郎「それが即ち造物主の造つた飛行機の大缺點なんです。萬一鳥類が天帝の造り上げた飛行機であるならば天帝は餘程頭の悪い發明家であると言ふ事になる。人類が飛行機を造り掛けてから現今の立派な飛行機に仕上げる迄に費した年數と、天帝が現今の如く満足に飛べる鳥を造り上げるに要した年數とを比較したら全でお話にならないです。」

五九郎「人類の造つた飛行機は見掛は立派でも時と墜落するから自慢には成りませんまい。」

三太郎「造物主の造つた飛行機だつて満足な物は澤山あるまい。鳶や鳥は可成り飛ぶけれども駄



鳥の様な不飛號とでも言ふべきものがあり、鷺鳥や鷺なども水上飛行機の出来損ひではありませんか。』

五九郎「人類が飛行機の研究に頭を突き込んだのだつて五百年や千年の近頃ではありませんよ、大古の天文學史に残つて居る詩人の空想は別問題としても、先づ歴史的に古い所ではベルシャヤクシヤクザレスの玉座などがある。』

三太郎「あれは飛行自在の玉座と言つても、御輿の四方に屈強な鷺を結び付け、其上に肉を吊して置けば鷺が肉を取る積りで飛び上がると言ふ考案であるから現今使用せらるゝ様な飛行機ではないさ。』

五九郎「第一世紀の中頃で、暴君として有名なネロ王の朝廷で魔術師のジモンと言ふのが御前飛行をやつたと言ふ記録もありますよ。尤も其折には宗教家のサン・ピエルと言ふのが御祈禱で其飛行力を失はしめた爲に墜落したさうだがね。』

三太郎「宗教家と言ふ者は何時の時代でも新しい思想や貴重な發明を妨害する者であるのには閉口するよ。併し考へて見れば飛び上るのにこそ非常な苦心を要するけれども、墜落させるのに祈

禱もヘチマも必要ではあるまい。何時か甲州に旅行した際に、富士川の沿岸なる鵜澤で有名な小室山に参詣した事があるが、此寺は昔からの日蓮宗ではなく、初めは善知法院と言ふ有名な山伏が當時の住職であつた。然るに身延山に居る日蓮が次第に此邊迄勢力範圍を擴張して来て、竟に法院と法論をする事に成つた。其時の遺跡として法論石と言ふのが今でも祀られて居る。傳説に依ると、其際に善知法院は眞言密法を以て其法論石を空中に吊上げて見せた處が、日蓮は更に妙法の力を以て是を再び地上に墜落せしめた爲に日蓮の勝ちと成つたと言ふ話であるが、我々から見れば萬一是が事實であるならば、明に善知法院の勝で、日蓮は平凡な人間であると言ふに過ぎなくなると思ふ。何故乎と言ふに、あの石は分量にしてざつと四千貫はある。それを空中に吊り上げると言ふ事は人間業では出来ない仕事であるから、之を吊り上げた密法には人力を超越した不可思議の力があると言ふ事になる。然るに空中に吊り上げられた物が落下するのは萬有引力に基く自然の法則で、別に珍らしい事でも何でも無いでないか。或は又人間同志の力較べにした處で、重い物を持ち上げるのとそれを持ち上げ得ない様に邪魔するのとは其難易に於て雲泥の差があるでせう。法華の信者があんな傳説を得意氣に流布するのは寧ろ最負の引き倒しではあ

るまいか。」

五九郎「不思議の法力を認める宗教上の立場から言へば其通りに相違ないが、それよりもそんな超人間的の力を全然認めない理學的の立場から言へば明かに日蓮の勝になるさ。何故と言ふに、四千貫もある大磐石を密法の方で空中に吊して見せるなど言ふ善知法院は、山師坊主で「何事も天然自然の法則に従つて、それに逆らふ様な馬鹿な真似をしない日蓮の方が得度して居ると言ふべき者でせう。」

新聞を見ると偶然にも飛行機に關する記事がある。今度の戦争で航空事業に費した金額は二十五億圓で、出来上つた飛行機は七百四十臺とある。其内二百十三臺は官製の粗悪品で残りの五百二十七臺は聯各國から購入した物だが、いくら高く見積つても合計一億圓あれば充分である。故に差引二十四億は行衛不明だが、委員の甲は自分の會社に都合の好い鐵道を引いたとか、乙は不必要な物を自分の會社から買上げたとか、或は一人で三千萬圓も着服した者があるなどと評論して居る。目今の處では流行物だけに航空費は何處の國でも空費される物と見える。是が自稱の公空費と云ふのかも知れん。

こんな事を考へ乍ら市の大通りをぶらり／＼散歩して居ると、日本料理店と言ふ看板が目に着いたから夕飲を其處で済ませた。名は日本料理店で主人も日本人であるが料理は寧ろ支那風である。支那料理店は米國到る處に散在し白人容にも可成り受けが良い様子であるが、純日本流の料理を賞美する歐米人は殆んどないかも知れん。當市に居留せる日本人は七八名に過ぎんと言ふ事である故に、日本流の料理では商賣にならぬ物と見える。當市の科學協會では、ドクトル・ランクフオールド氏が「菜食は人類を心身共に縮少せしむ」と言ふ題で講演し、其實例として日本人を引證して居るのは良いが、徳川時代に日本の人口が減少した理由を其菜食主義に歸したのは餘りに淺薄ではあるまいか、如何に肉食を奨勵しても、避妊法を講じ墮胎を行ひ、更に初生兒を天國にお返しする事を公許して居た徳川時代に人口の増加が見られる筈があるまい。米國學者の議論が正しいならば、絶體に菜食主義の僧侶よりは昔から牛馬の肉を手當り次第に喰つて居た穢多の方が遙に優良なる人種に進化して居る筈だ。更に、況んや近頃米國の排日派が論じて居る日本移民の繁殖率が米人の數倍であると言ふ如き統計は虚偽の物で、理論上あり得べからざる事であるまいか。

精神療法の大家ゼームス・モールヒツクソンと言ふ耶蘇坊主が遙々英國から昨年四月出掛けて来て、米國の重なる都會を偏歴し、目下は南部地方に來り、二日間當市のサン・マルクス教會堂で治療を試みた。彼が一度其手を觸るれば如何なる難病も立ち處に全快すると言ふのであるが、一寸見た丈では普通の商人と異なる處なく靈の人とは受取れぬ。近郷近在から集まれる者水曜日は千人木曜日は二千人と稱せられ、教會堂附近一町四方程は老若男女に充ちて居る。何れも顔色の悪い見ても不快な病人ばかりであるが、物は試めしと言ふ諺に従ひ、申込紙に國籍、宗教別、職業病名など書いて出し、一列に成つて坊主の前を通過すると、彼は兩手を頭の上に載せて、「神は汝に幸する云々」と簡単な祈禱をする丈であつた。翌日の新聞を見ると、病を癒さんが爲に此教會堂を指して重病人を運んで來る途中で、早くも天國に旅立ちした者が五六人あつたと云ふ事で、サン・マルクス教會堂に來てヒツクソンの如き山師坊主の前に出るよりも、天國に昇りて神の前に到る方が遙に幸福かも知れん。木曜日の午後には、更にサン・ヒリツプ教會堂で黒人の爲に特別の集會を催した。米國ではキリストの力で病氣を治療するのにも人種差別が必要と見える然し、噂に依ると彼の神通力に依つて山さへ動かしたと言ふ事であるが何處の山であるか誰も知

る者はない。入場した初めに彼の演説があつた。

ヒツクソン「私の疾病治療法は催眠術とは何等の關係がある物ではない、去らばと言つて精神が物質を支配すると言ふ如き理由に基くのもありません。全く精神と物質とを兼ねて支配する神の力に依るのであります。罪とか病とか云ふ様な肉體的事實は之を認めざるを得ぬが故に、之を治療せんが爲には醫者の力とか神の力に頼らなければならんけれども、更に深く考へて見ると、疾病治療は元來神の力に依つてのみ出来る物であつて、唯場合に依つての醫藥と云ふ如き仲介者に依るのであります。従つてそんな間接な方法を探らずに直接神の力に頼るのが早道であります。但茲に疾病を治療するのは決して私個人の力では無く、單に精神と靈魂と肉體とのあらゆる病を治療する事を旨とせる生きたるキリストの眞理が、此私を介して實現されるに過ぎません。それでありますから皆様方は、私の手で疾病を治療さるゝ前に先づ完全なるキリストの信者であらねばなりません。』

説教が了つてから最初に子供、次に婦人と云ふ順序に十數名宛列をなして氏の前に行くのであるから可成り時間を要する。

隣人「聴く處に依ると、彼は子供の時は濠洲に育つたのであるが、何時の間にか疾病を治療する事を覚えて友人のリウマチと叔母の顔面神経痛を全快せしめた。勿論兩人共に非常な信仰家であつた事言ふ迄もない、其處で彼の母が、それは神から授かつたものであると言ひ觸らしたが、氏自身はそんな魔力を持つて居るのではなく、此世に疾病を治療し得る能力ある者はキリスト一人のみであると言つて居るさうだ。』

三太郎「それは當然さう言ふ可き筈でせう。萬一自分が病氣を全快せしめる能力があると斷言して置いて、折角來會した者の病氣が癒えぬ場合には如何とも仕様がなくなるではないか、其處で自分には直接そんな神通力がないけれども、來會者が完全なる信仰心を以つてキリストにすがれば神の力に依つて全快すると説教すれば後になつて迷惑が懸らん勘定でないか。』

五九郎「病氣を治するのは自分の力ではなく、單にキリストの力が自分を介して働くのであるといふ説教は巧妙なやり方ですね。都合よく病氣が治れば自分の手柄になるし、若し病氣が全快しない場合にはそれは信仰心が足りない爲であると言へば夫で済みますからね。殊に二千人も集まつたのであるから、其日の内か翌日頃から多少は病氣が良くなる患者もある筈ですから。』

三太郎「それは當然あるさ、千人の内には二人三人は全快する者もありませう。考へても見給へ。茲に千人の病人があるとすれば千人が千人迄残らず不治の病に懸つてゐる者とはかりに限るまいでないか。假に其内五百人は不治の病の爲に早晚死亡する運命に置かれて居るとしても、残りの五百人は不日快方に趣く筈である。果して然らば其五百人の内から毎日三人や五人位は病氣が少し宛輕快に成る道理でありませう。そればかりではありません、千人が千人死亡する運命に在る病人でも、病狀は必ずしも進む一方であるに限る者では無く、通例は一進一退、重くなつたり快方に趣いたり波の如く變化するものであるから、丁度其翌日から輕くなる病人が千人の内に五人や十人あつた所で不思議でも何でもあるまい。』

五九郎「重病人をあんな處にかつぎ込んだから死ぬる者もあるにきまつて居るさ、死んだのは知らん顔をして置いて直つた者丈を自分の手柄顔に言ひ立てるのは非道いですね。』

三太郎「それは必ずしもあの山師坊主ばかりではないさ、何事でもさうでせう、所詮世人には數量的の頭腦が無いから、どれだけ果して當事者の手柄に歸す可き物であるかを正當に判斷する事が出來兼ねるのです。』

五九郎「正確に決定する事は容易であるまいが、然し大體の見當を附ける事は出来ませう。例へば參會者千人の内、六割五分は不治の者としても三百五十人は全快の見込がある。其處で更に其見込のある者の内にて二割は五週間以内に當然全治する者とすれば、一日平均二人は全快する勲定になる。残り二百八十人の内には早晚全快するにしても目下の處では病氣が今後一層重くなる者もある筈でせうから、半數の百四十人は五週間以内に病の峠を越す者とすれば、一日平均四人宛は快方に向ふ事になる。更に全快の見込なき患者六百五十人と雖も、其病氣は時々軽くなつたり重くなつたりする筈であるから、平均して六ヶ月に一回宛一寸軽くなるとしても一日平均三人六分宛臨時に快方に向ふ割合になるから、祈禱後約一週間以内に全快せる者と、快方に向へる者と合計して六十七人は出来る道理である。従つて千人の内にて六十人や七十人快方に向つた病人があつたとて、それは少しも祇禱が効驗ある證據にはならないのです。それを自分の手柄顔を廣告し、世人も亦それを信ずるから馬鹿の骨頂と言ふ者です。」

三太郎「世の中は凡てさうしなければ商賣にはならんさ、取引所の近所に私が知つて居る易者があつたが、相場師が見て貰ひに来ると十人の内五人には相場が下るから先を賣つて置けと教へてや

り、残りの五人には必ず上るから今の内に買へば利があると云つてやる。是が當りが有つてはづれのないやり方なんだ、相場が實際に上つても下つても五人の者は大利を占めるから必ず御禮を持って来るにきまつて居るが、はづれた五人は、易者に見て貰つて相場に損をしたなど言ふのは自分の恥辱であるから泣寝入に成つてしまふ。十人が十人みんなから御禮を貰ふなどと慾の深い事を考へるからこそ事が面倒になるけれども、半分で我慢して置けば上手も下手もありはしないよ」

## 二八 舞踊禁制

日本の内地では膝栗毛に鞭打つて歩き廻つた三太郎と五九郎も、流石に米國に来て見れば大國だけありて、一寸隣の都會に行くと言つても最大急行車で一晝夜を要するのであるから、出掛けるとなると直ぐ汽車が然らずんば自動車と言ふので、驥足を延ばすに處なしの嘆がある。都會の中央に宿所を選べば郊外に出掛けるに二三里はある。郊外の百姓家となれば右隣は一哩を隔て、向ひの家迄は三哩もあると言ふ程度であるから驚く。酒屋へ三里で豆腐屋へ十丁などは至極便利

な場所、南加地方に於ける日本移民の部落では、豆腐屋が自動車で朝飯前に三十哩走り廻らなければ商賣には成らんと云ふの一事に依つて判断しても、膝栗毛では到底駄目である事が伺はれる筈と思ふ。急行車に乗つて居乍ら空中の飛行機を眺めてはうらやましくなる。一刻も早く目的地に到着したい。米國の汽車旅行は實に不愉快だ、單に列車の震動が烈しく運轉手が發着毎に下手をやるばかりでなく、沿道に何等見るべき山水の景色が無い。事實上に於て山もなければ水もなく、あるものは單に空漠な荒野と苦で掩はれて生きて居るか枯れてしまつたか見當のつかない雜木林のみで、耕地には棉樹の枯れたのが散亂して居るに過ぎん。

早朝ニウ・オルンアン市に下車した。當市は世界で有名なるミシシッピ河の沿岸に位する北米東南地方の大都會で、西曆千六百八十三年に佛國の領有に歸し急激の發展を遂げ、同國皇帝ナポレオン一世がウオターローの一戦に敗れてセント・ヘレナに流された際には、是を奪ひ取つて當市に伴ひ、再舉を成さんと企てた舶來の名和長年とも稱すべき、當市の市長にして百萬長者たるニコラス・チロード氏が建設せるナポレオン御殿は今も猶市内の名所に成つて居る。其後千七百六十九年に西牙領と成りたるが、星遷り物換り、第十九世紀の初頃から現在の如く米領に歸し

たのである。従つて市内の發展が三階段に分かれ、建築物は勿論の事人種も風俗も今猶三種の區分が明かに成つて居る。膝栗毛に乗つて市内を大觀した所に依ると、往來の兩側には屑物や不潔物が散亂して居て恰も豚小屋近傍の如く見るに堪えざる物がある。

五九郎「思ひの外に不潔な市街ですね、大道に屑物をこんなに出しつばなしにして置かんでもよさそうに思はれるが……」

三太郎「朝早くは何處の都會でもこんな物さ、前日の不潔物を屋外に出して置けば今に掃除人が巡回して來て全部是を市外に運び出し、奇麗に片附いた頃に市民が眼を醒まし店の戸を開く順序に成つて居るのです。それを我々がこんなに早く見物に出掛けたから未だ掃除前なんだよ。」

五九郎「日三竿と迄は行かずとも太陽が既に昇つて居るではありませんか、大都會の人は未だ夜中のつもりで寢込んで居るのだね、是が日本の田舎であれば今頃は門前が奇麗に掃かれて、掃を入れた跡が正しく残り、家の奥から爺さんや婆さんが朝のお勤めをする木魚の音がほこくと聞えて來るので、何となく俗塵を離れた様で新鮮な氣持になるんだがね。」

三太郎「大都會と婦人は夜に見るべき物で夜が明けてから見る可き物ではありませんよ、朝早く

見れば誰でもあきれてしまふ様な醜體がさらけ出されて居る物です。それですから都會の人間と婦人を愛する者には朝寝が絶対に必要な條件なんだ。悉達太子の如き大慈大悲の心を起した人物でさへ、愈々御殿をしのび抜けんとし局々を過ぎて通る際に、宵寝熟睡の女官達の不仕駄良な寝相を見た際には嘔吐を催したと言うて居るよ。」

五九郎「それで朝起に山門の徳ありと言ふのか、つまり早寝早起は女が嫌になるおまじないなんだね。」

郊外には大公園がある、周圍十餘尺もあるべきオークの老樹が鬱蒼として密林をなし、此地方に特有なるスペイン昔は緑の枝に懸りて數尺乃至一丈餘の長さに垂れ下がりがり、遠望すれば恰も藤の花が盛りに咲けるかと疑はれた。六月初旬ではあるが流石は暖國の事であるから、池中には白服の青年が天女の着る羽衣かと思まがふ様な薄衣を着た乙女等と共にボートを漕いで居る。

三太郎「此方に来て見給へ、此池には珍らしいスワンが居るよ。」

五九郎「スワンと言ふのは白鳥の事ではありませんか、いくら田舎者でも白鳥位を珍らしいとは思はんよ。」

三太郎「英語の先生からスワンを白鳥と教はつた君に取つては無類の珍品に相違ないから来て見給へ、スワンはスワンだが白鳥ではないんだから。」

五九郎「白鳥でないスワンでなんの事だい、成程是は黒い白鳥か、米國の南部には黒人が澤山居ると言ふ事は前から聞いて居たが、白鳥迄黒いのが居るとは氣が附かなんだね。」

三太郎「黒い白鳥では意味を成さんでないか、スワンを白鳥と譯するからそんな事に成るんだが其論法で行くと米國には眞黒な白人が居ると言ふ事になりませう。」

五九郎「色が白くとも腹が黒い人と註解すれば別に差支はありませんまい。」

三太郎「黒いスワンの喙はあんなに色が赤いが、黒人も唇の非常に赤色なのが眼に着くのを見ると、身體の眞黒である事と唇の赤色なる事との間に何か離る可からざる關係がある物と見えるですね。」

五九郎「普通斯う言ふ物の黒いのは、夜の暗いが如く色の要素が缺乏して居る爲ではなくして、赤い色素が濃厚に過ぎたる結果黒ずんで見える物なんです。つまり走色の血液が結滯して黒色になると同様なんです。従つて黒い者の肉體で色素の薄い處は赤く見える筈さ。」

鳥類學者として有名なるオーヂュボンの記念として出来たオーヂュボン公園は、面積二百八十英町で其中央には大學がある。宗教の力で漸く烏合の衆を統一して居る米國の事であるから、一二世紀前の歐州同様に大學で一般立派な建築物は附屬の教會堂である。是は日本の學校に於ける講堂に相當する物である事は言ふ迄もない。當大學に於ける最近の問題は學者の舞踊禁止の件である。他の南部諸州に於ても、男女の生徒が一組になつてダンスをやるのは百害あつて一利なき故に禁止した方が宜しいと言ふ説が次第に勢力を得て居るが、現在の所では日本の豫習教育の様な物で、弊害を認めては居るが、それを學校で禁止しても一般社會で行はれて居る以上は實効が擧がらないのみならず、學校でやるのなら相當の監督をする事が出来るけれども、學校で禁止すれば學校以外の怪しい場所へ出入して放逸なやり方をするから却て弊害が多いと言ふ論が勝つて其儘に成つて居る。然るに當地の大學では、數年前からは是が禁止を勵行して居る爲に、三個の學生團體が聯合してダンス禁止令の撤廢を大學の當局に請願したのである。米國の如き自由の國で、然も昔から行はれて居たダンスを斷然禁止しなければならぬ立場に到りたるを思ふ時に、男女學生がダンスの爲に如何に不健全な者に墮ちてしまふかを想像する事が出来る。大學

總長は此請願を許容すべき限りでないと明言して居るが、學生間は適當なる條件の下には再び許しても差支ないと言つて居る。適當なる條件とは何かと言ふに、それは過度に熱中せざる事と女學生の服装を制限する事とである。

五九郎「服装の制限などは大した問題でない様に思はれるが何乎込み入つた事がありますか。」  
案内者「大にありません。ご存じの通り男學生と女學生とが組に成つてダンスをやるのでありますから自然に服装の競争が女學生間に起ります。」

五九郎「競争心があつても金がなくては出来ない筈ですから、一定の所迄行けば自然に止まるではありませんか。」

案内者「其所に非常なる危険があります。金がないからと言つて競争を止めて呉れば何も問題が起る筈はありませんけれども、さういふ場合には金をいくらでも出して呉れる者が出て來るから弊害があります。」

五九郎「餘る程金を持つて居る人が出して呉れるのなら差支ないではありませんか、早い話が大學だつて他人から金を出して貰つて居る筈でせう。」



案内者「出す人が男ですからね、日本では藝者がやつぱり服装の爲に苦勞すると言ふでありませんか、日本の婦人会で印刷した何者乎是藝者と題する小冊子を読んで見ましたが、藝を賣るだけでは春着の新調が出来んさうで、日本に觀光に行くのは宜しいが藝者に接近するのは悪いと書いてありましたね。」

三太郎「私にも了解出来ました。所詮米國の女學生はダンスの爲に日本の藝者と同じ道を進む事になると言ふのでせう。」

五九郎「それでは日本の矯風會の役員達が來たら、差當り女學生廢止の大宣傳でもやらなければならんわけですね。」

三太郎「まさか女學生を廢止する譯にも行きますまい、それに女學生の本分を守つてさへ居れば社界的に害ある者でないのですから廢止運動迄せんでも良いではありませんか。」

五九郎「本分を守ると言つた處で駄目でせう、節酒は事實上出来ないから禁酒令を出し、藝者は藝を賣る丈に止まる事が出来んから之を全廢しようと言ふのが米國流の婦人の持論でありませんか。其論法で行けば米國女學生全廢論が成り立つ筈でせう。」

三太郎「いくら新しい女でもまさか女學生全廢の宣傳はやりませぬ、同士打ちになるからね。」

案内者「女學生を全廢する必要はありません、つまりダンスを禁止すれば濟む事ですから。」  
三太郎「我々日本人から見ると、禁止せんでも弊害がよい程度に節する様にすれば差支ない事と思ふが、米國人は何でも熱中する人種と見えるですね、殊にダンスなどはそんなに熱中する程面白物でせうか。」

案内者「日本人はダンスの味を知らんからそんな事を言ふけれども、ダンスだけは未開時代から唯一の社交的事業として實行された物で、宗教でさへ昔からダンス無しでは信者を集める事が困難であつたと言ひます。」

五九郎「日本でも天理教などは矢張舞踊を盛にやつて信者を集めて居ますからね。」

## 二二九 聖靈降臨祭

宗教とダンスそれは離るべからざる關係がある。殊に未開時代に於ける宗教は舞樂と音樂とか

ら出来て居たと言つても差支ない乎も知れん。西洋の耶蘇教の一派プレスビテリアンでは、今日でも聖靈降臨祭に教會堂の内にてダンスをやるのみならず、更に進んでは自由戀愛を實行して居る。嘗て横濱で富豪の母と娘とを家出させて、世上の問題となつた怪教會ベンテコステと稱するものが即ち其一種である。信仰のクライマックスに達したとき精神が全く統一されて無我の境に入れば、此時こそ眞の神の御言葉が聞かれる時であると宣教師が説明するが、我々から見れば其時に凡ての罪惡が教會堂内て公々然と行はれるのであります。勿論神は即ち愛なりと信する信者から言へば神に對して何もやましい所はない筈である。是に關して面白い裁判が米國に起り、次の如き問答がありました。

裁判官「被告は聖靈降臨祭に於けるベンテコステの舞踊者の一人でありますか。」

被告「否、私共はベンテコステの舞踊者ではございません。自由戀愛主義のバーニング・ブツシ徒が即ち聖靈降臨祭の舞踊者なんです。我々は世人からは聖靈降臨祭の舞踊者と呼ばれて居るけれどもバーニング・ブツシ徒ではございません。」

裁判官「被告は如何なる點に於てバーニング・ブツシ徒と異つて居りますか。」

被告「彼等バーニング・ブツシの徒輩は、自由戀愛を信じて居ります。自由戀愛の爲に彼等は舞踊をやるのであります。」

裁判官「聖靈のバプテズマは微妙なる舌の先に自己を現前せしむる物であると被告は言はれたのですか。」

被告「左様でございます。キツスに依つて聖靈のバプテズマを受ける事が出来ると信じて居ります。」

裁判官「信者に成れば如何なる効果がありますか。」

被告「歡喜を以つて禮拜する力が益々強くなります。」

裁判官「信者は舞踊を崇拜すると言ふのですか。」

被告「左様ではございません。」

裁判官「聖靈が信者をして手の舞ひ足の踏む處を知らざらしむるに到る事を希望するのですか。」

被告「實際左様ではありません。聖靈が我々にダンスをやらせる物でなく、唯我々がダンスに依つて有頂天に成つた際に聖靈が降臨せられる丈です。」

裁判官「ダンスをやれば全く魂が天外に飛ぶ程楽しく感ずる事が出来ますか。」  
被告「天帝が我々のダンスをお望みになれば我々は何時迄もダンスをやります。舞ふも踊るも神意の儘に従ふのみです。」

裁判官「愈々聖靈が降臨せらるゝ際には自分の手近にある婦人を誰彼の差別なく抱くのですか。」  
被告「否、私共はそんな無理な事は致しません。」

裁判官「婦人が相手に成る事を拒めば無理には強ひないと言ふのですか。」  
被告「婦人はさうされる事を望みますまい。」

裁判官「然し誰か外の人々の内にはさう云ふ事をする者もあるでせう。」  
被告「はい、バーニング・ブツシ派の信者は其通致します。」

五九郎「全體それは何の裁判でございますか。」

案内者「是は先日或教會で聖靈降臨祭の舞踊會に亂痴氣騒ぎをやつた結果、トーマスと言ふ信者が教會堂の扉を一枚破損したので、教會の書記ウキーリアムから二十弗の損害を訴へられた一件なんです。其處で辯護士の辯論に依ると、自由戀愛主義の信者がダンスの最中に直接行動を取る

に到つた爲に大混亂を來たし、扉の損傷したのは事實であるが、それは公衆全體の責任であつて被告の關知する處でないと云ふ主張の様でした。」

五九郎「日本ならば鯨の化物が飛び出すと言ふ一件ですな。」

三太郎「西洋の建物は頑丈に出来て居るから地震と間違へらるゝ恐はありますまい。」

五九郎「それでも扉が一枚損傷したと言ふなら強震の方でありませんか。裁判の結果は畢竟どうなりました乎。」

案内者「流石の裁判官も被告の話を聞いて聖靈降臨祭の内幕を知りあきれた物と見え、被告が陳述せる如き新主義の宗教は所詮ギリシヤ時代のオルヂーを再興するに到る恐れがあると憤嘆して居りました。」

五九郎「バーニング・ブツシと言ふのは一體どんな宗教なんですか。」

案内者「是は元來プレスビテリアンと稱する舊教の一種ですが、第十七世紀の頃スコットランドに於て英國の新教徒が政府から大逆殺を受けた事がある。其際に信者が未だく焼き盡されないと云ふ反抗の意味から、鐵が火に焼かれて居る徽章を作りて附ける事にした爲に、世人は彼等を

バーニング・ブツシ派の信者と呼ぶのです。』

五九郎『面白い徽章ですね日本の俗歌にも

わしとおまいは焼野のかつら

蔓は焼けても根は残る

と言ふのがあるけれどそれを具體化して胸に附けて居るとは振つて居るね、それからオルチーと言ふのは何の事ですか。』

案内者『それは昔ギリシヤやローマの民族間に盛大に行はれたディオニソス崇拝のお祭りです。婦人が享樂を意の儘にする宗教的祭禮でありまして、後世になりては單に市街を遠く離れた山に牡牛を連れて行つて是を鬪り殺しにし、其肉を喰ひ、終夜松明の下に舞踊をやる様に成つたが、太古の世には勿論是等の婦人團體が男子を浚つて行つて獸慾の犠牲にした物かと思はれます。』

五九郎『西洋の女尊男卑と言ふ事は太古時代からあるんですね、婦人が男子を浚つて行くなどは日本で想像も附かん事ですな。』

案内者『南太平洋のマルケサス島では、現在でも獨身の男子がうつつかりして居ると婦人連に浚は

れて行く恐れがあるそうですよ、ロス・アンゼルス・エキスプレス社の記者で植物學者たるフレデリック・オブライアンと云ふ人が、先日南太平洋の探險から歸つて來ての噺ですが、二十世紀の今日でも太古其儘の處が残つて居ると見えるです。』

五九郎『太平洋の南には女護島が今でもありませんか。』

案内者『其人は南洋奇談と言ふ探檢記を出版して今では第四版迄賣り出して居りますが、それに依ると、彼が山地を探檢して居た際に、不意に島の一婦人が現はれ來て自分を頭の帽子から靴の端迄見上げ見下した後に、私に慣々しく言葉を懸けて附近の廣場に案内し、荷物を下して茶を出すやら菓子をすゝめるなど色々と優遇した上に、突然抱き附いて來たには驚いた。それから顔の香を嗅いだり手の皮を撫で、見たりするので好奇心にかられて其儘に任せて居ると、道案内の者が私に注意して呉れた。あれは山女ですから御用心なさい、浚はれて行けば非道い目に逢ひますぞと。其處で好い加減にして逃げ出すと、案の如く彼女は私を再び連れ込もうと恐ろしく興奮した表情をして、洋服をつかむや暴力で引き戻さんとするのを強いて離して逃げて來た事があるが其後島人の噺によると山女は恥と言ふ事を知らず、附近に男子の旅行者を見附次第直に之を捕へ

て自家に連れ歸り優遇知らざるなく、一婦人にして數名の男妾を圍ひ置く者尠くないと言ふ事です。」

三太郎「聖靈降臨祭と言ふと一寸人聞きは良いけれども、美男美女が宗教の名を以て大醜會を催すお祭の事に過ぎんのか、聖靈降臨と言ふ事は所詮マリアが聖靈に感じたと言ふ其聖靈が降臨するお祭なんだから、元來は受胎を目的とする男女の會合に過ぎないのです。此祭はギリシヤ時代には盛大に行はれた物でジュデヤ教の大切な祭禮であるが、聖母マリアも亦其祭日の晩に受胎をしてゼサスを生んだのです。それですから耶蘇教に成つても其儘受繼いで三大祭日の一つにしてあるのです。」

五九郎「成る程、それで初めて日頃の疑問が氷解した。日本では膝栗毛の彌次さんの名からヤヂルと言動詞が出来た様に、マリアが聖靈に感じて受胎したからマリアから出来たマリエと言ふ動詞が合致すると言ふ意味になり、更に之を變化してマリアーチと名詞にすれば結婚と言ふ事になるんですね。」

三太郎「多分左様でせう、結婚と言ふのは要するにマリアのやつた様な事をするのが目的なんだから、孔子の弟子が何爲に娶る乎と質問した際にも、子あらんが爲也と孔子が即答して居る筈です、聖人の言ふ處は簡單明瞭でありませんか。」

五九郎「其點から論ずると、近頃の米國婦人が盛に宣傳して居る避妊法などは、マリアーチ本來の目的と矛盾して居る道理ですね。」

三太郎「彼等は既に性慾の奴隸に成つてしまつたのだから論外さ、先日南加地方に行つた時に、日本人は子供を澤山生むと言ふ事が排日の理由になつて居ると言ふ漸が出たら、米國婦人聞には近頃マラス主義と言ふのが流行して居る故に子供が生まれません、いくら新しい女でもマラス主義とは思ひ切つて皮肉な名前を附けた者だと一人の百姓が言つたので大笑ひした事がありますよ。」

五九郎「新マルサス主義と言ふのを聞き違へて日本語のつもりで居るんだね。」

米國婦人は實に意外な事を平氣でやるから、無學な移住民がマルサス主義をマラス主義と間違ふ位は不思議でも何でもあるまい。誤の功名と言ふ事もあるから間違の方で却て適切な名稱かも知れん。大學を辭して再び公園に出で、新聞を一讀すると米國婦人が猿とキツスをして居

る寫眞が掲載されてあり、其下に次の如き句が記されて居た。  
何故に米國の婦人が猿とキツスをせざるべからざる立場にあるか、  
吾人は未だ答ふる處を知らず

一婦人が種類の如何を問はず、動物の一種とキツスするの必要を吾人は認むる能はず  
犬猫若しくは猿などを相手として燃ゆる如き愛情を消さずとも他に適當の方法あらん  
自己の愛兒を有せざる婦人は須らく隣家に行け、隣家の主婦は是に依つて暫時たりとも救はる  
、事を得べし

或は育兒院を訪ふも可ならん

小兒に満足を得ざる婦人は養老院に往け

若し何者乎をキツスせんと欲するの心切なる者あらば須らく人類を選ぶべし、若きも老ひたる  
も好みの儘なり

何處に猿とキツスする必要ありや、我米國を男ヒデリの國と誤解する勿れ

### 三〇 靴足袋の失敗

舊世界の佛敎國であるならば、二月十五日が佛涅槃の日である。新世界の耶蘇敎國たるニウ・  
オルレアンズ市では謝肉祭の最後の日が恰も十七日に當るので、舊敎の勢力範圍たる當市では、  
其日に精進を下りて底拔騒ぎを成すのが年中行事の一つに成つて居る。尤も大戦中は遠慮してお  
祭騒ぎを中止して居たが、平和克復し黄金の波が國內に充滿して居る今年は久し振りにて大々的  
の大祭を行ふ事となり、前景氣丈でも驚く程である。當日の花車は各町思ひ々の名案に委する  
事は日本の祭日と同一であるが、當日のクインたる可く選ばれたる者が使用すべき黄金の冠は  
既に出來上りて店頭飾られて居る。近郷近在から見物に出掛くる群集は、一月も以前から宿所  
の豫約を申込み、花車の通る街道の兩側は見物人を入れる棧敷の建設で大混雑して居る。嘗て歐  
州に於て此宗教的大祭を見た事があるが、假面を附けたる無数の男女が踊り狂ひ、全くの無禮講  
で誰彼の差別なくキツスしても抱き合つても今晚だけはお構ひなしと言ふので、神則是愛の教理  
に基き直接行動を探るのであるから、新開國たる米國に於ては更に一段の面白味がある筈と無限

の興味を以て其日を待つて居た。

然るに突如として茲に大事件が起きた。それはストライキの豫告である。鐵道従業員が各種の要求を提出し、若し此要求にして容れられずんば来る十七日の大祭日を期してストライキをやると言ふのである。船舶労働者は既に先月よりストライキを實行して居る、二千人の労働者は現今の給料では生活に必要な日用品を買ふ事不可能であるを理由として居るが、其内の八百人は荷揚人足で一時間六十仙の割にて毎日八時間弱働きて一日四弗半の収入があり、他の者は一時間三十七仙乃至四十三仙の割合である。之をそれ〴〵七十五仙及び五十八仙乃至七十仙にして呉れと要求したのである。一時間七十五仙になれば八時間労働で六弗即ち日本の十三圓餘であるから日本の大學教授より遙かに高給である。是等の労働者がストライキをやつた結果として、船舶に關係ある他の労働者の幾千人は、仕事が無くなり自然に休業するの止むなきに到つた。米國の如く分業が盛になつて労働者が機械的に働いて居る處では、甲労働者が、ストライキをした乙労働者の代りに働く事は不能である。日本の國旗を掲げた一商船もミシシッピー河上に見えたが、一箇月程前から解纜する事が出来ずに迷惑して居ると言ふ噂を聞いた。之に續いて二千人のカバン職

人がストライキをやつた、其要求する處は一等級の職人は一週間の最低賃銀を五十弗とし、更に他の仕事に従事する者にも全部二割五分の増給をせよと言ふのである。現在では最高が五十弗で最低は十八弗である。次には五十五人の某高等學校教授が均一に月給を五十弗増加して呉れと要求し、教育課から拒絶されたのでストライキをやつた、二千人の學生は大喜びで遊び廻つて居る。是等の事實を綜合して見ると、今度のストライキ豫言も單なる示威運動ではなく、要求が容れられなければ決行するのは明白である。それでは全然異國行脚の豫定が狂つてしまふから、お祭を見る處の騒ぎでなく早速此處を逃げ出した。

汽車に揺られて東北へと進んで行く沿道には松の林が續いて居るが、其幹は何れも直立して枝振りの面白い物などは一本もない。折角の松も斯くの如く米國流になつては誠に殺風景である。米國に生ずれば樹木迄實利主義に進化する物と見える、幾何もなくして右手の窓からメキシコ灣が眺められた。モデル河を涉りて北へ〴〵と進み、既にしてアトランタ市に着いたのは正午過ぎであるから、手荷物は一時預りとして停車場の料理店に入り、晝食を済まし續いて市内を見物旁々宿屋を探がして歩いた。當地方に於ける商工業の中心であり、併せて鐵道網の中心であるとか

言ふ事で煙突の数は可成に多く煤烟の爲に建物も並木も凡て黒く變色して居る。

三太郎「今迄見物した米國の大都會は、非常に陽氣で野も山も強烈な日光を反射して居るので早く樹木の茂つた地方に行き、閑靜な木陰に一休みしたいものであると希望して居たが、折角樹木の茂つた當地に来て見れば此通り眞黒で陰氣な町では仕様がなですね。建物や樹木が黒いばかりでなく往來する人を見ても黒い方が多い程ではありませんか。」

五九郎「それは當然の事で何も不思議ではありませんまい。我々が此町に立ち寄つたのは何の爲だと思ひます。此處には黑人を教育する特殊の大學があると云ふのでわざ／＼こんな山中の小都會に下車したのでありませんか、アトランタ大學は四百有餘の黑人學生が居り、クラーク大學には六百の黑人學生が在學して居ると云ふから、大學生だけでも千人以上の黒人が居る勘定でせう。従つて道行く人々の顔は黒いが彼等の心中は誠に潔白な物かも知れんさ。何處の馬の骨だかも知れぬ風來人の我々にさへ、途上で會へば丁寧に敬禮して行くでないか。」

三太郎「自分に敬禮したから賞めるなどは君もなか／＼正直な人物だね、兎に角此町の黒人は黒人大學の所在地丈に立派に見えるが、殊にあのカラーやカフスの白い事は到底我々の服装の及ぶ

處でないね、あれが市役所か、十萬冊の圖書と地質博物館があるさうだから見に行かうか。」

五九郎「二三日滞在するのだから明日にしても遅くないさ、右手の方には白い大理石の立派な建築物が見えるよ。」

三太郎「あれはカーネギーの圖書館で當市第一の物ださうだ、ジュデヤ教會も立派だね、歐洲では殆んど見られないが米國では到る處に大きな教會がある、ジュデヤ人の勢力が侮る可からざる物でせう。」

五九郎「米國では拜金宗を基國教として居るからジュデヤ人には適合して居るかも知れんさ。それはさうとあそこに良さそうなホテルがあるからあれに宿を取つてから出直して見物する事にしようか。」

相談一決して某ホテルに行つた所が満員と言ふので謝絶された。それから二三町にして又一軒のホテルがあるから行つて見ると再び玄關拂ひを喰つた。何事も三度と言ふ事がある、三度も駄目、四度迄失敗したので心細く成つた。貸家と明き間の不足は大戦以來世界共通の現象であるが、中央に近づくに従つて其度が烈しく成る。前以て室を注文して置く必要のある事を必々と感



じた。彼是して居る内に黒雲は天を覆ひ、大雨は沛然として降つて来た。幸にして五仙店があるから雨宿りの爲に入つて見た。

可成り大規模の勸工場である。賣品は一品何れも五仙、十五仙、二十五仙と三區に則ちて陳列されてある。格別買物をする目的もないからコーヒー店に腰を下して一杯飲んだが雨は止まない。獨逸の料理店ならばビールで夜半迄腰を据えて居ても差支ないが、米國の勸工場でそんな眞似も出来ないから兎に角賣品を見て歩いた。暫く休息した爲に先きの雨で靴下が少し濕氣を帯びて居る事が感知され、不愉快でたまらない。

三太郎「そこに丁度靴下が有るから買つたらどうです、一足二十五仙なら安い物です。」

五九郎「其靴下を買つてもこんな處ではき更へる事が出来ないでないか、日本ならば公衆の前でサルマタをはき更へても差支あるまいが此處は米國ですぞ、何時かこんな話を聞いた事がある、宴會の席で紳士連が或婦人の噂をして居た際に一人の紳士が不用意にもあの破れた靴下をはいて居る女乎と言つた一言が隣席に居た其紳士の細君の耳に入つたからたまらない。あなたは何處で其婦人の靴下が破れて居るのを見ましたかと反問されたので、流石の紳士も答辯が出来なくなつ

た……」

三太郎「そいつは閉口したでせうさ、婦人が男の前で靴を脱ぐのは日本ならば下紐を解く様な物ですからね、さうかと言つて靴を脱がなければ靴下の破れが知れる筈がないのですから。」

五九郎「昔日本に桑原某と言ふ美術家があつたさうだ、其當時は勿論美術家などと言はんで繪師と言つた筈だ、是が非常に有名な者だから或時其國の殿様が彼を呼んで自分の愛妾の肖像畫を畫かせた。立身の端緒は此一舉に在りとして見て取つた繪師は水垢離迄取る程の熱心を以て神に念じ乍ら筆を染め、愈々出来上つて明日は御殿に持ち運ぶと言ふ今日の見納めに、我乍ら感心して其美人畫を眺めて居ると好事魔多しとか言ふ物で一大失策をしてしまつた。」

三太郎「美人に見とれてヨダレでも滴したのか。」

五九郎「兎に角原因は正確にわからぬが其美人の太股の近邊に一點の蠶が着いた、今ならば之を消し取る事も出来るが其當時だから如何とも仕様がな、然も服装が夏の帷子であるから如何にも太股に黒點があつてそれが薄い着物を透して幽に見える様な感じがする。」

三太郎「成る程、昔の衣通姫の肖像畫が出来たわけだね。」

五九郎「外に仕様もなし、其儘殿様の御眼に掛けると大に上機嫌で莫大な目録を御下賜に成つた迄は結構であるが、惚々と眺め入つて居る間に太股の一點が眼に留まつたので殿様の顔色は見る間に變つてしまつた。」

三太郎「何もそんなに怒る必要もなさそうだがね。」

五九郎「處が其處に大に曰くがあつたのです、偶然の一致とでも言ひませうか、不幸にして其愛妾の太股には大きなホクロがあり、殿様丈は之を知つて居たのであるからたまらない。女の太股にホクロがある事を見て居る以上は許す事相成らんと言ふので、其場で御手打になつたのです。」

三太郎「成る程ね、靴下の破目と同様で何處で見た乎と詰問されると申開きが立たん事に成るね。」

五九郎「然し、正直の處は全く偶然の一致で無實の罪なんですから繪師の死靈は浮ばれない、どうせ昇天する事が出来ぬ物ならと言つて一層の事地下に潜つてしまつた。さうして殿様が愛妾と共に寢に就かんとする頃を見計つて、怨靈が顯れて家屋の振動する事大地震其儘である。其處で殿様も大に前非を悔いて桑原の靈を弔ふ爲に蚊帳の中に線香を點じ、桑原々と唱名した處が其

後は地震も止む様になつたと言ふ昔噺があります。」

三太郎「線香を點じて桑原々と唱へるのは雷鳴の烈しい時の事ではありませんか、地震の時には萬歳樂々々と言ふのが本當でせう。」

五九郎「それはどつちにしても同じ事です、地震でも雷鳴でも桑原なり萬歳樂なり唱へて居れば其方は歩みますので、所詮時間の経過を待つ一つの方便に過ぎないのでありますから。」

西洋に旅行して我々に都合の宜い事が唯一つある。それは日本語が彼等には了解出来んと言ふ事だ。往來でも室内でも日本語でなら勝手な話をしても秘密が漏れる心配がない。兎に角便所に入つてはき更へる積りで靴下を一足買つて、銀貨三十仙を拂ひ五仙の釣銭を呉れる筈と思つて居たら、賣子の女は變な表情をして、一品二十五仙と書いた建札を指示した。其處で一足二十五仙と言ふ事は知つて居ると言ふ所存で、私は今三十仙を渡したでせうと言つたら、一つの靴下が二十五仙ですから一足では五十仙になりますと説明せられて聞いて見れば成る程、流石は米國式だ、日本の夜店でこんな事を言つたら客が承知しない事と思ふ。

## 三一 簡易旅館夜話

室外を見ると雨は止んだ様子であるから大急ぎで停車場に歸つた。待合室のロハ臺に腰を下して思案したが良い考へも出て來ないので、切ない時の神頼み、兎に角赤帽を呼んで手荷物を受取りせ何處でも宜いからホテルに案内して呉れと頼んだ。オール・ライトと二つ返事で出掛けたから其後に附いて停車場を出て左へ二丁程行つて見ると、右側に縦一尺に横三尺もありさうな瓦斯燈が出て居り、グレン・ホテルと大書してある。立間などは無くて四尺程の入口を入ると直に階段がある、赤帽に附いて昇つて行くと廊下の様な廣場があり、ストーブの横にデスクを置いて四十歳程の婦人が控へて居た。是が此ホテルの主婦である。赤帽の話に依つて直に其突き當り第二號室を貸して呉れた。室は狭く何の裝飾もない極めて質素な物ではあるが綺麗に出来て居る。窓から眺むれば停車場の後方一帯の町内は、地盤が低い爲に一望の下に見える事が出来る。僅かに五六室を持つて居るだけの小さいホテルではあるが案外に居心地が良い。室を掃除に來たボーイが日本語を知つて居るので、日本人が此宿に泊つた事があるかと聞いて見たら、自分は嘗つて船員

と爲り日本の長崎に行つた事があると言ひ、此アトランタ市にも日本の料理店があると教へて呉れたので、夕食は其處に行く事にした。歸途を忘れては困るからホテルの町名番地を聞いた處がマチソン街の四十番二分の一であると答へた。所詮此建物のある處は四十番地であるが、階下は靴屋の店であり、ホテルは其二階だけを借りて居るのであるから四十番二分の一と言ふのであつた。點燈後に夜景を見物乍ら宿屋のボーイに教はつた料理店に昇つた。矢張り何番かの二分の一で香港樓と書いた行燈が出て居り、階段を上ると三四十坪もあるかと思はれる大廣間がある。處々支那畫を畫いた衝立で仕切り澤山の卓子や椅子が並べられて居る。言ふ迄もなく支那料理店であるが、烏飯や牛溫麵は日支共通の料理であるから舌鼓を打つて腹を満たした。夜半には寒風身を切るの思ひをしたが朝の八時に室内の寒暖計を見ると二十七度を示し、往來を眺めると昨日の雨水が巖石の如く氷結して居る。翌日新聞の報する處に従へば最低温度は氷點下十八度で、女學校其他石炭不足の爲に教室を暖める事が出来ず、休講するの止むなきに到つた物が尠くないと言ふ事であつた。晝は電車を利用して近郊に有名なストーン・マウンテンに出掛けて見たが、廣漠たる平野の中央に饅頭笠を伏せたるが如く突起せる孤峰で、全山恰も唯一塊の岩に似た物で、其

表面を刻みて階段を造り昇降に便して居る。松樹生え茂り、凹地の氷雪は解けて白糸の懸れるが如く細く青苔の間を縫ひ、絶頂に昇れば禿頭の如く滑かにして四望空濶千里の沃野が前後左右に展開して居る。

夜は例に依つてストーブを圍み、主婦や二三の旅客と共に雑談にふけた。農夫らしい一人の田舎客はアトランス市を見て世界有数の大都會であるが如く思ふて居り、私が遠い日本から出掛けて来た者で往復の旅費が約五千弗であると談した處が、眼を丸くして、それだけあれば立派な地所と家屋が買へるだけのひと財産であるとうらやましうな表情をした。慥にそれに相違ない。一人は商人で最後の一人は兵士あがりの若者である。時の古今を問はず洋の東西を論ぜず、田舎の人は質朴で飾りがなく、全然見知らぬ者の集りでも和氣堂に満ち恰も竹馬の友が相會せる如き態度で相互の話が進んで行く、日本を出發して以來既に六十餘日を経たる今日今夜、始めて心底から香氣な笑ひが出て來り、四十年の昔生れ故郷にありて大きな爐邊に一家の者が並び、長い冬の夜を物語りに更かした當時が聯想せられた。

五九郎「今度の戦争では出征しましたか。」

若者「出掛けましたが途中から歸りました。」

商人「戦争と言ふ物は負けては勿論損であるが勝つた處がつまりまらない物です。尤も本國に残つて居る人々から言へば、戦争で大に利益を得るから戦争程結構な物が無いと思つて居るけれども、出征した兵士の身に成つて見るとこんなつまらない仕事はないです。敗ければ二つとない命を捨てなければならず、勝つた處で骨折損のくたびれまうけ、平和になれば除隊を命ずと言ふ一枚の書き付けを貰ふだけで、翌日から何をして食つて行くと言ふ的もなく、郷里に歸つて見れば自分の仕事する位置は全部他の人々に占領されて職に就く途はなし、再び元の皆無からやり直しをしなければならぬのであるからたまらんですよ……」

五九郎「それでも米國では本人の希望に依つて志願者を兵士にするのであるから、いやなら志願しなれば宜しいではありませんか、私の國の日本では否應なしに徴集するのであるからそんな勝手な眞似は出来ないが……」

若者「米國でも戦争中は否應なしに徴集したのであります。悪徒か無頼漢でもなければ戰場に出る事を志願する者などは一人もありませんからね。」

五九郎「それでも主義に於て戦争に反対な人は兵役を免除したと言ふではありませんか。戦争をする事は主義に於て賛成するが自分で出征するのは御免を蒙ると言ふのなら、餘りに自分勝手なずるい考へでせう。戦争をするならば第一に開戦論者を戦役に服せしめ、それで足りない場合に限り止むを得ず非戦論者を徴集するのが理論上正當であると思はれますが。」

若者「宗教上の信念から、絶對的に戦争を否定する者は兵役を免除した例がありますけれども、それが實現せられる迄には實際話にならない程の逆待ちが續き、心ある者をして米國に人道などは全然皆無であると言へ怒號せしめた物です。私は現に其一人であります。我々クイカー宗に屬する者の信念から言へば、絶對的に戦争を否認するのであります。」

五九郎「クイカーと言ふ文字の字義から言へば震える者と言ふ事ではありませんが、地震の事をアース・クイクと言ひますから、所詮敵を見ればぶる／＼震へて逃げ出す様な者では戦争は出来ません。」

商人「左様ではございません。震へる事は事實であるそうですが、つまり端座して暫くの間祈禱をやつて居ると、聖靈が其信者に乗り移り、其證據として端座して居る者が五體が自然に震え出すのださうです。それで其宗派をクイカー宗と呼ぶと言ふ話です。」

若者「我々信者相互間にはフレンドと言ふ名があるのですけれども、世間では我々をクイカーと呼ぶのであります。始祖ジョージ・フォックスが衆徒と會した際には、單に「光の子」と言ふ名でありました。キリストもマリアも我々は認めません。唯神の光が我々人類の心の内部に宿つて居る事を確信して居るのです。」

三太郎「祈禱の功德で信者が震え出すと言ふ事は日本でも昔から知られて居つた現象です。田舎の神主などは能くやる方法で、五體が震えるどころか烈しくなれば端座した儘で二尺も三尺も飛び上り、座敷中を跳ね廻る爲に全く神の働きで人間わざでないと思はれるのです。」

商人「クイカー宗の信者でも、熱中して來ると地面に倒れて、震え乍ら全て生き死にの苦みを受けて跪いて居る様によそ目には見えるさうです。」

若者「此宗教は元來英國で生れたのであるが、四方から迫害され、或は獄に投ぜられ、甚しきは死刑に處せられる者も尠くない爲に無抵抗主義を實行し、母國を見捨て、米國に移り、無人の地に分け入りて其處に自由の安樂國を建てたのであります。」

五九郎「無抵抗主義ならば迫害される様な患がなさそうに思ひますが……」  
商人「迫害されるだけの立派な理由があるのであります。第一にクイカー宗の信者は税金の納付を拒絶する、次には裁判所に行つても誓言する事を敢てせぬ、教會に入つても帽子を取らず、人に會つてもお早ようと言はず、別れるに左様ならとも言はず全然非社交的で、一々舊來の風俗習慣に反する行動を取るものですから迫害されても止むを得ん事です。」

若者「我々は自己の心の内に宿る神の光の示す處に従つて行動すべきもので、人間の作りたる規則や法律などは神前に立つ時何等の價値がない物と認めます。爾等天を指して誓ふ勿れ、神の御名に於て誓ふ勿れとキリストが明かに教示されて居る筈です。今のキリスト教徒は其名に於てキリストの信者であるが、其實に於てはキリスト時代のユダヤ人と何等の變りがない程に墮落して居ります。」

五九郎「或はそうかも知れませんが、起請誓文を一番多く書くのは娼婦で、其次は宗教家の様ですね。立派な男が一言然諾したならばそれで澤山な筈で、何も誓ふ必要などはない道理です。」  
若者「我々が税金の納付を拒絶すると言へば、甚だ不隱當の様に聞えるが事實はかうなんです。」

宗教は凡ての人々の心の内にある物であるから、特に宗教家と言ふ如き選ばれた人間の存在を我々は否定するのであります。従つて教會とか牧師など言ふものを認めない故に、是に要する費用の分擔を辭するのは當然でありますまいか。」

五九郎「牧師がクイカー宗には居ないので、そうして教會堂もないのでは全然布教の道がない譯ですね。」

若者「教會堂とは言ひませんが、集會所と言ふ建物が此町にもありまして日曜日と木曜日には午後十時に信者が會合します。専門の牧師は居りませんが、司令者とも言ふ様な者が居ります。然し別に説教すると言ふ事は無く音楽などは勿論ありません、帽子をかぶつた儘集會所に端坐して居るだけです。」

五九郎「無言の行をやるのですか、佛教で言ふ座禪の様な精神修養法か、それは私も賛成ですね、全智全能の神は聲なきに聞き形なきに見る筈ですから、祈る必要はありません。聲をあけなければ聞えないと思ふのは、神を人間の如き肉體的の耳を持つて居る生物だと思ふからでせう。猫の皮を被つて嘘八百を並べる宣教師の説教などを聞くよりは、端坐して黙想する方が遙に有効で

せう。』

若者「宣教師と言ふ様な宗教を賣物にして喰つて行く商人の必要をクイカー宗では認めないので。其代り信者の内誰でも時と場所とに従ひ適當と認めたら熱心に布教し宣傳もします。墮落した白人は其同胞を迫害しますが、クイカー宗が此ペンシルバニア州に土地を買つて移住し、黒人を相手に教化事業に着手して以來七十年間、只の一人も白人が黒人に依つて殺害された例がありません。嘗つては五百の黒人が蜂起して大逆殺を企てた時でさへ、何等の武装をもせざる六人のクイカー信者が彼等を説いて無事に沈靜に歸せしめた事があります。其點から見れば黒人よりも白人の方が遙かに度し難い者であります。兎に角我々フレイドは無抵抗主義であるから戦争を否認するのは必然であります。個人の人格を認むるならば、其個人の意志が活動し得る自由の天地を與へなければならぬわけです。何等の自由を認めぬならば、人間を物質と區別せず之を人形視する事になるでせう。」

## 三三三 米國の軍人

米國は名實共に合衆國であるから、各種の主義や思潮を持つて居るものが世界の各國から集まつて居る。而して彼等は何れも其本國に於ける在來の習慣や風俗に拘束せられるのを心良しとせず、自由の天地をしたひて新世界に渡航した者であるから、極端な新しい主義でも一部の間には實行せられて居る。甚しいのになるとデューアリズムなどと言つて、二婦二夫主義を實行して居る團體さへある。彼等の主張する所に従へば、男子の生殖機能は貳拾歳前後より六七十歳に到るまで四五十年の長期に涉りて有効であるが、女子は五十歳未満にして既に早く停年に達するから一夫一婦は自然に反する。更に又女子の性慾は期間が短かい代りに猛烈である故に、是非一夫一婦では不満足であると云ふのである。

米國の所々で流行する新しい主義を一天下の眞理と心得て、是が採用に遅れざらん事を勉むるのを能事として居る日本の自稱新人は、熟考する必要があるではあるまいか。

兎も角クイカー宗の戦争反對論は、其根柢に於て深く且つ遠い昔からの事であるが、數百年の昔に於て彼等が殆んど無人の地に等しき米國に渡航した頃には全くの自由主義で、何等の拘束をも受けずに生活する事が出來たのである。現今でも、或は米國の内地深く深林に分け入り、其處

に一部落を作れば自由の社會を造る事が出来るかも知れんけれども、それは正當のものでは有り得ない。如何となれば、事實上、吾人が共同して一つの國家を形成して居る以上は、國家と言ふ一つの組織された體系を維持する爲には、税金を納むる事も或は個人の自由を拘束して戦争する事も止むを得ない場合がある故である。

若者「私の郷里はバーリントンであります、召集されましたのは忘れもしません七月の十三日でした。二十九日に検査をうけ合格者として徴兵に編入されたのです。私は上官の前に立つて極力非戦主義を主張し、少くとも自分は戦争に従事する事を拒絶すると公言しましたが、其場合にそんな事は馬に念佛で何の益にも成りませんでした。勿論數多の將校の内にはそれを道理であると信じ、氣の毒と感じた者もありましたが。」

商人「主義に於て戦争に反対であると公言しただけで除隊にして呉れるならば、命を的にして出征する者が一人もありません。」

若者「翌日の午前七時には、鑼詰製造會社の工場に運ばれて行く隊の一群の如く、我々は他の地方から徴集された群衆と共に貨車に積み込まれてブラツトル、ポローに送られました。天は曇

り小雨さへ降る中を汽車に揺られ東ベルモントの谷に沿って走る時は、下士や上等兵に虐待され乍ら落ち行く先は何處であるか、唯神が知るのみと私は斷念して居りました。ホワイト・リバーの絶景に沿ひ、コンネクチカットの沃野を過ぎる時でさへ我々の心中には何等の希望も閃かず、ウード・ストツクと言ふ處で他地方から徴集された兵士と一隊になり、愈々ブラツトル、ポローに着すれば、身體検査をして市民たるの服も携帯品も全部取捨てられ、軍服に包まれてバラツクに收容され茲に外形上の兵士となりました。が、それが丁度八月の二十六日であります。」

五九郎「召集されてから軍服に着換へる迄に二箇月半も費したのですな、流石に米國は大國だけあつて悠々緩々たる物があるね。是が我日本ならば、いざ鎌倉と言ふ場合に召集されたら半月後には滿洲あたりで二三度の合戦が済み、既に野戦病院に收容されて居る頃ですがね。」

商人「日本人は敏速ださうであるが我米國ではそんな風には行きません。今度の戦争でも歐州の戦争が始まると直に戦闘準備に着手したのであるが、愈々出兵する迄には三年を要したのですからね。」

若者「人間の内の或者は、軍隊の手で殺人器である處の兵士と云ふ者に改造される。懸壕を埋め



る必要があれば兵士を埋葬に代用する、大砲は大きな兵士であり兵士は一塊の肉弾に過ぎない、唯それが同じく兵器と言つても生きて居るから金屬製の物に比して便利であると言ふに過ぎない。』

五九郎「其町で練習をやつたのですか。」

若者「月の二十七日にはボストンに向つて輸送されました。それは濕氣の多い霧の懸つた冷かな朝でした。停車場に行つて貨車の前に整列して居ると、輸送指揮官である騎馬の士官が突然現れて、此列車には實弾を込めた銃を持つ番兵が各貨車毎に置いてあり、萬一逃亡を企てる者があれば射殺して差支ないと言ふ命令を下してあります。従て窓から飛び出さうとしたり若しくは窓の外に頭を出しただけでも射殺されるから注意をなさいと申渡した。稲の穂が重々しく垂れて居るコンネクチカットの沃野や、岩石岬々たるマサシウセツツの荒地を横切り不意にボストンに到着した。それから二列になつて長い町を波止場迄徒歩し、海上六哩を小蒸汽船に乗りて灣内なる一島に收容されました。』

五九郎「全く重罪人が島流しにでも逢つて居る様な物語ですね、そんな風にしなければ米國の兵

士には逃亡の恐れがあるのですか。」

若者「兎に角其島に上陸してからは、自由に屋外にも出で日光にも浴する事が出来たので、全く極樂に行つた程嬉しく感じました。私は此處に來てもまだ兵役に就く事を快諾しないので、問題が愈々困難になりまして竟に懲役場に送られました。茲には逃亡した者や、上官に抵抗した者や竊盜、喧嘩、飲酒色々の犯罪者が集められて居ります。就中黒人の犯罪者が逆待されて居るのを見ましたが、正直の處を言へば其行爲に於ては白人よりも黒人の方が遙かに正しい者が多いのであります。私は犯せる何等の罪もないのに、否天に在します我等の父の命する所に従て最も正當なる道を進んで居るのに自國內に於て自分の同胞から罪人扱ひにされたのであります。』

五九郎「國家存亡の場合に出征を忌避するのは自國に對する最大の犯罪ではないですか。」

若者「九月二十五日には兎に角戦地に送られる事になりましたので、第一に銃を各兵士に渡しましたが、萬一其銃を受取れば兵役に就く事を承諾した事になるから、私は戦争をしないからと云ふ理由で銃を受取る事を謝絶した處が、相手方では兎に角銃を渡せと言ふ命令を受けたのであるからと主張し、私の肩に其銃を結び付けました。従て其儘銃をぶら下けてアレキサンドリヤの

町迄行軍する事になりました。』

五九郎「思ひ切つて強情な真似をしたものですな、それで何等の罰も喰はんのですか。』

若者「行軍は實に困難でした。第一に飲料水が皆無ですから、先發隊が頭や手を洗ひ自分等が現に泥足で入つて居る小川の濁水を、甘露の如く舌鼓を打つて飲んで居る者が多い様でした。目的地に着いた後は武器の検査があつたけれども、私は一切武器には手を附けないと頑張つたので、倒々繩を掛けられて二三時間練兵場に立たせられました。さうして下士や上等兵が交代に出て来て勝手な方法で私を私刑に處しました。而して元來が無抵抗主義であるから私は唯忍耐して居りました。私は常に假令死すとも自己の信仰を捨てないと言ふ決心を持つて居ります。一人の下士は私を地上に倒し、左右に丸太を打ち込んでそれに私の手や足を結び付けた形にしました。雨の降り續いた後の晴天な日であるから、顔には強烈な太陽の光線が遠慮なしに入射し、背中からは次第に濕氣が服を透して浸して来るので竟に精心を失つてしまひました。回復した頃には病院の一室に收容されて居りました。正直の處私は泣きました。悲しく思ひました、と言つても私の肉體の苦しい爲ではありません。毎年七月四日の獨立祭には正義と自由と人道とが我國の標語

であると國民に説く處の米國に於て、斯の如き行爲が政府の名に依つて白晝公然行はるゝを悲ま

ずには居られなかつたのであります。』

五九郎「なか／＼敗け惜みの強い人だね、宗教信者と云ふ者は凡てこんな者かね。』

若者「私の肉體は誠に弱くして彼等の逆待に耐ゆる事は出来ないけれども、私の精心は神の恵みに依つて益々強く成つた事を知つた時には私の喜びは非常でありました。』

五九郎「最後にはどうなつたのですか、疾病除隊ですか、それとも一旦戰場に出でてから歸休を許されたのですか。』

若者「其後は病院で火夫として働く事になりましたが、或日一等軍醫が見廻りに來たので、二人の同輩は直立不動の姿勢を取つて敬禮したけれども私は其儘働いて居りました。それを見て軍醫は、氣を附けと言ふ號令を懸けたけれども私は軍人でないから軍隊の敬禮法には従ひませんと言つた處が、軍醫は怒氣顔に充ちて、貴様の肉體からクイカーを追出して呉れるぞと叫び乍ら鐵拳を振つて私の頭上に飛び掛かりました。それでも私は平然として無抵抗主義をやつたので、兎に角風氣兵を呼んで私を引渡しました。そんな調子で到る處に逆待されましたが最後には先方でも

諦めたらしく、又ファイラデルヒヤ市にありますがクイカー宗の本部の方でも、其節に嚴談した結果として竟に除隊になりました。其間に肉體は非常に衰弱したので數箇月の間は出来るだけ保養に勉めたが、それでもまだ此通り弱つて居ります。』

若者の話が終つた時は九時半頃であるから、直にストープ會議を解散して各自の寢室に入つた歐洲から種々の理由で移住した各種の主義を抱いて居る幾多の團體の集會である合衆國には、日本に於て夢だにも見る事の出来ない事情があり、米國の統一には非常な難事がある事を回想し乍ら眠りに就いた。

翌日市内を散歩して居ると、長さ一メートル幅七十センチメートルもある乎と思はれるポスターが眼に付いた。中央に大きな龜の背に海軍服を着けた小供が乗つて居る繪が書いてある。何かと思つて見たら海軍兵の募集廣告であつた。廣告文を読んで見ると、蝦で鯛を釣るやうな甘い條件が澤山書き列らね、更に一段大きな活字で、

此繪にあるのは目下米國軍艦が淀泊して居るキューバ島で捕つた龜であるが、司令長官の命令が、乗りまわして毎日遊んで居る。自動車の如く早くは走らないがなかく、面白い海軍兵にな

れば日曜日には釣が出来るので面白い事が外にも澤山ある。

と言ふ宣傳をして居る。其處を通り抜けて四辻の處に行くと三四人の陸軍軍人が歩道の側に立つて居り、其側には大きなポスターを張り付け張札が建ててある。それを讀んで見ると、一週間に給料を何程與へると乎色々な條件を書き並べた後に、軍人になれば誰でも最も好きなベースボールを日曜毎にやる事が出来るし、活動寫眞も半額で入場する事が出来る。恐らく米國の青年は釣をする爲に海軍に入りベースボールをやる爲に陸軍に入るの乎も知れん。兎に角海軍で演習をする場合には、士官の妻君が先廻りをして演習地に出掛け甲板上に舞踊會でも催して騒ぎ暮らせば良いので、自分の費用で出掛けるのであるから、妻を同伴しようとして下女を連れて行くとも勝手でない乎と言ふのが米國流なのである。

三三三 國王病

猶二三日滞在してアトランタ市の近郊を見物する豫定であつたが、其後の天候は雨勝ちで容易に晴れる見込がない故に翌日は出發した。日本では人の心と天候とは且に夕を豫測する事難い物

で、變り易き物の第一に致へられて居るが、米國の如き大陸では決してさうでない。千里の沃野があり萬里に渉る大山脈がある如く、地形や地貌が大規模であるだけに天候もまた激變する如き事なく、將に雨降らんとする時は一週間も以前から空模様が少しづつ變つて行く、従つて日本の或地方では當らぬ物のまじないにされて居る測候所の天氣豫報でも、米國では大概は間違ひなく一週間に渡つて長期の豫報を出す事さへ格別困難でないと言はれて居る。降雨期の旅行程つまらぬ物はない、どんな各所の見物でも雨の日に行つた人で是を賞讃する物は殆んどあるまい。始めて見物に行つた人で、良い所であると賞めるのを聞いたならば、彼の行つた際には其地方が晴天であつたものと推定するのが當らずとも遠からざる判定法である。

汽車の沿道には例に依つて例の如き松林があり、畑には綿樹生え茂り見渡す限り赤土である。東南は大西洋の沿岸を去る事二百餘哩にして、西北一帯にはアレガーニ山脈が聳えて居る高臺を一月大寒の候に當りて汽車が東北に向ひ驀進するのであるから、時々刻々と寒氣が増し、翌朝窓を透して左右を望見すれば林間には多少の白雪が見える、首府ワシントン市に着いたのは午前十時であるから、荷物をホテルに預け、先づ自動車にて名所めぐりをして市の内外を大觀したが、

米國の首府と言つても商工業地でないから誠に閑靜な處で、全市盡く一大公園の如き感がある。翌日は膝栗毛で重要な部分の再見物に出掛けた。停車場を出た正面の高臺に壯嚴なる一大築物が目に附くのは、言ふ迄もなく米國の政廳で、世界有数の物たる事勿論である。ポトマツク河の水面を抜く事九十尺の高臺上に、長さ七百五十一呎幅三百二十四呎乃至百二十一呎と案内記に書いてある。中央は白色に塗られたる砂岩石より成り、左右の兩翼は白大理石で出来て居るが、中央の塔は其高さ二百六十八呎半である。上に更に十九呎半の自由の神の像が立つて居る。米國では國家の建物には凡て其國旗を立て、あり、國家の物は即ち國民の共有であると言ふ主義から何人も自由に出入する事が許されて居る。従つて我々の如き旅行者でも案内なしに自由に内部を見る事が出来るのである。中央の大廣間は西曆千四百九十二年コロンブスの上陸を始めとし、千七百七十六年の獨立宣言の調印とか千五百四十一年に於けるミシシッピの發見とか言ふ標題の壁畫で圍まれた中に、リンコルンやワシントンなどの塑像があり、西北隅の階段を踏んで塔の絶頂に登れば全市街は眼下に展開して見える。更に左右兩翼に連る各種の室内を見廻つたが、建物が餘りに廣大である爲に、折角入つては見たが竟には八幡の森に迷ひ込んだ様に出口が容易に見當ら

す、廊下の中央でベデカーの旅行案内記を開き乍ら給仕に示教を乞ふなど、遺憾なく赤毛布振りを發揮してしまつた。

高臺を西に向つて降れば植物園があり、それを通り抜けて公園内を行く事数丁にして博物館がある。約一町四方もある廣大なる建物で、米國土人に關する物はなかく面白い物がある。北米の西北地方に住んで居る土人が崇拜する其種屬固有の偶像を彫刻した柱に、恰も材木屋の物置小屋に入つた如く無數に建て並べられてあるが、其彫刻物を見て居ると日の暮れるのも忘れてしまひさうである、更に別室に入れば、北米西南部に位するアリゾナやメキシコ地方の土人に關する風習が實物大の模型を以つて示されて居る。

三太郎「其處には三日月形の石がある。米國の土人もやはり月や太陽を崇拜したと見えるね。」

五九郎「説明書にはアリゾナ洲ブイプロ土人が太陽を祀つた物で、是をアツラシと呼び雨乞ひする際に祭禮を行つた物であるとありますよ。そつちの人形は何ですか、蛇を捕へて喰ふのではあるまいし……。」

三太郎「此方の人形も同じくブイプロ土人の一部を示す物で、是は蛇の躍をやつて居る處だとあ

るよ。八月の炎天になればあの地方は晴天續きで水不足の爲に雨乞ひを祈るのですね、棉の木で造つた小屋の入口に居るのは蛇を運んで来る役者で、次のは助手、それからこつちに居るのは逃げ出す蛇を集める人、左右に並んで居る四名は噓方で散米をして居るのは巫子と神主ださうだ。」

五九郎「神主が散米をして雨乞ひの祈禱をするなどは古代の日本そつくりですね。」

三太郎「人間の心理状態は何處の國でも同一であるから、同様なる事情の下には類似の形式を案出するのは當然さ。水や食物は人生一日も缺く可からざる物であり最も貴重なる品であるが、水は自然に天空から降つて來るので、最も早く文明が發達したと信ぜられるエヂプトでは、六千年以前の太古に於て既に雨乞ひが實行されて居る。天に祈りて或物を得んとした最初の起りは雨乞ひかも知れん。雨の降るのは天に在ます神が吾人に之を與ふる物であると認める様になるのは必然でありませうから、吾人の必要に迫られて其雨水を天の神に乞ふには、其代償として貴重なる米を提供するのは自然の順序でありませんか。」

五九郎「所詮神と人間と物々交換をやると云ふ考へですか、さうすると雨乞ひは神と人間との間に行はれた一種の交易で、商業の始まりと言ふ事になるですね。」

三太郎「それは亂暴な故事附けでありませんか、雨乞ひをするのに蛇踊りとは奇抜ですね。尤も日本でも雨乞ひをして雨が降る場合には白蛇が出現すると云ふのが普通で、伊勢の一目龍が雨乞ひをする神様の親玉と言ふから、雨と蛇との間には特種の關係があるかも知れん。此處の説明書には彼等土人の祖先は蛇から進化した者であると信ぜられて居るとあるが……」

五九郎「支那の歴史を読んで見ても、太古の伏羲氏は蛇身人首であつたと書いてあり、皇帝と皇后との腰から下は蛇の形で、蠅の如く互にからまり合つて其間に子供が生れた給がありますが、アメリカ土人も太古の支那人も似寄つた考へを持つた者に見えるですね。」

三太郎「それは説明が違ひませう、支那では太古の時代に文字がなくて、凡て重要な記録は圖解を以つて後に残した物であり、現今の文字は始めに其圖を略して外形だけを取り次第に變形したのであるから、普通は之を象形文字と言つて居る。其處で伏羲氏の事も、皇帝と皇后との間に子供が生まれた事實を記録する爲に其圖を畫いたのでありませんか、併し其子供が如何にして生れたか、それを圖解するのはいくら太古の時代でも多少遠慮する必要があるから、蛇の夫婦が子を生む時の圖を以つてそれを代表したのでありませんか。」

五九郎「つまり交尾すると云ふ意味を圖解したのでですか。」

三太郎「さうさ、それで尻から下は蛇の様な形にして繩の如く交尾せしめ、而も之れが伏羲氏であると云ふ事を明かにする爲に、上半身は立派に皇帝と皇后との装束を着けさせて畫いたから、後世の人は其圖を見て伏羲氏は腰から上は人の形であるが、尻の方は蛇であつたと云ふ傳説を生んだのでせう。」

五九郎「それではつまり、西洋にあるネツサスの像が上半身は人間で下半身は馬になり、美人デシャニールを載せて居るのと同様に形而上の行爲を形の上に顯はしたと言ふに過ぎないのですか。」

三太郎「あれなども若し支那人に記録させたなら、ネツサスは馬身人首であつたと書くにきまつて居るさ。」

こんな嘶を仕乍ら他の室内に入つて見ると、其處には迷信的疾治療法に關する種々の器具が陳列されてある。水銀や銅片或は馬蹄鐵など全て貧民窟の古道具屋の店そつくりだが、其内でも殊に注目されたのは接觸符と云ふ名札の附いた物である。其大さは一錢銅貨程あるメタル形の物

であるが、其處に記載してある説明に依ると、國王が是を以て病人に接觸すれば病氣が全快すると云ふ誠に有難い護符の一種である。第十一世紀の中頃英國王エドワードに始まつた物で、國王病にかゝりたる患者には國王親く此金屬片を白きリボンにて、恰も三等勳章の如く首に懸けてやつたのである。ヘンリー七世は更に是に關する儀式を制定し、チャールス二世は黄金製の物を造り、國王が病人に手を懸ける瞬間に一侍従は嚴かなる口調で「ヒー、ブット、ヒズ、ハンズ、ア  
ンド、ヒー、ヒールド、ゼム。」と呪文を唱へ、他の侍従は接觸符を與へて之を頸に懸けさせるのである。西曆千六百六十二年五月より千六百八十二年四月迄滿二十年間に、驚くなけれ九萬二千  
百七人を治療したと云はれて居る。ゼームス二世は白銀製の物を採用し、英國にては歴代の國王  
が其局に當つて居る。此迷信的習慣はスチュワルト家の斷絶と共に世間から棄てられてしまつた  
其後の英國には國王病が流行せぬ様に成つたのか、それともスチュワルト家の國玉ほど神通力を  
持つた國王が其後の英國に出現せないのでか、此治療法が迷信でないとすれば以上の二つの假定の  
内少くとも一つを認めなければならぬ事になる。キリストが手を觸れただけで不治の疾病が全  
治したものの數多くあると云ふ記録が正しいならば、英國の國王が接觸符を首に懸けてやつた爲に

其病氣が治療せられたる者九萬二千餘人であると云ふ記録を信する必要がある、現今の米人が牧  
師ヒツクソンに手を觸れて貰へば、如何なる難病も立所に全快すると信するもの不思議でなくな  
るが、第二十世紀の今日、而も文化を誇る米國ワシントン附近の白人が、孤光燈用の炭素棒を憐  
中して居ればリウマチスにかゝらぬと信じ居るに至りてはあきれざるを得ない。

五九郎「黄金や水銀で病氣が治療すると信するなどは、いくら古代の人間にしても餘りに馬鹿馬  
鹿しいではありませんか。」

三太郎「必ずしもさうとばかりは言はれませんが、迷信とは何乎と云ふに、それは決して確定不  
變の物ではなく、唯其當時の哲學上より論じて何等の根據なき物、或は其時代の科學的研究の結果  
に矛盾する如きものを信するのが迷信であると言はれるに過ぎない。従つて迷信は時と處とに依  
て定まる物にて、大正の今日から見ても、其時代の人々にはさうでな  
かつたのですからね。昔と今ばかりではない、第二十世紀の今日でも、日本人から見ても迷  
信であると思はれる事を西洋人が信じて居り、或は反對に日本人が信じて居る事を西洋人は迷信  
であると言つて居るから面白い。」

五九郎「昔は科學的研究が發達して居ないから、それを迷信であると科學的に斷定する事は出来なかつたとしても、有名な哲學者は太古時代から澤山居つた筈でありませんか。」

三太郎「處が其哲學者が是を哲學上の見地から唱道したのであるから、俗人が之を信するの無理はあるまい。彼等の主張する處に依ると斯うなんです、天地萬物は孤立せる物にあらずして上下互に關聯し、同類常に相感應する物である。此故に地上の火は天火に向つて炎上し、天空の水分は地中の水に合せんが爲に雨となり河海に向ふのである。甘き物を見ればヨダレの自然に流れるのは是即ち吾人の内心か外界の物質と相感應する確證である。此理を推して行けば、外物に依つて體内の疾病を治むる事も出来得べく、或は病魔を肉體外に誘ひ出す事も不能ではないと云ふ結論に達する。」

五九郎「關係があると假定した處で、金や銀が何病氣を治療するに有効であると云ふ事は知れる筈はありますまい、唯出駄羅目に故事附けたのでは迷信と云ふ外ありませんまい。」

三太郎「宜い加減の出駄羅目ではないさ。例は黄金は光輝燦爛として目を眩ます點に於て太陽と同類であるから、凡ての金屬の内にて黄金は太陽に屬する物と認める、然るに一方より見れば、

太陽は地球の萬物に對するエネルギーの供給者であり、宇宙活動の源泉である。太陽なくんば萬物死滅すべき事は何人も信じて疑はざる處である。更に翻つて吾人の肉體を見る時脈動の源泉は心臟である。従て人體に於ける心臟は宇宙に於ける太陽と同一であるが故に、心臟も亦太陽に屬する物と認む可きである。果して然らば黄金と心臟とは同類である故に心臟病には黄金が妙藥であると結論し、同様に水銀は腦病に効能があると説いたのであるから理論上立派な主張でありませんか。」

五九郎「或る程哲學者の議論は、實驗や事實を度外視して頭の中で論理を通過して行くのであるからそれでも結構かも知れんね。」

三太郎「昔の人だつて必ずしも全然事實を度外視する筈はないさ、兎に角實際に於て病氣が治療せぬ物ならばそんな迷信は永く續く筈がないけれども、往々全快する實例があつたでせう。」

三太郎「それは勿論病氣の種類に依つてはそんな方法で全快する場合もあるさ。例へば大正の今日では六百六號と云ふ完全な黴毒の妙藥が發明されたけれども、明治時代迄は凡て水銀劑を以て最上の妙藥としてあつた事は君も知つて居るでせう、然るに昔から慾氣と黴毒氣のない人間は居



ないと言ふ諺があり、現今でも知名の士が全然其腦を悪くして癡馬同様になつたり、或は本人は無事でも天才的の大人物に不似合な低脳な子供が生れたりするのは大概微毒に犯された結果であると云ふ話であるから、古人の腦病は恐らく微毒性の者であつたと推察する事が出来た。萬一さうであるとすれば、水銀に依つて腦病が治つたと言ふ事は不思議でも何でもない事になる。但し其理論に於ては全然誤つて居るのであるから、同一理に依つて黄金が心臓に効驗あると云ふ理論の驗證にはならない。尤も大概の病氣は金銀さへあれば治療し得る物であると言ふのならば別問題であるが……」

### 三四 一目銀世界

翌日は天候險惡、寒風に交つて大きな雪片が飛んで来た。氣象臺や大學などを參觀し記念塔に昇つて見たが、降雪に妨げられて遠望する事が困難であつた。夕方に繁華な町を通つて見ると、遙に東洋茶園と云ふ行燈が目についたから其處に夕食をするつもりで上店つた。可成り大きな料理店らしいが、將に外套を脱がんとした時に、主人であるかそれとも番頭であるか三十歳前

後のハエカラな男が来て、「日本人ですか」と聞いたから「然り」と答へた。處が「過日の會議以來日本人は一切謝絶する事にしてあるから悪からず」と拒絶された。嘗て不賣同盟をやつたのを此店では今も猶嚴守して居ると見える。他の地方では既に早く其愚なるを悟りて反對に日本人を優遇して居る店も尠くない。萬一是が支那の内地であるならば、或は尠くとも支那人が大部分を占めて居る町であるならば、不賣同盟を喰つては日本人が閉口するかも知れんけれど、九牛の一毛にも當らざる一二軒の支那店が、米國の首府たるワシントン市で不賣同盟をした所で、店主が損をする丈で格別日本人の迷惑には成りさうにも考へられない。蟻螂の斧を振ふに異らずと云ふ支那の諺はこんな行爲を云ふのではあるまいか。

翌日は降雨でもあり休日、大概の建物は閉鎖され、見物すべき場所もないから此處を出發してヒラデルヒヤ市に向つた。北進するに従つて雪と化し、寒氣は次第に加はり、窓外を眺むれば野も山も雪に充ち、海も河も氷に埋まつて居る。

三太郎「一目銀世界と言ふ句があるが今日の景色は全く其通りだね。」

五九郎「何も今日に限つた事ではあるまい、米國は到る所何處でも凡て是銀世界でないか。」

三太郎「さう云ふ意味で言ふのならば銀世界でなくて金世界でせう。」

五九郎「戦争前迄の米國は、國としては金貨本位であり、人間としては拜金宗の信者であるから金世界かも知れんが、戦後の今日では金貨などは拜見する事も出来ず、紙幣でさへ銀と引換へ申候と書いてある位だから銀世界と云ふ方が正當でありませんか。」

三太郎「その銀世界で思ひ出したが先日新聞で見ると、東京在の一老農が、天地の萬物悉く銀に還元すると言ふ自信の下にあらゆる物から銀を採取する方法を發見したと言ふ事ですよ、土間に一尺程の穴を掘り、其處へ炭火を盛り、竈で風を送つて試料とすべき物を燒皿に入れて灰となし、硼砂三瓦曹達三十三瓦硝石三瓦錳鈍粉三瓦木炭五十三瓦を加へて、坩堝で白熱となる迄熱を與へると、其中より一粒の銀屬性の粒が出る之を分析して見ると其中から銀粒が現はれるさうです。」

五九郎「全で三十三間堂の佛の数は三萬三千三百三十三體と言つた様に、何も彼も三瓦宛を調査するのですね、それで一體幾何瓦の銀が出るのですか。」

三太郎「試料として第一には箱崎海岸の砂、第二には平尾頁岩第三印度支那産磁土、第四鹿兒島

産の火山灰、第五斑礫岩の分解物を以て試みた所が、第一の砂からは十萬分の百四十七の銀屬性を得、更に之を分析して十萬分の百十九、即ち銀屬性に對し八十一パーセントの銀を得、以下何れも二百六十一乃至九十一の銀粒を得たが、杜若や螢からでも同様に銀を採取する事が出来たさうです。」

五九郎「さう云ふ事は昔大に流行した事です、歴史は繰返すと云ふから復び二千年の昔に返りますかね、智識の神であるヘルメスが、一萬卷の書を著述せる内に物質變化の事を説いてゐるのに基き煉金術が發明された。其主張に依れば、萬物は硫黄と水銀とより成る物で、其配合の如何に従つて或は黄金となり若しくは鉛と成るに過ぎざるものである故に、吾人若し、鉛の成分たる硫黄と水銀との配合を知り、之に適宜の水銀或は硫黄を混入して金の成分に等しからしむるを得れば、鉛を變じて金と成す事が出来る道理である。従つて其當時の學說より見れば鉛より金を得ると云ふ事は少しも不可解の議論でないのみならず、事實に於て往々成功したのであります。少量ではあるが兎に角鉛から金を製出する事が出来たからこそ、各國の王侯其他の富豪は盛に金を投じて煉金師を養成したものと見なければなりませんまい。」

三太郎「本當に中古時代に於ける煉金師が鉛を金に變化する事に成功したものであるならば、故に科學的文明の進歩した二十世紀の今日に於てそれが出來ぬのでありますか、其點に於ては現代の科學者が退歩したのでせうか。」

五九郎「科學者が退歩したのではなく世人が進歩したのです。世人の觀察力が進歩したから鉛を變じて金と成す事が出來なく成つたのさ。否現今でも卑金屬から立派な貴金屬を製出する事は實行されて居るので、所謂人造金と云ふのが即ちそれでありませう。觀察力の不完全な人間には眞の黄金でも人造金でも同一に見えるので區別が附かない、其様な人間を相手にしてならば、鉛や銅から黄金を製する事は易々たる事業でありますよ。更に又他の一方から論ずれば、鉛其他の卑金屬には一般に少量の金を含有して居るから、澤山の鉛を熔かして色々な手数を掛けて居れば、最後には微量の純金が出て來る事あるも別に不思議ではあるまいさ。尤も昔の煉金師には喰はせ者も澤山あつた様で、或煉金師は坩堝を掻き廻す棒の先に孔を穿ち、其孔に少量の純金を入れ置いて國王を欺いたと言ふ記録なども残つて居りますよ。」

三太郎「最初から鉛に金を含んで居るのならば鉛から金を製すると云ふ譯には行きますまい。」

五九郎「そんな理由はないさ、大正時代の國定教科書にだつて、海水より食鹽を製すと立派に記載して居るではありませんか、海水から食鹽が製せられる物ならば鉛や銅から金を製すると云ふ事が何も不思議ではありませんまい。」

三太郎「さう言へばそんな物であるが、然し今度のは萬物から銀を製するのでなくて、萬物を銀に還元すると云ふのですから一寸問題が違ひますね。それに今度は、更に輪をかけた大發見者が出て來た様です。自然科學と物體固有の性的戀愛引力とを應用して宇宙間森羅萬象を金銀に還元する實驗に成功した礦山師があると云ふから驚くね。」

五九郎「凡ての物が金銀に還元せられると言ふのなら別に驚くにも及ばないではありませんか、そんな事は大正の今日誰でも實驗して知つて居る事であるが、世間體をつくらふ爲に隠して置くだけでせう。つまり其老農山師は馬鹿正直だけに、近頃やつとそんな事ゝ覺えて珍らしさうにそれを世間に發表して得意然として居るのでせう。」

三太郎「之は驚いたね、あなた迄が萬有還銀説に賛成するとは。」

五九郎「支那の歴史を讀んで見給へ。昔東漢の孝靈皇帝の時代に西邸を開いて官を賣り、男爵は

百萬以上とか教授は二萬乃至五萬と言つた風に各々定價があつた。其時に崔烈と云ふ富豪が銅貨五百萬を投じて司徒の官を得た。其處で得意になり、自分の子に近頃私に對する世間の評判はどんなものかと問うて見た處が、其子の答に、世間では銅臭が鼻に着いて嫌だと言つて居ると書いてある。第二十世紀の今日では金貨本位であり、大戰後は銀貨が幅をきかして居るから銅臭などは少しもないか知れんが、爵でも勳でも乃至は學位でも官名でも之を適當な坩堝に入れて、老農一流の糞にかけて分析して見たなら、恐らく百分の九十以上迄は金銀に還元されるかと思ふがね。」

米國は廣い國であるから是迄の旅行は一市から他市に行くに尠くとも一晝夜位は汽車に揺られたのであるが、首府ワシントンから北上すれば大都會が到る處にあるので、汽車に乗り飽きる程の哩數もなく、こんな、話をして居る間に既にヒラデルヒヤ市の郊外に來た。野も山も河も谷も乃至は全市の屋根も凡て氷雪に埋もり眞に一目銀世界である。

### 三五 紐育解纜

紐育に着いたのは二月二十八日である。平年ならば是で今月もおしまひだが今年は二十九日がある。一日だけの利益であるか損になるかそれは個人々々に依つて同一でない。唯西洋の婦人には二月に二十九日がある爲に、今年に女の方から男に結婚を申込んでも差支ないと云ふ特權が與へられた米國の老嬢に取つては、選舉權以上に有難い物たるは言ふ迄もない。若い間は、人格はどうの個性が斯うのと高く止まつて居る米國女でも、三十代が過ぎ四十に手が届いたとなると獨身の淋しみを感じ悲哀が心の底から湧いて來る。併し其秋には既に遅い。誰も相手にする男が無くなつて居る頃だ。

新聞の廣告を見て兎に角歐洲行の船を探したが、戦後の今日は何處も同じ事で容易に切符が手に入る筈がない。然るに幸なる哉一週間後に解纜する佛國行の汽船に、唯一室だけ空席があつたから早速切符を買つた。是で先づ一安心が出来た譯である。船出を待つ間にボストン市に行きハーバード大學を參觀し、三月十日無事汽船に乗り込み切符を示すと船室に案内して呉れた。有難うと言つて腰を下したが、案内者は猶去らずにチョッキのポケットに二本指をさし込んで立つて居る、酒代の催促である。正午解纜した、食卓について滿堂を見渡した處では日本人は我輩の外

に一人も居ない、勿論それは始めから豫期した處である。甲板を散歩して居ると飛行機が来た、汽船の周圍を幾回も巡りて何か警戒して居る様な風に見える。佛國船から密に小船に買込んで行く密輸入者を取締る爲であると言つた乗客もある。眞偽の如何は自分の知る處でない。既に米國の領海外に出れば給仕が葡萄酒を肩に荷つてバーに運んで来る、甲板上からは是を眺めて居る乗客の顔は大黒様の如くにこくして忽ちに拍手が始まつた。二三日前に大風雪で紐育市を闇黒にし、一千萬圓の損害を與へたと言はれた天候も今日は忘れた様な上機嫌で、何處を風が吹くと云ふ調子、大西洋面は鏡の如く平である。

十年振りで佛國本場のコニヤツクに喉をうるほしバーを出ようとする、右手の卓子に座を占めて居た西洋人が私に日本語で話を仕掛けた。

甲「あなた日本人、私長いこと神戸に居りました。」

五九郎「左様でございますか、珍しいですね、今日は天氣がよくて結構です。」

甲「此人私の友達あります、日本に居りました。」

乙「お掛け下さい、話あります、飲む宜しい。」

此處で腰を下して飲み乍ら日本語と佛語との合の子で兎に角談話を續けて行つた。船中では外に仕事がないのであるから、それでも一人で居るよりは面白く日を暮らす事が出来る。二人共スキツツル人で神戸に支店を有する商人である、其姓名はハウスヘルにノールドマン何れも獨逸流に出来て居る。

同室に乗り込んだ客はギリシヤ人だが、米國に渡り今度の戦争で出来た勞働成金の一人である。全然無教育の勞働者で何を言つてもオール、ライトより外に佛語は勿論の事英語も話さぬ。體格は良く、夜は早く寝て鼾聲雷の如く、朝は未明に起きる所を見ると、米國に居た時は勤勉力行能く働いた人物らしい。翌朝起き出で、顔を洗はうとしたが水がない、彼はオール、ライトと言ひ乍ら顔を洗はずに出て行つて了つた、電鈴を押すと給仕が来た、顔を洗ふ水がない事を話すと給仕は慥に昨日水を置いて行つた筈だがと獨語を言ひ乍ら不審な顔して色々調べて見たら、出口の金具に故障があり、夜の間に全部漏出したので室内の床は敷物の過半水に浸されて居る事が知れ大騒ぎに成つた。

後甲板に出て、船の跡を追うて来る水鳥の群を眺めて居ると一人の紳士が来て話を始めた。始

は英語で話をして居たが段々聞いて見るとボーランド人であつた。其處で私は嘗て獨逸に留學しボーランドを旅行した事があると云つた處が、大に喜んで獨逸語で話を續けた。大戰後の今日殊に佛國の汽船である故、大概の人は容易に獨逸語を口に出さぬ様子が明かに見える。シベリヤ經由にて日本に歸國するかの間に對して、危険なる故に印度洋を行く豫定であると告げた處が、自分の弟も現にシベリヤに出征して居るが先日の手紙によると支那人や日本人が澤山殺されたさうだからシベリヤに行かぬ方が安全だと言つた。

社交室に入り腰を下して休息して居ると、一人の婦人が話を仕掛けて來た。ワシントンの者で嘗てマニラに滞在中京都に避暑旅行を二回したと言ふ事で、色々京都の面白い事などを話し、又ワシントン大學で佐藤氏の講演を聞いた事や、緒方氏珍田氏等も同大學の出身者であるなどと、夫から夫へと話を進めて行く外國の婦人は中々交際が上手である。日本に關する記事が載つて居る雑誌など持つて來て貸して呉れた。近頃は何れの雑誌にも大概日本に關する記事が一つや二つはある。今や日本は世界の流行兒である、それだけ英米の政府の眼からは憎まれるらしい。喬木には風があたり出る剝は打たれるのが當然である、是に堪える事が出來て始めて永遠に頭を上げ

る事の可能性を得るのである。

解纜後二三日間は米大陸の東北岸に沿うて進むのであるから緯度は次第に高くなるが、氣候は却て温暖を加へ、紐育で着て居た厚い外套は無用と成り、春の氣分が何處からとなく湧いて來た。道路は一面に岩石の如き氷の山に埋まり、工夫が蒸氣機械で新道開穿でもやる様に氷をかたづけて居る紐育市の有様を思ひ浮べると全て夢の様な氣がする。日本を立つ際には東北地方の大風雪で汽車が不通と云ふのに、僅か二週間を経てハワイに上陸すれば單衣を着て夕涼をやる様な氣候、それから十日後の桑港では毛皮の襟巻でもせざれば外出が出来ぬ程の寒さ、南下して墨國の堺に近づけば再び夏の氣候となり、紐育に到れば氷點下數十度の嚴寒、僅かに數十日の間に二度も三度も冬が來たり夏に成つたりする。是で日本に歸れば出發後一年を経過せぬ筈だ。全て浦島太郎を逆に行く様な今度の旅行を回想し乍ら太平洋上を眺めて居ると、三人連の一行が傍に來て、

甲「何を考へて居ります、一人でお淋しいでせう。」  
と話を仕掛けて來た。チエツク・スローバック人で田舎者と見え言語は非常に不明瞭であるが熱

心なジユデア教信者である。

乙「言語は異つても相互の意思に共鳴する處があれば次第に理解する事が出来ます。コロンブスが米國に上陸した際には、氏の一行と土人とは全く言語を異にし、通辯する者などは勿論ある筈がない、それでも少し宛理解して行く事が出来たのです。」

五九郎「勿論さうです。話をしようと言ふ意志がなければ假令同國人でも互に他を理解せずに居る事がいくらもありません。」

甲「日本國ではジユデア教を嫌ひますか。」

五九郎「特に嫌ふと言ふ事はありません、日本では信教の自由がありません、殊に我々の眼から見れば耶蘇教でもジユデア教でも同じ事で、教義の相異は別として一方を愛し他を嫌ふと云ふ理由が少しもありません。歐米では所謂キリスト教國であるからジユデア教信者を犬猫の如く嫌悪するが何等の理由のない事です。」

甲「歐米にも信教の自由はありますか。」

五九郎「歐米では信ずる事は自由であるが、何宗教を信ずるかに従つて其待遇を區別するではあ

りませんか、それは本當の自由ではありません。モセスは凡ての人類は同胞であると説き、汝の敵を愛せよと教へたにも關らず、現今のキリスト教國程其敵を憎み人類に差別を設ける者は世界に有りませぬ。而して其最良の標本は米國です。電車や停車場の待合室迄有色人と白人との間に差別を附けるなどは何たるやり方です。然るに其米國の宣教師連が東洋に來て博愛だとか人道とか廣告するからあきれれるですよ。」

三太郎「それは止むを得んさ、裏長屋に住んで居る江戸子が田舎に行けば自分の家では黄金の茶釜で湯を沸かして居る様な自慢をするし、田舎の水呑百姓が東京見物に行けば草靴のはき方を知らぬ振りをしたり、米のなる樹はどんな物ですかと聞いたりする様な物さ、それを眞實の事と聞く者がつまり馬鹿なんだよ。」

甲「實際さうです、キリストは更に深く説いて居ります。右の頬を打つ者あらば更に左をも向けよと、それに今のキリスト教徒は如何です。凡て偽善者です。ジユデア教には世界創造の事を精しく説いて居るが、日本の傳説では何年前に世界が出来た事に説いてありますか。」

五九郎「天神七代地神五代と言ひますが、神の時代には年齢などありませんから年數で言ふ事が

出来よせんけれども、第一代の神武天皇が即位してから既に今年迄二千五百八十年に成ります。」

丙「支那には八千年の昔から歴史があると云ふが本當ですか。」

五九郎「支那の皇帝からは四千何百年に成ります。今より三千年以前既に曆の事が精しく知られ、日蝕や月蝕迄豫報して居るから八千年位は續いて居るかも知れません。」

甲「傳説では何千年とありますか。」

五九郎「支那では昔から時々革命があつて皇帝が交代するが、各一萬八千歳と言ふ様なのが澤山ありますから其合計は非常な物で何百萬年になります。」

甲「天文の事も貴殿は研究して居られますか、冬寒くなるのは實際太陽が地球から遠くなる故ですか。」

五九郎「反對です、一月の四五日頃は太陽が地球に一番近くなり七月初めに遠りなります、それですから新年には太陽が大きく夏は太陽が小さく見えます。」

乙「學術上の問題はむづかしいから止めたまへ、さういふ事を外國語で説明するのは容易であるまい。」

甲「それでは明日は天気になりませうか。」

五九郎「上晴天です。」

甲「明後日は。」

五九郎「大丈夫です。」

由「其次は。」

五九郎「怪しいです。」

甲「荒れますか。」

五九郎「荒れると言ふ程ではないが少し悪くなります、併し我々は五六日船に乗つて慣れた後ですから少し位荒れても心配ありません。」

三太郎「天気豫報を出鱈目にやるね、例に依つて適中すれば自慢をし、當らなければ知らん振をするのですか。」

五九郎「決して出鱈目ではないよ、天気は西から東に移つて行くのが一般の法則だと何時か話し



した事がありませう、昨日の夕暮は日没の跡を見ると西の空が立派に晴れて居るからそれは翌日晴天の兆である。然るに唯今の吾人は一處に定住して居るのでなく、一日三百數十海里の速度で西から東に航海して居るから天気を追掛けて往く事に成る。従つて明日も明後日も晴天だと言ふ事が出来るが今夕の西空は既に怪しく見えるでないか。

斯の如き談話をして朝晩を暮らして居ると海上生活も愉快である。食事毎に飲む葡萄酒の爲に船に酔ふ事は少しもなく、豫想通り三日後には少し荒れて食卓には杯を置き皿や酒杯の轉倒を防ぐ程であつたが乗客は概ね平氣で快談して居る。

### 三三六 大西洋上の春

翌日は大戦に際し戦場と成つた佛國の村落救済の爲に慈善音樂會を開催すると言ふので寄附金を集め、更に寄贈品を集めて之を競賣に附し、それが終了すれば舞踊をやると言ふ事に決定したので、夜の食堂は活氣を呈して來た。婦人連は思ひくく自慢の服装をして居る。半裸體に等しい美人もあれば、其隣席には毛皮の厚いのを着込んでラブランドから唯今歸つたと言ふ様な顔して居るのもある。

三太郎「全て大久保彦左衛門の我慢會を見る様だね、夏服と冬服とが雑居して暑中やら寒中やら判断がつかぬ、恐らく寒いのも我慢し暑いのも我慢して、兎に角價格の高い服装を着ければ良いのかも知れん。」

五九郎「向ふに居る婦人は首に鎖を引掛けて大きな時計を臍の上にぶら下げて居るでないか、幾ら高價の時計でもあんなに出さんでもよささうに思ふかね。」

三太郎「あれは此處一時間十フランと筋肉労働の切賣をする巴里婦人が始めた服装さ、それが次第に流行したのでせう。」

五九郎「成る程、巴里は流行の中心ですからね、日本でも奥様連が藝者の服装を手本にすると言ふから、巴里だつて同じ事かも知れんね。」

三太郎「音樂會のプログラムに日本名の婦人が出て居るね、今迄そんな女を見た事がない様だね。」

五九郎「それは西洋人だ、日本人の妻君だから姓名だけが日本流になつたので。」

三太郎「會ひましたか。」

五九太「面會しませんが例のスキッツル人から聞きました、髪を切つて頭の左右に下けて居る婦人が居ませう、あれがさうです。」

其内に食事が済み音楽會が始まり二三回を了へた處で寄贈品の競賣が始まつた。凡て乗客が持合せの品を寄贈したのであるが、各各地方の旅客の集合であるから品物も千變萬化であるが案外高價の品が寄贈されて居る。今度の大戰に殊勳を著したルイエエル中尉が販賣係である。

中尉「皆さん此帶止は幾らですか、五十フラン、次の希望者はございませんか。」

中尉「百フラン、是は日本製で日本からの直輸入品です、百フラン外に希望者はありませんか。」

乙「百三十フラン。」  
中尉「さあ、百三十フラン、もう一聲で賣りますよ、二つとありませんからお望みの方は今の内にお買ひ下さい、百三十フラン、さあつた一聲です。」  
丙「百五十フラン。」

中尉「百五十フラン賣りますよ、外にお望みの方はございませんか、百五十フラン、宜しい賣つた。」

買ふ人も賣る人も素人であるから掛聲が勇ましく飛んで行き、二フラン、三フランなど云ふはしたがな。何れもどん／＼賣れる事非常な物で香水が五十フランや七十フランに賣れ、東京出發の際に僅かに二圓で買つたハンカチーフが六十五フランに賣れて居る。米國在住者の成金振や佛國貨幣の下落が、是に依ても大概推察せられる事と思ふ。暫らく競賣を中止して再び音楽が始まつた。午後十時過ぎになると波が段々大きく成つたと見えて汽船の動搖は次第に烈しくなり、竟にあつと云ふ聲諸共に盛装せる數十名の婦人が將棋倒しに床上に倒れたので、音楽會は是にて中止し、寄贈品の残部は明日競賣に附する事として閉會した。翌日の會計報告に依ると、寄附金並に寄贈品賣上代合計金七千五百フラン餘に成つて居る。

社交室に居るのは重に米人佛人及び伊太利人で婦人が大部分は占め、左黨はバーに杯を舉げ乍らトランプに餘念よく、獨逸系やバルカン方面の者は小さくなつて甲板上进行して居る。夕方例のチエツク・スローバツク人と話をして居ると、立派な體格をした一人の紳士が來て其仲間

に入つた。彼はホイン市の者で相當の地位ある人物らしく、殊に理學的趣味に富んで居り太陽系がどうだとか、近頃更に第八遊星が発見されんとして居る、シヤゴ―大學のミリカン教授が分子の大きさを測定した、火星には運河があるから進歩した人類が居る、海王星を発見したのは獨逸の學者でなど色々の説明を成し、唯近頃アインシュタインの唱道して居る相對性原理だけはむつかしくて了解する事が出来んと自白した。

紳士「無線電信もマルコニー是を発見して以來非常な進歩だが、近頃の調査に依ると、地球上の無線電信局から発信した物でない通信が受信機にあらはれて來る事がある、多分之は火星の人類が我々地球人に通信して居るのかも知れん。」

五九郎「二三週間前の新聞にそんな事が書いてあつたね。」

紳士「さうです、唯今は社會の大問題に成つて居るのです。然るに此汽船の無線電信技師は全で其事を知らずに居るにはあきれね、外の事は別問題としても直接無線電信に關した事でありませんか。」

甲「米國の人間は駄目です、全く機械的に働いて居るのですから通信技師は單にトン／＼ツウツ

ウとキイを押して発信する事と、受信したら宛名先に發送する事とを知つて居る丈です。」

乙「全くさうです、米國では仕立屋は服を裁つ事は知つて居るが縫ふ事は知らず、縫ふ事の出来る職人は裁つ事を知らないのですからね、ボタンの穴一つ頼んでも先づ裁ち方の處で穴をあけ夫を縫ふ者の處に廻してかゝるのですからあきれてしまひます。」

丙「齒醫者は齒の事の外は何も知らないのですからね。」

五九郎「それは専門に分かれて居るから止むを得んでせう。」

丙「例令専門に分れても歐洲の醫者ならば一通りの事は凡ての科の事を知つて居ります。」

乙「米國では箱を造るにしても釘を打つ人間は朝から晩迄一生金鋤を振り上げて釘を打ち込んで暮らすのだから、鋸がどんな物か、鉋は何に使用するのかも知らんですよ、従つて板を引き切る人間は其板が何に成るのかも知らず、唯與へられた標本に寸方を合はして鋸を動かして居る便利な器械です。」

三太郎「君子は器ならずと東洋の聖人孔子が言つて居るのは至言ですな、折角萬物の靈と生れ乍ら機械同様に一生を暮らす米國の人間は哀れな者でありませんか。」

其内に夜も更けたので寢室に入ったが、翌日は既に英國の近海に來たと見えて海面は頗る穏かに、夕方には燈臺が見える様に成つた。

音楽や、獨唱やら男も女も上機嫌で騒いで居る。佛國船は食事毎に葡萄酒を使用する爲か殊の外賑かに見える。社交室の一隅に腰を掛けて居ると例の紳士が來て話を始めた。

紳士「彼等は凡て豚です、豚には大きいのも小さいのも居るが其豚たるに於て變りはない。彼等も同様です、年齢や服装こそ千種萬態であるが何れも同一で、眠る事と食ふ事とそれから今一つはスル事の外は何等の希望も理想も持たない動物です。」

五九郎「大概の人間はさうでせう、それが生物としての最終要素ですから、昔から凡ての人間は人の形をして居るが眞に人らしき人は稀有であると言つて居ますからね。」

紳士「人間にも色々あり國家にも強弱がある。併し是等は凡て或者に統一される筈です、それは神です。」

五九郎「統一される前に凡てが碎かれねば駄目です、眞の統一は是を集合する事に依つて出来る物ではなく却て之を破碎する事に依つて成熟する物です。」

紳士「其内に日本は米國を碎くでせう、日本が立てばヒリツピンもハワイも朝飯前です、カリホルニヤは既に日本人の勢力範圍でメキシコ人や黒人は一日千秋の思ひでそれを待て居る筈です。」

五九郎「日本は好んで米國と戦争する程馬鹿ではありません、戦争せずとも日本は發展する事が出来ます。」

紳士「何故戦はないのですか、日本の發展を飽く迄米國が妨害して居るではありませんか、早く米國を碎くのが良いです、獨逸ではメキシコに手を廻して今に日本と共同して仕事を始めようとして居るですよ。」

五九郎「米國が萬一支那に根據を据ゑようとして企てる事が有つたら日本は必ず戦ふに相違あるまい。米國が飛行機本部を支那の沿岸に設置したら最後、日本は最早駄目になりますからね、降ると見れば積らぬ内に拂へかし、と言ふのが日本の兵法の奥の巻です。」

紳士「飛行機隊が支那を出發して日本を襲ふ事になれば到底防禦が出来なくなりませう。」  
五九郎「其處です、テキサス州の首府サン・アントニオ市にある軍用飛行機が毎日二十臺三十臺と列を成して天空を飛び廻つて居るのを見て來たが、あれが支那の沿岸であつたらそれこそ日本

の侵入は朝飯前ですからね、現今でも良く墨米間には飛行機の着陸問題が突發するではありませんか。」

紳士「日本にも飛行機はありませう、飛行隊を防ぐには飛行機隊を以てするより外にありませんからね。」

五九郎「聡しい事だが日本の飛行機隊は殆んどお話にならんです。日本では昔から武器の使用を練習する事には全力を注ぐが其武器を改良する事は殆んど眼中にないです、飛行機も其通りで、乗る事の練習は陸海軍で大に奨励するが其改良は少しもやりませんからね、日本人は二三千年の昔から有り來つた刀劍を上手に使用するのを以て、武人の本領と心得て居た習慣が第二の天性と成つて、現今でも容易に其思想を改めさす事が出来んです。」

### 三七 佛國上陸

午前中に佛國の大陸が右舷に見え、夕方六時にはアーブル港に入つたが種々の手續を要する故に明朝七時半上陸と決定した。十時半には巴里行の臨時列車が出る筈だが乗車券は今夜賣ると

事務長の言に、夕食後給仕に問うて見たらそれは明朝でせうと答へた。午後十時頃に成つたが賣つて居る様子も見えず、社交室の戸は閉鎖されたから寢室に行き寢て居ると、十一時頃に同室のギリシヤ人が來て旅券を示し乍ら、

「エベレーワン、バスポート」

と言ふから、さては旅券の調査があるかと大急ぎに服装を整へて甲板に出て見ると、黒山の如く乗客が集合して大混雑を呈して居り、何が何やら少しも見當がつかぬ。呆然として暫らく立つて居ると、同じ食卓に坐を占めて居る米人が食堂の給仕と共に連れ立つて暗がりに行くのを見つけたから、彼を呼び止めて旅券の調査は何處でやるかと質問して見た處が、給仕に五フランを與へれば簡単に濟むと教へて呉れた。其處で少し暗い場所に行つて、旅券に五フラン紙幣を添へて給仕に手渡したら、早速裏口から事務室に入り込み、五分程で檢閲済の印を受けて來り、更に切符を一枚呉れて、此切符を持つて下りて行くのだと税關を指して居るが、此夜半に荷物の検査でもあるまいと思ひ、不得要領で立つて居ると、神戸に居た商人が來た。此切符は何に使用するのかと聞いたら、それは今夜一寸町を見物に上陸する爲です、是から出掛け様と言ふ、其處で一

所に舷門を下り、番人に其切符を渡して上陸して見たが既に夜半であるから星のみが輝いて居る。三三五五上陸する者もあるが、それ等は何れも手荷物を持つて居る處から判断すると、旅店が自分の家に行く者らしい。二三丁行つて戻り寢てしまつたが、翌朝は午前五時頃から上陸準備で騒がしく六時には朝食が濟んだ。ギリシヤ人は手荷物を片手に出て行つてしまつたが、私は手荷物が重くて自分に持つ事が出来んから、室の入口に出て見ると隣室の乗客が一名立つて居る。乗客「上陸する間際には荷物が盗まれますから番をして居るのです、決して油断が出来ません、私は加州に働いて居たので日本人を澤山知つて居ります、日本人の發展は急速で其勢力は非常な物です。」

五九郎「何處に行きますか、矢張巴里ですか。」

乗客「私は伊太利です。」

五九郎「伊太利は面白い處ですよ。私も十年前程前に伊太利見物した事があります、メジナに大地震がありました時です。」

乗客「それでは伊太利語を知つて居ますか。」

五九郎「少しは知つて居ります。」

乗客「是は愉快だね、伊太利の何處に行きました。」

「ローマですか。」

五九郎「北の端から南の端迄旅行しました。トリノからバビア、ビザ、ミラノ、フィレンツ、ローマ、ナポリ、ボンベイ、サレルノ、レッツチオ、ノジナ、アチレアレ、カタミヤ、バレルモ等を見物してバレルモから船に乗りゼノアに上陸しました。」

乗客「其ゼノアが私の町です。」

五九郎「左様ですか、ゼノアは好い港ですよ、立派なコロンプスの銅像がありましたね。」

乗客「クリストフ、コロンプスの銅像、アメリカを發見したのは私の町の人なんだから我々が米國に行つても鼻が高いわけです、本来言へば米國は伊太利人の所有たるべき筈なんですありませんか。」こんな話を仕乍ら約二十分程経過すると室の給仕が来たから手荷物を持たせて甲板に出た。既定の時刻が来ると上陸が開始されたが、先客の上陸するのを遅く後方から見ると、梯子の出口に番人が居て、昨夜の切符を受取り上陸を許可して居る。

三太郎『是はしまつた、あの切符は上陸許可證だからあれがなくては上陸出来んかも知れんが。』  
五九郎『仕方がないから、ごまかして上陸するさ、事實上から言へば昨夜既に上陸を許可されてあるのだから差支あるまい。』

三太郎『それでも其切符がなければ番人が承知すまい。』

五九郎『其處が工夫の仕所さ、紙幣を一枚疊んでポケットに入れて置くさ、其處で切符はなくなしたが旅券の檢閲は慥に受けたのですから見て下さいと言つて旅券を出せば良いでせう。萬一それでも彼是言つたら、切符は此處にありましたと言ひ乍ら、其紙幣を渡してさつさと通り抜けてしまへば良いです、大丈夫成功します。』

兎に角上陸の切符がないので大に心配した、勿論旅券の檢閲が済んだのであるから、上陸を拒絶される理由はないが、調査するから待つて居れと來たら大に迷惑する、殊に緩々と事務を取扱ふ佛國人であるから、場合に依つては臨時列車に乗り遅れる恐れがある、其内に次第に上陸して愈々自分の番が近くなつた。天祐なる哉自分より二人目の乗客が矢張り其切符を手にして居ず、番人に切符を請求されてポケットから財布を出し、其中に旅券と共に大切にしまひ込んであ

る切符を探がし始めたので、番人は其方に氣を奪はれて居る間に、自分は脱兎の如く通り抜けてしまつた。今度は税關で荷物の検査であるが是は案外簡単に済んだ。

税『煙草は持ちませんか。』

五九郎『ありません。』

税『何處に行きます。』

五九郎『巴里へ。』

税『宜しい。』

是丈の問答で荷物は全然開封もせず檢閲済の印を押して呉れた、誠に有難い次第で、一度荷物を掻き廻されると、それを元の如くに荷造りするのが實に容易でない、十圓や二十圓の税金よりも此荷造りの面倒が旅客の一番恐れる點である。税關を出て直に巴里行の客車に乗込んだ、例に依つて穢ない、佛國の品物は何でも古代整然として居るが戦争後の今日は更に甚だしい。同室に居る二人の乗客は何れも三四個の徽章を付けて居る、赤十字章や米國の自由公債を買つた徽章等であるが、一個不明なのがあるからそれは何乎と質問したら在米セルビヤ同胞團の徽章であ

つた。彼等も亦米國に於ける勞働成金の一部で今度錦を着て故郷セルビヤに歸るのである。獨逸フライブルグ生れの夫婦者が子供を連れて乗り込んだ。窓外を眺めると野には一面に青草茂り、畑には桃季梨等の花が今を盛りと開いて居る間に、荒れ果てた軍需品の工場は淋しく軒を並べて既に無用に歸した幾百の砲車や貨車が棄て置かれてある。夕方には巴里に着いた、早速新聞を買つて見たが、世界に有名なマタン紙が東北の田舎にも見られぬ如き僅か四頁と言ふ哀れさに驚いた。是を日曜日には百五十頁も印刷する米國の新聞紙に比較すると、物資の欠乏が思ひやられる。久方振りに本場の佛國料理を喰べて見ると、徒らに分量のみ多い米國の百姓料理と比較すべくもない。酔を醒ます可くセーヌ河岸に到れば三日月が晴れ渡れる空に輝いて居る。嗚呼巴里は淋しく成つた。月や星が眼に附く、紐育から巴里に来て見ると、恰も紡績工場を逃げ出して社寺の境内に入つた様な感がある。

米國では終夜運轉する電車や自動車の響きで睡眠不足に苦しんだから、今夜こそ思ふ存分に寢て見よう。

## 三七 戰跡見物

佛國巴里と言へば、世界に於ける花の都であり最も華美な場所であると、自らも任じ他も亦許して居つたのであるが、戦後の今日では殆んど見る影もないと言ふ程さびれて居る。レストーランに入つて食事をして見ると、食卓を覆ふべき白布だになくして其代りに紙を使用して居る、砂糖もなければバターもない。尤もそんな物はなくとも我々日本人は別に困りませんが、食鹽さへ満足な品が得られず、燧石を砕いたかと思はれる如き粗雑な岩鹽が卓上に置かれてあるには驚いた。

三太郎「あの人のスープを喰べるのを見給へ。」

五九郎「是は感服するね、最後の一滴をも残さんと言ふのだね、戦争前には獨逸人がケチンボーで皿まで嘗めると言つた筈だのに。」

三太郎「獨逸人が食物を一片も残さずに喰べると言つて笑つた佛國人が、今ではスープの皿を倒して其一滴をスプンで受けて飲む様に變化したから戦争の影響も恐ろしいではありませんか、尤も戦前には一食一フラン半も出せば可成りのご馳走であつたのが、今ではスープ一皿で二フラン



もするのですから無理もないがね。』

五九郎「夜がないと言はれた巴里が、午後の十時になれば石炭を儉約する爲に凡て街燈を消すと言ふのですから驚くね、戦争前であつたら夜の十二時だらうが朝の三時にならうがおかまひなしで、

わたしや 探すよ あのお寶を

月の光をまともにうけて、

迷ひ出でては モンマルトルの

ゆきつ戻りつ「黒猫」あたり

.....

などと唄ふ聲がカフェーの中から景氣よく聞かれたんだがね。』

三太郎「戦争後の今日では本當に月の光を浴び乍ら巴里の真中を歩かねばならん様になつたから可哀さうではありませんか。』

五九郎「餘裕があつてやる場合には風流だなんて賞めて居る事でも、必要に迫られてやる様に

なれば氣の毒になりますね。』

三太郎「それは無論さうさ、同じ雪の日に出掛けるのでも雪見に轉ぶ所までと言ふのと、あれも人の子樽拾ひと言ふのでは雲泥の差がありますからね。』

五九郎「さうすると今日の巴里人が月の光を浴び乍ら歩くのは、雪の日に於ける樽拾ひの境界に居ると云ふのですか。』

レストーランを出てセーヌ河に沿うて散歩し、オテル、ダンバリッドに出で、戦時博物館に入場したがどれも是れも珍らしい物ばかりで、今度の戦争は如何に科學的であり、日本の古武士などは夢にも思はなかつた種類の戦争が實現されて居る事が一目瞭然である。』

三太郎「あの大砲の彈丸を見給へ、我々の身體よりも大きいではありませんか。』

五九郎「千九百十六年ナンシイの戦に使用した物で、直徑三十八センチメートル、長さ百三十九センチメートル、重量七百四十七キログラムと云ふから約僕達なら十四五名を一束にした程の目方ですね、斯んな大きな砲彈が三十八キロメートルも飛んで來ると言ふからたまらんね。』

三太郎「三十八キロメートルと言へば約江の島邊で打つた彈丸が東京迄届く勘定です。』

五九郎「品川灣の御臺場を築いた徳川時代の古武士に見せてやりたいね。」

三太郎「此方はもつと大きいですよ、千九百十五年三月ベルダンの攻撃に使用した物であるが、直徑四十二センチメートル長さ百五十四センチメートルとあります、君の身長はいくらですか。」

五九郎「此砲彈ならば樂に這入つて行けますね、一月の世界へ向けて發砲して貰うてはどうです。」

三太郎「月迄行けますかね。」

五九郎「若し砲身を四十五度の高度に向け、毎秒十二キロメートル程の初速で打ち出す事が出来れば再び地上に落下しない筈ですから、都合が宜ければ或は月世界に届くかも知れんさ。」

モンマルトルからサクレ、クールに登り、東停車場に行き見れば十日間も先き迄切符が既に賣り切れて居り、他の停車場では乗客混雑につき當分の間切符の販賣を中止すと云ふ揭示が出て居る。公園に行つて見ると柳は緑に花は紅、小鳥の聲は昔に髪らねど人影などは何處にも見えず唯池の小波のみが騒いで居る。動物園は大と猫と鶏にて占領し其他の動物は殆んど見當らない。道行く人々は婦人も子供も西郷の銅像よろしく、衣は肝に到り袖腕に到るにも足らざる有様で、

而も未丁年の子供は男も女も膝から下が肉體をむき出しにして居る爲に、煉瓦やコンクリートの道路を馳り廻り、轉ぶたびに膝を摺りむき負傷せざるものは一人も居ない程であるのに氣の毒に思はれた。

巴里市の内外を大觀した後に白耳義に向つて出發した。汽車はオアーズ河に沿うて上りサン、カンタン地方に到れば戦争に依る損害が可成り顯著に見える。大工場は凡て破壊され、鐵道本線並に主要驛は損害多大にて到底修繕が間に合はず、止むを得ず支線を迂回して居る。殊に注目されたのは、林檎の大木の直徑一尺或は夫れ以上もあるかと思はれる物が、何里と言ふ長い間に涉りて一本残らず切り倒されて居る悲惨な状態である。此シャンパーニュ地方は佛國名物のシャンパン酒とサイダーの本場であるが、其原料となるべき葡萄と林檎の果樹園が全部獨逸軍の爲に荒されたのであるからたまらない。講和後兩國兵士が歸郷した處で、獨逸人は翌日から直に農業なり工業なりに着手して相當の收穫を得る事も出来るでせうが、佛國人にはそれは出来ない、此果樹園を整理して苗木を植ゑ、戦前の如くとは行かずとも兎に角相當の收穫を得る迄には少くとも十年の歳月を必要とするのではあるまいかと想像される。

佛白の國境も無事に通過して夕方には首府ブルツセル市に着した。先づテーターローに到りてナボレオンの古戦場を訪へば、番人は擧手の禮を以て吾人を迎へ頗る親切丁寧を極めて居る。翌日は午前七時出發自動車にて新戦場巡覽を企てた。アロスト邊から多少の損害が眼に付き、ガンを市を経てクツケラール村に到れば有名なる大砲ランゲマックスがある。田舎の林の蔭に三百八十ミリメートル砲が据ゑつけられてあつたので今では幾跡名所の一つとなつて居る。更に進んでイゼール附近に到れば、鐵條網は其の儘に残り、大砲の彈殼が處々に山の如くに積み上げられてある。鐵道のレールが取りはづされて居るのを見ると、滅茶苦茶に曲けられて到底再び之を使用する事が不能である事云ふ迄もない。

怪物の如く處々に轉けて居るのは有名なタンクで、カモターヂユは今も昔の儘に残り、之よりイーブル市に到る廣漠たる平野は墓標のみ林立し、一望千里枝は折れ幹は裂け、花は更なり葉の一枚だに見る由もなく、鳥も鳴かねば蝶も舞はず全く死の國と化して居る。全滅のイーブル市に到れば、倒壊せる教會堂の附近に小屋掛して居残れる僅かの市民を見るのみ、大多数は何處に漂浪して居るものやら。

三太郎「あの假小屋を見給へ、なか／＼簡單ではありませんか、兩側にトタン板を一枚宛立て、夫れに一枚トタン板を載せて屋根とするのだからあれならば直ぐに出来ませぬね。」

五九郎「あれでも實際の處を言へば、あのトタン板を手に入れるのが容易の事ではなかつたでせうよ、自分の家丈がやられたのなら隣近所から材料を集める事が出来るけれども、朝の七時から正午迄自動車で驅巡つても半分も見られない程広い場所が全部やられたのだからね。」

三太郎「さう言へばさうですね、これでは職人も居なければ手傳人足も頼む事が出来まいから、よ。」

つまり各自が自分の事をする外に方法があるまい。斯うなつて見ると文明人は却て不幸です。丁度灯火が消た爲に物が見えない目明きが盲人から憐まれる様に文明人が野蠻人から笑はれます。

九五郎「全くさうですよ、暴風で電信電話が不通になつたり洪水で汽車が不通になつたりすると、よく日本人は科學的文明の悪口を言ふが、それは丁度灯火が消えた際に扱て／＼目明きと云ふ者は不自由な者だと云ふ盲人同様です、誰がそれだからと言つて此立派な兩眼を潰して盲人の仲間入りなどをする者か。」

川中島や關が原の古戦場のみを見て居る吾々には、晝飯の時間を除いた丈で午前七時から午後七時迄止味十一時間、自動車で馳せ廻らなければ大觀する事の出来ない程廣大な戦場を見ては、現代の戦争が如何に甚大であるかに驚くの外はない。翌日は今度の戦争の序幕に名を揚げたりエーヂュ市に行つて見ると、何時何處に戦争が有つたと云ふ風に無事平穩である。聴く處に依れば、此邊は講和後には當然獨逸に併合する豫定であつたから、動産は凡て掠奪したが不動産は其儘手を附けずに保存して居たに反し、西海岸英國との關係上到底獨逸の物に成らんと見切りを附けて、出来る丈多くの損害を與へたのであると云ふ噂である、或はさうかも知れん。

郵船會社歐洲般路の終點として有名なアントワープ港見物に出掛けた。先づ公園を見て南に向へば、國旗出で、道路に岩鹽を播き、更に五色のコンフユッチーは今を盛りと散り行く櫻花の如く道に降り積つて居る。今日は舊教の祭日で大行列の渡行があるのであつた。犬も歩るけば棒にも當ると云ふが、期せずして斯る宗教的のお祭を見る事の出来たのは或は神の引き合せかも知れん。稚子行列は佛教のと同小異で、白や赤や黄などの造花を綱にて引き、キリスト教徒だけに白百合は殊に大仕掛にて、男子は提灯行列をなすもあり、ボイスカウトの一隊あれば、マリア

の像を婦人六名にて捧持し行くもあり、最後に天蓋の内に入りて歩み行くは大僧正なるべく、凡て帽子を冠らざるは昔の儘の形式を保存して居るものと推察された。行列を見終つてから海岸通りに出て、進むこと暫らくにして『もしくあなたちよいと休んでいらつしやいな』と日本語にて呼ぶ女の聲が聞えた。斯んな處に日本人が居るのか知らんと思つて振り向いて見ると、それは小料理店の雇女であつた。勿論日本人ではない、大戦後日本の船員が當地で豪遊をする結果として、彼女等は日本語を覺えたのである事云ふ迄もない。繪葉書店でも煙草屋でも乃至はカフェーでも簡單な用事は日本語で通する迄に發展して居るには驚いた。是ならば何も西洋人に日本語はむつかしくて覺えられぬなどと心配する必要はない。國家が發展し國民が活躍しさへすれば言語は自然に擴がつて行くのである。

### 三九 ノートルダム

三月二十七日の朝早くリオン市に着いた。赤帽ではない黒い喪服を着けた妙齡の婦人が、手荷物運搬に従事して居る丈でも戦争の悲哀が停車場に満ちて居る。當市は佛國で第三位に當る大

都會ではあるが、米國の市街に比すれば誠に淋しい。停車場に着到せる兵士が立番して居るのが異様に感ぜられ、更に停車場前の廣場に假建築物があり、チエック共和國と大書せるのが眼をひいた。朝食前の事であるから店の窓は未だ閉ぢた儘である。リオン市はローン河とソーン河と相會する地點に發達した市街地であるから、山水の景色は自然に具備して居り、殊に河岸の堤防の見事なるは世界に誇るに足る物がある。停車場前で佛國特有のパンとコーヒーに簡單なる朝食を濟まし、河岸に沿うて散歩した。並木の下には野菜其他日用食料品の朝市が開かれて居る。上等の葱が半打で五十サンチムと云ふ様な調子で賣子が熱心に通行の客を呼び止めて居る。十二年前の留學生時代を回想して比較すると、佛國に於ける生活難の程度が明かに伺はれる。嘗て四個月間茲に滞在したのであるが、其當時知己を忝うした木島領事や小野正金銀行支店長などが今も猶御在任であり、今度横濱からコレア丸に同乗してカリホルニヤを共に見物した片山氏御夫婦も當地に居らるので、何となく故郷に歸りたる様な氣持になる。横濱解纜後三個月間の旅の勞れを醫する事が出来た。當市には三十名内外の日本人が居留して居らるゝが其親密なる事は恰も一家の如き物で、米國や英國に於ては到底見る事出来ない現象である。數日間は茲で休養した。

市の西側には丘陵連綿と起伏して居るが、其處にリオン名所の第一位を占めるフルビエールがあり、此丘の上はノートルダム寺院が建てられてある。ローマ帝國の全盛時代に耶蘇宣教師が遠く船に頼りてローン河を逆上り、此勝地を卜して教化事業を始め、今日のリオン市が發展すべき基礎を築いたのである。丘上に立てば恰も春の花盛りで、野も山も一面に花ならざるはなく桃源の仙境に遊ぶの感起り、戦後の様子などは少しも外形に現はれて見えぬ。

五九郎佛國では巴里市を始め處にノートルダムと言ふのがあるが、之を直譯すると我等の婦人と云ふ事に成る、まさか古代の西洋人が婦人を男子の共有物として居た譯でもあるまいがね。

三太郎支那では秦の始皇帝の時に始めて法律を設けて、父子其室を異にしたと歴史に書いてあるのを見ると、其以前は共有にしたので恰も犬や猫の様な物であつたかと思はれるから、西洋なども古い昔は或はそんな事があつたかも知れぬ。露國では今日でさへそんな話があるからね。併し茲に祭られて居るノートルダムと言ふのは聖母マリアの事ですもの、同じく社會の共有と云つても其意味は君の考へて居る事と同一ではありますまい、宗教上の立場から見れば聖母マリ

アは信徒全體の共有である故に、之をノートルダム、と呼ぶのが適當でありませんか。」

五九郎「若しキリスト教の立場から見れば、聖母を祀るよりもキリストを祀るのが正當でありますまいか、然るに何處に行つて見てもキリストの像や十守架は横の方に第二位に置き、中央にはマリアの像を飾つてあるのは了解出来んですね、西洋は女尊男卑だからと言へばそれ迄だが。」

三太郎「女尊男卑だからマリアを上位に置くと言ふのではありますまい、多分マリアが昔から上位に祀られて居ると言ふ事が、後世の人に女尊男卑の習慣性を生ぜしめたのであるまいか。」

五九郎「君の説を探る事にすれば女尊男卑の考よりも、更に以前にマリアが祀られてあつたと言ふ事になるが、マリアは今を去る事僅かに千九百餘年前の人でありますか。」

三太郎「耶穌教の歴史では其通りであるが、併しマリアの像が祀られたのは果して其以後であると断言する事が出来るかどうかね。」

五九郎「それは亂暴な議論ではありませんか、マリアが生れない前からマリア像が祀られてあるかも知れんと言ふのは。」

三太郎「勿論あれがキリストの母たるマリアの像であるとするればキリスト教が出来た後に祀られたに相違ないが、場合に依つては其以前から祀られてあつた像を、キリスト教徒がマリアの像と改名したかも知れんですね、其様な例は外に澤山ありますもの。」

五九郎「是は面白い考ですが唯の想像説では仕様がなかりありませんか、尤も臺灣の蕃社などでは婦人が其部下を率いて遠征し、新開地を拓して領域を劃し一社を創設したと言ふ口碑が澤山あるから、新しい植民地で女頭人を祀つたと考へれば考へられない事もないがね。」

三太郎「何れ其つもりでは是から歐洲見物して歩いたなら、其起原を知るべき材料が見附かるかも知れんさ。」

五九郎「今の話で思ひ出したが、マリアの像は何處でも赤子のキリストを抱いて居るのが正面に祀られて居て、極刑に處せられたキリストを抱いたマリアの像は、堂宇の側に置かれてあるのなども了解が出来んですね、衆教上の立場から言ふならば、衆生を救はんが爲に極刑に處せられたキリストが尊いので、生れたばかりの赤子が尊い理由があるまいと思ふがね。是などもマリア像に對する根本的の疑問となる譯です。今此山の麓にあつた禮拜堂に祀られて居る兩種のマリアの像の

顔を見比べて来たが、マリアが人間であるとすれば、赤子のキリストを抱いて居るマリアが、花ならば盛りの處女で二十歳前後と假定しても、其キリストが成人して三十歳から説教を始め、あれ丈の大事業をなして三十三歳で極刑に處せらるゝ頃には、既に婆さんと迄は行かなくとも、陰道既に閉鎖した五十歳以上の年増女である筈でせう、然るに其容姿には決して夫れ程の相違がないばかりでなく、或は却て後者の像が若く出来て居る様でしたよ、まさかマリアは萬年處女で年を取る程若くなつたと言ふ事もあるまいに。』

三太郎「君の様な人間に會つては神様もたまらないね、折角禮拜堂に入つたと思ふと、マリアの容色や氣量の善し悪しなどを見て來るとは非道いではないか、それだから世人は信仰物理學者は信仰心を片端から破壊して行く者だと憤慨する様になるのも無理はないね。」

五九郎「信仰物理學は決して信仰心を破壊する者でないよ、夫れは全くの誤解と言ふ物です、信仰物理學は唯信仰の對稱物を精選する丈です、換言すれば、偽物には容赦なく筆誅を加へるので眞の神様や崇拜すべき價値のある者は偽物を排斥する事に依つて初めて世間から其眞價を認められる筈です、邪神淫祠が勢力を振ふ間は駄目で眞の宗教は榮える事が出来ますまい。』

三太郎「夫れもさうだが併し、世間ではあれも偽物だ之も喰はせものだとあらゆる神様をけなすのが信仰物理學の目的であるかの如く批評して居りますよ。」

五九郎「世間の批評を此方から指導して行く譯には行かんでありませんか、尤も開校式には來賓に對して主人側から祝辭を讀んで呉れと頼んで來たり、お役所では思想の善悪だなんて自分の仕事を賞讃する事を人民に教へ込んだりするのが流行する世の中ですから、批評の仕方を當方から教へてやるのも現代式であるか知らんがね。」

三太郎「賞めて呉れと押賣りするわけには行くまいが誤解されない様に讀者の蒙を啓く必要はありませう。」

五九郎「蒙を啓くはひどいね、萬一議會であつたらそれこそ失言問題ですぞ。」

三太郎「夫れなら今のは失言であるとして取消しとします、兎に角信仰物理學は神の價値を否定する物でないと言ふ説明を聞きたいですね。」

五九郎「茲に一つの礦石があり、夫れが金色燦然と輝いて居る爲に、世人は夫れを立派な金礦であると信じて貴重品扱にして居ると假定して見給へ、其時に一人の化學者が來て之を分析し、

此礦石は硫黄と銅の化合物から成る黄硫銅礦と言ふ物であると説明した事が、黄金の價値を下落せしむるものであると思ひますか。』

三太郎「其爲に黄金の價値が下落する筈はないさ。黄硫銅礦の様なつまらん物迄黄金の部類に入れては却て黄金の價値が下落するので、そんな化合物や人造金などを片端から除いて行き、最後に眞の黄金は澤山ない物であると言ふ事が明白になればこそ黄金が貴いのですもの。』

五九郎「神様たつて同じ事でありませんか、純金は化学者はいくら分析仕様としてしも分解されずどんな薬品を試みても変色したり錆を生じたりする患がない爲に、益々其價値が認められて来た如くに、眞の神様も物理學者の研究で箔がはける心配はなく、却て益々其價値が明かになる筈です。必竟するに、信仰物理學は偽物を分析して其正體を見破るのであるから、最後には眞の神様丈が残る筈でせう。従て信仰物理學のプロバガンダを恐れる様な神様は、自分が偽物である事を承認して居る邪神ばかりさ。』

こんな話を仕乍ら觀望臺に昇りて山麓を見渡すと、ローン、ソーンの兩河は蜿々として北方より流れ來り、市の南部に於て交會する處さながら雌雄の大蛇に似て居る。東方は遙に平野續き、

左手に壯入なる無線電信柱の見ゆるあたりは金頭公園である。日曜日にて恰も教會堂に於ける禮拜の時刻であつたから入場した。澤山の椅子が入口の兩側に山の如く積まれてあるが、中央の廣場に置かれてある物は割合に少く、且夫れが全部先に參會した信者に依て占領せられて居る。何故に有り餘る澤山の椅子を出さぬのであらうかと、心中密に疑問を起し乍ら一隅に立つて居ると五十歳程の婆さんが椅子を出して呉れた。丁度淺草邊の見せ物小屋で座布團代を取り立てると同様に、佛國の教會では禮拜者から椅子代を取り立て、居るのである。其爲に禮拜者が退出すれば直に其椅子を取片附け、新に來る者ある毎に之を提供するのである事が了解された。戦後の生活難は宗教界迄押し寄せ來り、金十サンチームの持合せがなければエス・キリストの御名に依つて、天にまします彼等の父に清きお祈りを捧げる事すら出来なくなつた佛國人の事を思へば、地獄を見物するに金五錢の入場料を徴集せられる日本人の方が遙に幸福であるかも知れん。

## 四〇 スフィングスの謎

市の中央にある博物館は有名であるが戦後の今日では一部分のみ公開されて居る。入場して見



ると、中庭の四方には古代の彫刻物が陳列されて居る。右側の廊下にある上半身が人間で、下半身が馬に成つて居る大理石像が注目された。

五九郎「東洋の歴史にも支那には嘗て人身牛首の天子様が居たと云ふが、同じく半身半獸ならば頭が獸で下が人間であるのと、頭が人間で下が獸類に成つて居るのとどちらが理想的だらうか。」

三太郎「理想的と言ふ質問の意味が明かでないが、兎に角進化論に依れば、元來人類と雖も最初は普通の獸類同様であつた物が進化して人類と成つた物である。而して人類が他の諸動物に優れて居る點は其手や足の如き肉體的部分が發達した爲でなく、頭惱の優秀なる事であると言ふでありませんか。して見ると腰から下は馬の様に丈夫に出来て、頭が人間らしく進歩して居ればそれが理想的であるまいか、つまり口に丈は人間らしい事を言つて居乍ら、獸慾の方は馬の如く發達して居る物が勝を制すると言ふのです。」

美術的趣味に傾乏した三太郎や五九郎の事であるから、何を見ても猫に小判同様で素通りするばかり、稀にソファーに腰掛けて緩々見てゐるから何か氣に入つた繪があるかと思へば、其實は疲れたから休んで居るに過ぎない場合が多い。

五九郎「茲に面白い物が陳列されてあるから來て見給へ、ビグミーと言ふ札が附いてますよ。」

三太郎「ビグミーなら矮人と言ふ事ではありませんか、矮人の實物なら幾く價值があるけれども、彫刻ではどんなにでも小さく造る事が出来るから小さい丈では矮人と名附ける理由がない譯ですね。」

五九郎「満足に發育した五尺の大丈夫をモデルにして五寸の像を造つたのでは勿論ビグミーと云ふ題にはならんさ、之がビグミーであると言ふ事を形の上に表はすには標準たるべき何者かあり、それに比較して其人物の身長が短い様に作り上げれば宜い筈ではありませんか。」

三太郎「それはさうですとも、處で大きな犬でも連れて居たとすれば果して人が小さいのであるか、それとも犬が巨きいのであるか判別がつかますまい、大小は單に比較的の物ですから。」

五九郎「そんな理窟を言ふ暇で一寸來て見給へ、或物に比較して身軀が非常に小さく出来て居るから。」

三太郎「成る程是は又到底比較にならん程身體が小さいですね、併し見様に依つては身體が小さいのでなくて、寶石だけが特に巨きいのであるとも見られるですね。」

五九郎「夫れは作者の考へに信頼する外はないさ、ピグミーと言ふ題で作り上げたのであるから大黒様は人並であるが其割合に身體の全部が小さい人間であると思なければなりませんよ。」

三太郎「此方にはダロツテスクと言ふ題で似寄つた者が出品されてありますよ、グロツテスクは巨陽と言ふ様な意味であるから、此作者の考では慥に身體の各部が人並であるが、陽物丈は非常に巨きいと言ふつもりでせう。」

五九郎「昔チベス國の王ラブダカスの子にライアスと云ふのがあり、メネセの娘ジョカステと結婚するに際し豫言者に結婚の將來を卜つて貰つた處が、新夫婦の間に生れた子は父を殺す運命を持つて居ると言ふ驚くべき豫言をしたので、他日彼等の間に生れた子エヂブをシテロン山に捨ててしまつた。其當時折良く其處を通過したコリンテ王の臣下が之を拾ひ、女王は之を養女として育てた。エヂブが成人してから自己の運命を卜つて貰つた處が、父を殺し母を妻とする相があると言はれたので、其様な不倫の事をする自分でないと言つてコリンテ王國に居るを憚り、世界流浪の途に就いたが途中にライアスに出會ひ、自分の實父と知らずして是を殺してしまつた。其後諸國を漫遊してチベス國に來た處が非常に荒廢して居る。」

三太郎「何の話ですかそれは此陳列品の故事ですか。」

五九郎「まあ聞いて居給へ、此チベス國が荒廢した理由は何處にあるかと言ふに、それはチベス人に對してジュノンが遣はした怪物スフィンクスの影響であつた。」

三太郎「頭と腰とは若い婦人であるが、胴體は犬で龍尾と鳥翼とを具備して居るとか云ふ怪物の話でせう、兎に角世人は頭の飾りや腰つきなどを見て相手を評價するからそんな怪物の爲に國家有爲の青年が身を亡してしまふのです。」

五九郎「此スフィンクスがフイセの山に陣取つて通行人に、

「晝は二本足で歩くが夜になると三本足になる動物は何乎。」

と言ふ謎を懸け、若し解答し得ざる者は凡て之を殺してしまつたので、來るのも來るのも殺されたのであつた。」

三太郎「其事ですか、つまり此處のグロツテスクが其動物であると云ふのですか。」

五九郎「君にも其謎が解けたのを見ると昔の人は可成り頭が悪かつた様だね、萬一其當時チベス國に斯んな博物館があつたら可惜青年を殺されずに済む筈であつたがね、併し考へて見ると變な

謎を出したものでありませんか。』

三太郎「して其豫言者の占は當りましたか。』

五九郎「王姫ジョカステの兄クレオンがライアスの死後政事を見る事になり、全ギリシヤ國內に布告して此謎の解答者を懸賞附で募集したのです。』

ナットモ  
面白くすすす

三太郎「賞金は何です。』

五九郎「此謎を解いた者にはテベス國の王位のみならず、王姫ジョカステをも與へると言ふのです。』

三太郎「成る程、晝は二本足で歩くけれども夜になれば三本足になる動物が何乎、と言ふ謎を解いた者には自分、妹を呉れると言ふのです乎。適富な寶子ですね、其謎が解せん様では未だ結婚する資格がありませんからね。』

五九郎「其處でエチブが此謎を解いた爲に、スフィンクスは谷底に投身して死亡し彼は芽出度王位に登り、王姫ジョカステと結婚したと言ふ事になつて居ります。それは兎も角として西洋の美術家は面白い物を作るですね。』

三太郎「日本の美術家だつて作らない譯ではあるまいが、こんな物を出品する事が許可されないのでせう、古代の傳説や口碑を土臺にして其思想を形の上に表はせば是に類した物がいくつも出来る筈です。』

五九郎「東洋にも矮人の傳説はあるが、其矮人は單に身長が短かいと言ふ丈ではありません。例へば臺灣の牛蕃などで現今もコボジ蕃内文社に傳つて居る傳説に依ると、太古チャジャカブスの山に太陽の生み落した二個の小石があり、神人ミリミリカヌ之に向つて歌を唄つた處が其石が破れて多くの人間が生れた。何れも身長二三寸に過ぎざる矮人であつたが、四肢五官は皆具備して居つたとある。』

三太郎「臺灣の蕃社にならば巨陽に關する傳説も立派なのがありますよ、甲乙各蕃社に依て傳説にも多少の異同はあるが、パリジャオ蕃高士佛社の傳説に依ると、昔カボラルと云ふ巨陽の男があり、婦人が戸外に裁縫とか仕事などして居ると、彼は谿底や森林の蔭に身を潜めて居乍ら其婦女を犯す事が出来たさうだ、つまり手長や足長などと同じ種類の思想から出た産物で別に不思議はあつない。』

五九郎「それ位の事なら必ずしも臺灣蕃社の傳説などを引合に出さなくとも、日本の歴史で有名な僧道鏡と言ふのが居るで有りませんか、恰も小守が赤兒を脊負ふて居る様にして頭布を冠せて居つたと言ふ噂ですよ。」

三太郎「僧道鏡は必ずしも歴史に傳はつて居る様な墮落僧ではないと辯解して居る學者もありますよ。」

五九郎「看病の爲に盡力して寵幸を得たから醜聞係があると言ふのは邪推かも知れんさ。けれども佛教の開基たる釋迦牟尼佛は皇太子と生れ乍ら皇位繼承権を放棄したでないか。然るに道鏡はどうです、内道場の禪師として女帝に近づく事が出来た事を悪用し、太政大臣から法王となつたばかりでなく天位を覬覦したでせう、日本の國體を離れて單に佛教の方面からだけ考へても、釋迦の主義とは全然逆行して居る故に僧侶としては墮落の絶頂ではあるまいか。」

三太郎「そんな事を言つたら朱の衣を着たり、金蘭の袈裟を掛けたりするのが凡て釋迦の主義に反する破戒の坊主と言ふ事になりませう、併し乍ら三古の運は盛衰不同の道理で二十世紀の今日では既に戒法がない、戒法がないのであるから破戒の僧などは一人も居ない。末法の世には唯名義

上の僧侶が居る丈である。而して夫れでも世の眞寶である傳教大師が説教して居るよ。」

五九郎「自分等に都台の宜い事丈を言ふのが宗教家の特點と見えるね。」

三太郎「必ずしも宗教家ばかりとは限るまいさ、世間は凡て其通りでせう。」

### 四一 キリストの昇天

數日間リオン市にて休息した後は英國に向つて出發した。先づヂヂオン市に立寄つたが恰もバクスの休日になり、大學始め諸官衙は閉ぢられてある。活動寫眞館又は開いて居るから見物したが大混雑である。映畫はキリスト一代記で天の一方に新星の出現に依つてキリストの誕生が豫告せられた事から、國王ヘロデが自己に代りて世界に王たる者の出現を恐れて幼兒を虐殺する有様やマリヤ夫婦が幼兒を共に逃げ落ちてエジプトに旅行する事や、ゼザスが荒廢せる寺院の跡を徘徊し乍ら宗教界の改革せざるべからざるを思ひ立ちて、其主義のプロバガンダに一身を捧げ、竟には自己の載るべき十字架を背負ふて行く途中、幾度か倒れたる後其十字架上に落命し、最後に昇天する處迄如何にも本當らしく仕組んで撮影してある。

五九郎「宗教家の傳記と娼妓の手紙とは徹頭徹尾うそで丸めて讀者を泣かせる者だと誰やらが言つて居るが、あんな出駄羅目を二十世紀の今日平氣でやつて居れるのが寧ろ昇天以上の奇蹟であるまいか。」

三太郎「我々から見れば奇蹟であるが信者から見れば夫れが歴史上の事實なんだから、事實を紹介するのに二十世紀であらうと三十世紀に成らうと差支あるまいでないか。」

五九郎「新星の見えたのがキリストの出る前兆であるとする、其前や後に現はれた新星は何の前兆になるだらう。」

三太郎「外にも新星が出現した事がありますか。」

五九郎「有りますとも、古い處では西曆紀元前百三十四年にヒツバルカスが研究したので有名な新星出で、千五百七十五年十一月に出現した新星などは、最大光度を有する金星よりも光が強くて書間でも見え、其後三百年間には有名な新星だけでも三十位はあります。殊に今世紀の初め即ち千九百一年二月二十二日に發見された新星などは、私も實物を見ましたが翌二十三日は矢張り四月に次いで強く光りましたよ。」

三太郎「そんな大きな星が何處にありますか。」

五九郎「今では最早ありません。新星は急に大きく成る代りに直ぐ小さくなります。其新星などは二十一日から二十二日迄二十八時間の間に少くとも一萬倍程光が強くなつたと言ふが二十四日以後は漸り始めて其年の秋には肉眼で見える事が出来なくなりました。此新星は其後研究の結果に依りますと地球から約三百光年の遠距離にあるさうです。」

三太郎「三百光年の距離と言へば日本では丁度織田豊臣の時代に天の一方に出来た其星の光が、第二十世紀の初に地球に到したと云ふ事になるですね、さうすると石田三成が三日天下になる前兆でもあつたかね。」

五九郎「キリストの生れた時に現れた新星なども其距離から言へば遙に遠方にあるので、實際宇宙の一點に其星が出現したのはそれから何百年以前何千年以前か知れたものでないさ、ヘルキユール星座などは其光が地球に達するのに十萬年も掛ると言ひますからね。」

三太郎「ヘルキユールで思ひ出したが昇天と言ふ術語なども昔からあつたので、何もキリストに始まつたわけではない。例へば何時ぞやリオンの博物館で番人が説明した如くヘルキユールなど

も其一人です、ヘルキュールの毒矢に當つて將に絶息せんとするケントールは、一服の妙薬を婦人に與へて、人の將に死なんとするや其言善なり、我死後に此藥をヘルキュールに服用せしむれば、彼の心は忽ち愛に迷ふて今日の出來心の爲に、汝が永遠にヘルキュールから捨てられる様な恐れはなくなると告げた。婦人は之を信じ、リーカスを使として此藥をヘルキュールに飲用せしめた處が忽ち其毒に中りて斃れた故に、彼の父ジユピターは其子の横死を憐み昇天せしめて神の一座に列せしめた、それが即ち七夕祭で有名な織女星の近所にあるヘルキュール星座であると語り傳へられて居る筈です。」

五九郎「昇天と言ふ事は今では形而上の意味に解して居るが、元來は必ずしも左様ではありませんまい、恐らくは生物の第一歩は地中に或は少くとも水中に發育したもので、それが發育進化するに従つて地上に出で、或は水中から這ひ上り陸生動物となつた物であり、更に成熟すれば羽化して空中生活をするのが自然の順序であります。豈く共始めに空中に發育して成熟後に水中や地中に潜んで行く動物などは見られません。吾人が日常見て居る蟬や蜻蛉の類は云ふ迄もなく蟻でさへ羽化して昇天するのである。是を見た人類の祖先は如何に彼等をうらやんだか知れまい。殊に地

上には彼等の恐れる暗夜があるけれども天上には永遠の光が輝いて居る往いて天國に生れん事を願ふのは理の當然であります。

三太郎「或は左様かも知れませんが、他の方面から見れば向土心を算ふと云ふ事も同一の精神であり、昇天と云ふ考へを起した根柢でありますまいか。」

五九郎「上と言ひ下と言ふ事が既に自己の立脚地から割出した事で、上下四方と云ふ形而下の方面角から起りたるものであるのは争はれぬ事であり、然るに鐵道線路の上を往復する機關土の輩から見れば、前に進むか後に退くか二つより外に途がない故に、彼等の世界には前後の差別があるのみである。是を物理學上では一次元の世界と名附ける。而して前と後とは絶體的の區別あるかと言へば必ずしもさうではない、單に機關車の方向を轉換すれば前後の區別が轉倒するのである。次に海上を走つて居る船頭の場合を考へて見ると、彼等の行く可き途は前進後退の外に而楫取楫の區別がある、換言すれば彼等の世界には前後左右の差が認められて居る、是を物理學上では二次元の世界と呼んで居る、そこで前後左右の區別は絶體的の物であるかと言へば是も亦相對的に過ぎない、如何となれば右に右にと楫を取つて行けば船はぐるぐると廻轉する事にな

り、初に右の方に見えた島は前になり、次には左に見え最後には後に隠れる事になる。それであるから前後や左右の別は一時的の區別に過ぎないのであります。」

三太郎「そんな事は何も昇天の問題に關係ありません。」

五九郎「急がずに聞き給へ、漸は順序を追うて進まなければ理解され難い物です。吾人が現在住んで居る世界は三次元である、其處には前後左右即ち四方の外に上下と言ふ方向がある。従つて之を六合とも稱する、其處で上下の區別も亦前後左右の如く相對的の物であるかと反問して見る、天地の間に生を受けたる吾々が、上と呼ぶのは頭上、即ち天の方向で、下とは脚下即ち地のある方向である。そこで吾人若し倒立したならば頭と脚とは其位置を換へる事になるが、此場合に吾人は天を指して下と言ひ地を指して上と言ひ得るかと言ふに必ずしもさうは言はない、上下の區別は頭や脚の位置に依て決定せられた物ではない、例へば吾人若し横臥したとすれば左手の指す方向を左と言ふけれども、頭のある方向を上とは言はないのである。従つて前後左右は個人の肉體を基準として決定した物ですから、甲乙相對座する場合には、甲の見たる前後左右と乙の見たる前後左右とは一般に一致する物ではない。然るに上下の方向は彼等兩人のみならず何人にも共通

である。換言すれば上下の區別は個人の肉體を離れて別に之を決定する物がある。」

三太郎「そんな事はありますまい。吾人の肉體を離れたなら何に依て上下の區別が出来ますか。」

五九郎「肉體には關係があるけれども頭や足の位置には關係がないと言ふのです、上に昇るには吾人の努力を必要とするけれども、物體は是を自然に放任する時獨りに下降する。即ち普通の物體が自然に動いて行く方向が下で、之に正反對する方向が上である。斯の如く考ふる時は前後左右は相對的であるが上下の區別は絶對的であると言ひ得るかも知れません。」

三太郎「勿論さうです、それだから古人は上下の區別を絶對的であると認めたのでせう。唯今のお説の通り、地下に落ちる事は自然に放任して置きさへすれば良いので誰にも出来る事であるが、天に向つて昇る事は高ければ高き程益々多大の努力を必要とする難事であるが故に、是に成功せる人は以て衆人に誇る事を得べく、衆人も亦之を賞讃する事必然の理であります。」

五九郎「それで高い物の終局は天であり、天に輝く日月星辰は自然美の優逸なる物であるから、昇天して星座に列する事は古人に取りて究極の理論と成つたのであります。隨て古人が唱へたる向上とは、東洋流に言へば、月の世界に住むと推察せられた天人を理想として、是に似寄りたる

人物に自己を改造する事であるが、事實に於て吾人の肉體は重きに過ぎ飛行自在の境界に達する事不可能であつたから、竟には死亡に依りて重き肉體を捨てたならば其靈魂だけでも天に登り得る物と考ふるに到つた。』

三太郎「成る程さう聞いて見ればそれに相違ないかも知れませんが、そこで人類から見れば誠に下等の生物と認めらるべき泥中の動物が、一度蟬脱すれば羽化して登天する事實を眼前に目撃して居るのであるから、吾人の祖先が人類も解脫する事に依りて昇天し得る者と類推した筈で、吾人若し此結論を是認するならば、解脫の境界に近づく事が即ち向上であると説く古人の論に誤は無いでもありませんでした。』

五九郎「地の現存する事は今も昔も變りはありません、然し乍ら古人の考へた様な天は果して實在して居る物でせうか、大正の今日にありてはあれが天であると指示する事は出来るけれども、天の在る所を決定的に指定する事は吾人に不能の難題であります。假に天を指して上へ上へと昇つて行つたとしたならば最後には何處に到達すると思ひますか。』

三太郎「天は何處と定まつて居ない事は昔の人でも知る事で、例へば莊子などは天之蒼蒼たるは

其正色かと言へば、單に其遠く至り極まる所なきが故に青く見える物で、高きに登つて下を視ても又其色の蒼々たるは同一であると説いて居る。其處で天は何處と定まつて居ないにしても、上と言ふのは地平面に垂直なる方向であり、同一地平面に下した凡の鉛直線は互に平行であり、凡ての平行線は無限の距離に於て一點に會すると言ふ事は、私が今茲で説明する迄もなく幾何學の大家ユウクリッド氏が説破して居る筈ですから、昇天して何處迄も進めば最後には親も子も、先に死んだ細君も後から追掛けて行つた亭主も一處に出會ふ事になるではありませんか。』

五九郎「地面が平かであるならばお説の通りであるが、第二十世紀の今日では地平などを信ずる人は、何時ぞや東京の新聞で大々的に紹介された者が日本の田舎に唯一人残つて居るだけで、其外の文明人は之を球體であると認めて居りますよ。地球が球體であるとすると、其表面の各地に於ける鉛直線は上方に行くに従つて益々互に離れる筈であるから、先に米國で死んだ細君と後に日本で死んだ牧師とは、共にキリスト様のお恵みに依つて芽出度昇天した處で、未來永劫相會する機會などはありますまい。尤も此説に従へば、地下に向つて落ちて行くならば支那から出發しても南洋から出掛けても、最後には地球の中心に行く筈であるから宗教信者が死後に相會する



を欲するならば宜しく昇天して天國に行く事などは見合せて、一層の事地獄に落ちる方が其目的を達し得る事體であると言ふ事になりますよ。古歌にさへ、

雨、霰、雪や氷と隔つれど

落ちれば同じ谷川の水

と言つて居る。それが本當の眞理で、零落すればこそ貴族でも平民でも終には同じ所に落ちて行くのだが、お互に向上した日には次第に其距離が遠くなるばかり、同じ村で育つた竹馬の友でも容易に面會する事さへ出来ず、竟には夫婦でさへ別居したり親子でも一所に居る事が出来なくなるのが社會の實際でありませんか。』

三太郎「地球が球状であるとすれば昇天しても一點に會する事は出来ないとした處で、上下の區別が絶對的であると言ふ事には變りはありませんまい。』

五九郎「地球が球状であるとする上下の區別も亦絶對的では無いと云ふ事になります。一村や一郡と云ふ様な猫の額の如き小局部に限定すればこそ、甲から見た上方も乙が言ふ上方も同一方向であるが眼界を少しく大きくして考へて見給へ、日本の東京邊で頭の上と考へて居る方向が南

米のリオ・デ・ジャネーロ人からは反對に脚下の方と思はれて居るのであります。況んや萬一にも地球の中心迄滑り込んで行つた坑夫が有つたとすれば、彼に取つては凡ての方向が上で下と言ふ方向が絶對に消えて無くなるのであります。』

三太郎「上ばかりあつて下がないと言ふのは理窟に會はないではありませんか。』

五九郎「必ずしも左様ではありません、何故と言ふに地球の中心から見れば、其處から日本に向つても米國に向つても乃至はロシアに向つて出發したとしても、何れも上の方に向つて昇つて行く事になるではありませんか。』

三太郎「それでは君の所謂上に昇ると言ふのはどんな意味なんですか。』

五九郎「吾々人類の如く、地球上に生存して居る者が上昇すると云ふのは絶對的の方向には關係なく、單に地球の中心を離れる事であり下降とは反對に地球の中心に近寄る事であると見れば可いではありませんか。』

三太郎「地球の中心が何故に上下を決定する標準になるのですか、君が勝手に選んだのでは一般に通用しません。』

五九郎「一步を進めて地球の中心が何故に上下を決定する基點になるかと言ふ事を細説するならば、前に言つた如く、上下の概念は吾人が重力の作用を受け居る爲に、一方に進むには吾人の努力を要し自然に任すれば反對の方に墜落すると云ふ事實から生れたのである。従て上下の意義を物理学上から定義すれば、引力の中心に近寄る事は下降であり其中心から離れる事が上昇であると言ひ得るのであります。」

三太郎「成る程、お説は單に形而下の物に就ての説明であるが、形而上の言葉としての上下も亦元來は形而下の言葉を基礎として其意味を擴張した物に過ぎないのであるから、今後と雖も矢張り其意味を廣めて行けば良い筈でありませんか、即ち吾人が人間として社會に立つ時吾人を誘惑する引力の中心があり、自然に任すれば一定の加速度を以て次第に是に向つて吸付けられて行くそれが即ち墜落である。そこで向上とは此引力に打ち勝つて其中心から離れる事であり、向上の極致は昇天である事勿論であります。従つて向上するには自己の努力が必要であり、此引力に反對する力を生じ得る手段を習得する事を修養と名附けるのである。さうすれば吾人は修養に依つて始めて向上し昇天する事が出来る様になるのであると言ふ結論に歸着しませう。」

## 四二 戦後の英國

翌朝十時發にて巴里に向つたが乗客満員である。元來ならば二三日前から申込んで座席を豫約するのが當今の通則で、三月廿四日に巴里の東停車場に行つて見た時などは、四月三日迄の列車は全部既に乗車豫約済に成つて居つた程である故に、途中の驛から不意に乗車しても座席を得られないのが當然かも知れぬ。仕方がないから廊下に手荷物を置いて其上に腰を掛けて居た。暫くすると事務車掌が來て斯んな處に居ては通行の妨害になるでないかと小言を喰つたけれども、外に仕様がなから了解が出来ない様な風をして車掌の顔を眺めて居たら、車掌は怒つて荷物を客車の入口の處に抛つてやつた。兎に角此汽車から降車を命ぜられては困るから無言の儘で廊下を去り其荷物に再び腰を下した。既にして巴里市なるリオン停車場に着いた。停車場外に出て見ると澤山居る筈の自動車が一臺も居ない。運転手がストライキをやつたのだ。稀に馬車が見付ければ乗客は競争で二丁三丁も飛んで行き、先を争うて之を備ふのであるから我々の如き異國人には大難事である、三十分程経て漸く一臺の馬車にありついたが、さて乗車して豫約してあるホテルの町名

番地を示し、是で先づ一安心と尻を据ゑた處が行く事数丁にして街道の真中に馬車が止まつた。やがて御者は後を向いて酒手を十フラン與へなければ行かぬと言ひ出した。復た彼の言ふ事を了解出来ん風を装うて早く行けと催促したが、御者は竟に我々異人には佛語の面倒な會話が了解出来ぬかと言ふつもりで、自分の懐中から十フラン紙幣一枚を取り出して示し乍ら是と同じ物を呉れと請求した。斯うなつては承諾せざるを得ぬ。巴里には長く居たからホテルに行く途は知つて居るが、兎に角手荷物があるので徒歩する事は出来ぬ、戦後の巴里市は恰も徳川時代の箱根峠其儘に逆轉した感がある。

是から英國に返るのであるが先づ巴里の日本大使館に行きて證明を貰ひ、次に警視廳に出頭して佛國の國境を通過して差支ないと言ふ許可を受け、更に英國の旅券査照所に出掛けて、英國に入國許可の手續を済ましてからでなければ汽車に乗る事が出来ないのであるから面倒なる事一通りでない。而して此手續は凡ての旅行者に必要な物である故に、役所に行つても大混雜で半日か一日位は其爲に待つ事になる。殊に英國のお役所は午前十時から門を開いて正午から午後二時迄は晝食の爲に休むと言ふ有様であり、日本人に對しては殊の外に嚴重で何の目的で英國に行くとか、

何日間何處に滞在するとか、色々の事を尋問して白人なら五人も七人も通過する時間止めて置く場合が多い。

愈々汽車に乗つてアーブル港に着いたのは七日の夕方であるが小雨が降つて居る、先月米國から佛國に渡つた際にも此港に上陸したのであるが、其折には船を出ると直ぐ向ひに臨時列車が準備せられてあつたのだから、今度も直に船に乗れる物と思つて十二三歳位の小僧に手提を持たせて出掛けた處が、小僧はどんく市内に出掛けて行く。既に暗くなりかけて居る時刻であるから、見失はない様に後に附いて行つたが數丁にして漸く船の在る所に出た。其處で三フランを小僧に與へた處が、夫れでは不足である五フランを呉れと言ふ、是ばかりの距離で馬車に乗つても五フランになるまいと言つたら、小僧は馬車なら十フラン取りますと答へた。此問答を遙に見て居た巡査が来て、停車場から此處迄其手荷物一個丈なら一フランでも多い位だと説明したので小僧は三フランを掴んで逃げて行つた、巡査は三フランでは餘り多過ぎると獨語を言つた。慥に巡査の俸給に比較すれば、あんな小僧が十分間も働かないで三フランを貰ふのは勿體ない程多過ぎるに相違ないのである。

翌朝七時英國に上陸したが、日本人である爲に旅券の検査が特別扱にされて手續が面倒であつたが、其代りに役員が一人付き切りに成つて凡ての手續を濟まして呉れたから案外苦しい思ひはせず了つた。其後役員が大學教授だと説明したので手荷物を開かずに検査済の證明をした。是で漸く英國の列車に乗り込み午前十時倫敦に着いた。知人二人停車場迄迎ひに来て居つたと言ふ事を後で聞いたが、此時には不幸にして出會はなかつた爲に二三のホテルで門前拂を喰ひ、最後にストランド往の横町に宿泊する事が出来た。前以て豫約して置かなければ殆んどホテルに空間を見出す事が出来ぬのは昨今普通の狀況である。

テームス河畔を散歩して見ると、西曆千九百十六年の六月に英國の海上封鎖を破つて、獨逸のキイル港からケーニツヒ大佐指揮の下に二十九名の船員を乗せて米國迄出掛け、世界を驚かした潜航艇ドイッチランド號が河岸に繋かれてある。其後分捕品として英國に奪はれ、目下は海兵團の基本金を集むる爲に入場料を徴して公衆の觀覽に供されて居るのである。獨逸人の仕事は凡て理學的であるから潜航艇の米國行きでさへ決して冒險的行爲ではなかつた。船の建造が技術的に完全して居るばかりではなく、米國に向つて大西洋横断を企つる前に先づ二箇月間の試験的航

海を實行して缺點なきを髓めたのであつた。従つて米國迄四千海里餘を八週間以上晝夜間斷なく作業して複雑なる機械に何等の故障も生じなかつたのは決して偶然ではない。是を米國人エルマンが飛行船にて北極探検を企てた際には、長距離飛行に關して一回の試験もせず尖峯島に出掛け、大失敗をしたのに比すれば雲泥の差がある。緻密なる獨逸流と突飛な米國風とは此一事に依りて明白に代表されて居ると思ふ。

案内者全長は二百十五呎で幅の一番廣い所は水や油を貯藏して置くタンクを勘定に入れて二十八呎あります。歐米間の往復八千四百五十海里の航海に實際水底を潜航したのは僅に百九十五海里に過ぎません、いくら潜航艇と言つても始終水中に潜つてばかり居るのではなく、潜る事が自由に出來ると言ふ丈でございます。是丈の大きさある荷物船ならば約千四百噸の荷物を積む事が出来る筈であるが、此潜航艇では九十噸を積み得る丈であります、而して實際には水雷と火薬の貯藏所に當て、ありません。

五九号米國に到着した際にはワシントンから三人の海軍士官が検査の爲出張し、三時間に涉り船内を檢閲した結果として、此潜水艇は全くの商船で何等の武装を施して居らず又武装し得る

如き設備がないと宣言した筈でなかつたでせうか。」

案内者「米國士官の宣言などは當てになりませんが、論より證據其處をご覽なさい二個の十八吋水雷發射管が設備されてあります。」

三太郎「米國から歸つた後は盛に活動を續けて、到る所に聯合國の汽船を撃沈したのでありませんか。」

案内者「茲が機關室でありまして左右に各七百馬力のディーゼル・インヂンが据ゑてあります、水面では毎時間約十四海里の速力が出る筈で、此先に空氣壓縮機があり必要に應じ八十氣壓迄で燃料たる油をインヂンに吹込む仕掛けになつて居ります、次室には左右に各四個の電氣發動機があり水中に潜つた場合の動力に使用されます、其左側の室は電氣爐でパンを焼く場所であります。」

オクスフォードサーカスの某館では、南極探検で名を上げたシャツクルトン氏が自ら活辯となり南極探検の活動寫眞をやつて居る、晝夜二回宛の興行で既に一箇月餘に成ると言ふが入場して見ると非常な満員である。

教會堂は何處でも大概音楽を看板にして來會者を集めて居る。牧師の説教などは問題でない、

教會堂を主宰して居る牧師の最も苦心する點は説教を如何にすべきかではなく、獨唱の上手な婦人と音楽の名士とを何所から探して來可きかと言ふ事である、神は即ち愛也キリストやマリヤなどはどうでもよい、自分に慰安を與へて呉れる生きた人間、出来る事ならば自分の愛を最も簡單明瞭に受け容れて呉れる者が欲しいと言ふのが集會者の本心である。

英國の名物は市内並に郊外に散在する廣大なる芝生の公園であるが、戦後の今日では是等の廣場も大部分はバラック式の軍川假建築物で埋められ或は綿羊の放牧場と化して居る。ハマステツト・ヒース公園に散歩に出掛けたが、途中に日本服を着た人物を畫いた張札があるから讀んで見ると芝居の廣告であつた。倫敦大學附屬學校の講堂で學生演藝大會があり、藝題は「御帝」にて士官養成團後援の下に入場料を徴集して公會すると言ふのである。

三太郎「御帝と言ふのは十餘年前僕等が留學生時代に流行した芝居でありませんか。」

五九郎「左様です、あの時は筋書が日本の皇室を侮辱して居るのが不都合であると言つて日本大使館から英國の當局に抗議を申込み、英國側でも同盟國に對して失禮であると言ふ理由から夫れを差止めた筈だと記憶して居るがね。」

三太郎「僕も多分其様に考へて居たが、今でも同盟は繼續して居るのでないでせうか、殊に夫れが倫敦大學に附屬して居る學校がやると言ふのは時勢の變化も甚しいものですね。」

五九郎「學校が内部だけでやる事なら別問題だが、其筋の許可を得て入場料を取つて公會して居るなどは亂暴だね。」

三太郎「士官養成團の後援と書いてあるから何れ排日思想のプロバガンダをやり、日本と一戦を試みようと言ふ下心があるかも知れんさ。」

五九郎「夫れも面白いだらう。どんな事をやる乎一つ入場して見ようか、マチネは午後二時半開場とあるから丁度時刻は都合が宜しいです。」

兎に角學校を探し出し、入場券を買はうとしたら掛りの者は日本人と見て少し當惑の體をなした。次の室に行つて主催者と相談の上で賣渡した。見物人な主に學生の父兄らしいが開場迄には百數十名に達した。役者は日本皇帝に扮したガロー大佐以下数名は軍人だが其外は男女の學生である。男學生と女學生とが戀物語を演じ乍舞臺の上で抱合つたりキツスしたりする所は日本の教育界には到底許されざる仕業である。神は即ち愛也と教ふるキリスト教國に於ては、是が即ち神の道

に踏み入る階段の第一歩であるかも知れん。

### 四三 西洋の要石

今度は博物館見物に出掛けた、英國に於ける博物館の内容は實に豊富である。世界各國の品物が東西に涉り古今に通じて集められ英國の大は之に依て充分證明せられて居る、彼等は支那の貴重物でも印度の國寶でも乃至エヂプトの珍品でも遠慮なしに強奪してしまつたのである、自分の子供の墓でさへ勝手に掘れば國法に依て嚴罰に處せられる今日でもエヂプトや印度の國王の墓が滅茶苦茶に掘り返されて其遺骸迄が見せ物に陳列せられてある、他日エストミンスターアツベが英人の遺跡として發掘され東洋の一博物館に其内容物が陳列さるゝ事あるも夫れは白人の先例に従つたと言ふ丈けであつて必ずしも有色人種の特創ではない。

五九郎「太い石柱があるね、是もエヂプトの遺物か知ら。」

三太郎「茲はエヂプトの室でないよ、昔の十字架であると説明が附いて居るから何れ歐洲の物でせう。」

五九郎「是が十字架だつて言ふのか、唯長い太い石の柱でないかね、尤も上方の頭部に少し十字らしく見える點もあるが、長さは二三間もあるのですから一寸や三寸凸起して居ても十字架とは言はれまいでないか。」

三太郎「つまり十字架の先祖なんでせうよ、茲に三本並べてあるが發達の順序が能く明かに知れます。第一の柱は丁度昔の温泉宿で賣つて居る木地で作つた人形の様に、丸い柱の頭の下が少しくびれて居る丈でせう、其頭部に縦横に走つて居る凹凸部がある夫れが即ち他日十字架に發達する萌芽なんだね。」

五九郎「進化論が十字架に迄當てはまるのは面白いですね、さう言へば其次にある柱は頭部が少し發達して十字架の端が上下左右に突出して居るから十字架らしく見えぬ事はないが、併し丸い物が残つて居るから現今の十字架とは全然違つて居るですね。」

三太郎「第三番目のを見給へ、十字架が完全に發達すると同時に初めに重要部を成して居た頭部が却つて退化して小さくなり、十字の中央部を占めた一種の裝飾に過ぎん様に成つて居るでせう是なら立派な十字架と言へるではありませんか。」

五九郎「單に十字を成して居ると言ふ點から言へば完全であるが、左右に突出した腕があんなに短かくては罪人を刑に處する道具としては不完全至極ではありませんか。」

三太郎「夫れは勿論さうです、十字架と言ふのは元來罪人を刑に處する道具ではなく、且又之が祀られてゐるのはキリストが十字架の上に消えた故ではないと見れば良いではありませんか。」

五九郎「さうするとあなたは十字架が崇拜せられて居るのは必ずしもキリストの極刑に處せられたのが根據でないと主張するのですか。」

三太郎「まあさうですね、渺くとも茲にある三個の石柱が十字架の祖先であると言ふならば、何時か君も見た筈ですが仙臺の南二三里の近在なる愛島村の笠島道祖神の奉納物の内には此石柱と同じ形の物が澤山ありますよ。従つて是を十字架發達史上の一階段を示す物であると認むるならば明かに是は西洋の要石ではありませんか。」

五九郎「夫れでは西洋に於ても太古は要石が崇拜され、東洋に於て大黒様に進化したと同様に西洋では十字架に進化したと言ふのですか、是は面白い考ですね、果してさうであるとすればキリストが自分の十字架を脊負ひ切すに途中で倒れたと言ふ過日の活動寫眞も意味深長になるですね。」

三太郎「何乎面白い説明が考へ附きましたか。」

「五九郎」東洋の聖人孔子は三十にして立つと言つたでせう。然るに西洋の生き神であると言はるるキリストは、其立つ可き年頃に自分の十字架の重荷に堪ずして途中で倒れたと言ふのでせう。」

三太郎「君の云ふ事はどう云ふ意味ですか、私には了解出来んね。」

五九郎「十字架は西洋の要石であると只今君が主張したのでありませんか。」

三太郎「さうです、要石であるとすればどうなんですか。」

五九郎「吾々人類が浮世の旅路を進む際に、未だく前途ある三十歳頃で自分の要石の爲に躓ついたり倒れたり、竟に立身する見込がなくなる者が數へ切れぬ程此世にあり、中には自分の要石の爲に生血を流らず流してしまつて、三十に成るか成らずの身で不歸の客と成る者が稀ではあるまい。」

三太郎「成る程、さうすると君の意見はつまるところ、二十代や三十前後の壯年が神經衰弱などに掛つて前途をなくするのは、キリスト教に謂ふ所の自分の十字架を脊負ひ切れずに倒れたのであると解釋するのですか。」

五九郎「さう云ふ考へを以てキリスト一代記を読んで行けば凡ての事が不思議でもなく奇蹟でもなく、日常の社會にありふれた事實を面白く解説した一種の教訓的物語に過ぎない物であると言ふ事に成ると思ふのです。」

三太郎「成る程、君の説に従へば自分の十字架を背負ひ切れずに倒れたり、十字架の爲に生血を流して死亡したりする小キリストが現代の日本にも澤山ある筈ですね。」

五九郎「例へば三日の後に蘇生すると云ふ様な事にしても、親が十字架の爲に倒れると同時に一方は其爲に子が生れるのであるから人類としては蘇生した事に成りませう。」

愛「蘭地方も旅行して見る豫定であつたが愈々渡歐して見ると戦後の風雲險悪なるのみならずマウント、ヂョイ監獄に於ける百八名のシン、フエン黨が饑餓同盟を成し、首府ダブリン市に於ては爲に大罷業日である故に、彼の地見物は思ひ止まつて再び佛國に歸る事に決心した。」

愈々歸る前日に何か土産品をと思ひ、計算尺専門の商店に入最上等の品を出させて見たが、氣に合つたのを買ふと思ひ猶念の爲目盛に誤差のあるなしを試験する積りで裏面を改めた處が立派な日本文字で専賣特許第××××號と刻まれてある、日本から輸入した品物を日本へ土産に買つて



歸るのは餘りに馬鹿々々しいので、其理由を話して買はずに歸つたが下宿に戻り其話をした處が、主婦「早くお氣がついて結構でした、昨年の春でしたか當地の商店に長く在勤して居た日本の方が、十何年振りで歸國するのでお土産にピアノを一臺買ひましたが代價を拂つてから荷造りを依頼する際に、萬一途中で破損でもすると日本で修繕する事が出来ないから出来るだけ完全に荷造りして下さいと言つた處が、そんな御心配は入りません、是は舶來品で其製造本店は日本にあるのですからと言はれて閉口したさうでございます。」

戦後の英佛諸國に日本品の澤山來て居るには實に驚かされた、うつかりして居ると日本の品を日本に逆輸入する恐れがある而もそれは必ずしも物質ばかりでないから面白い、東洋の風俗や習慣や主義などが一度西洋に渡り、西洋のペーパーが張られて東洋に逆輸入されて行けば喜んで之を迎へる日本人の馬鹿々々しさには驚かざるを得ない。

### 四四五月一日

英國首府の見物を一通り済ましたので再び佛國巴里に戻るつもりで停車場へと出掛けたが、折

悪しく小雨が降つて居る、途中で豫て知り合ひの英人に會つた。

英人「結構なお天氣です。」

五九郎「ひどい雨ですね。」

三太郎「英國でも矢張り天氣の善し悪しに關らず結構なお天氣ですと云ふのが禮儀でございますか。」

英人「そんな事はありません。」

三太郎「それでも今あなたは結構なお天氣ですと云はれたでございますか。」

英人「今日は本當に結構なお天氣ですもの。」

五九郎「こんなに雨が降つても英國では結構な天氣なんですか。」

英人「雨が降つてもあの通り雲の切れ目から時々太陽が顔を出すではありませんか、太陽の光を受ける事が出来るなら我が英國では結構な天氣ですよ。」

説明を聞いて見れば尤である。濃霧を以て有名な首府ロンドンは勿論の事として、冬期になれば晝猶暗く二箇月も三箇月も太陽を見る事が出来ずに暮す場合も稀では無いのであるから、少し

位雨が降つた處で太陽が見えるなら結構な天気と言ふのは當然かも知れん。

五九郎「こんなに雨が降るのにあの人は洋傘をささず持つて歩きますが、結構な天気ですから洋傘をさす事を遠慮して居るのでせうか。」

英人「左様ではありません。それは又問題が違ひます。此雨の中で洋傘を持つて居乍らさずに行く人がそちこちに見えますが、あれは見映に洋傘を持つて居るので雨の日にさす爲持つて出るのでありません。」

三太郎「まさかさうでもありますまい。」

英人「あの婦人などは洋傘を持つて居乍らさずにとり／＼あの店先に雨宿りをしてしまつたでせう、あの女に其理由を聞いてご覧なさい。」

三太郎「そんな失禮な事を……」

英人「必ずかう答へますよ、まあ、あきれたね、私の此絹張りのバラソルをこんな雨の降る際にさしてすつかり濡してしまへとおつしやるのですか、誰がそんな馬鹿な真似を、此バラソルは買つてからたつた二年しか経たないんですよ、雨に濡らして臺なしにするにはまだく惜しいです。」

丁度海水浴行きの晴衣を着た儘で海水に浸る様なものですからね。」

人間の心の中は西洋人も東洋人も文明人も野蠻人も同一であると思える、毛布を着て出たアフリカの土人が俄雨に逢つたら大急ぎで其毛布を疊んで走り出したのを笑ふのは、あまりに皮肉な對照だと感じた。

英京ロンドンから佛國巴里に行くと言へば大事件の様であるが、恰も東京から仙臺に行く程の時間で、戦争前にはロンドン在住の者が土曜日に事務所を退つてから巴里に出掛けてはしたい放題の遊びをし、月曜日には何喰はぬ顔して出勤して居るセントルマンが澤山あつたさうである。巴里に着いて見ると明日は五月一日の労働祭であると云ふので大騒ぎをして居る、敢て労働者が騒動を起すと言ふのではない、唯五月一日の午前零時から一晝夜二十四時間完全に休業する云ふだけであるが、巴里の如き大都會になるとそれが一般市民に大恐慌を來す事に成るのである、第一には朝のパンも牛乳も配達されなからうつかりして居れば一日食はずに居なければならぬ、それよりも先に水道が止まるから前夜から準備して置かなければ、朝起きても顔を洗ふ事も出ず口を嗽ぐ事も意の如くにはならない、パンを買ひ求め水を桶に汲み取つて置いた處で瓦斯が

出なくなるから、前以てアルコール、ランプの用意でもせねば一日火断ちをする事になる、日本の田舎に育つた我々には到底想像し切れない程の結果が顯はれるのである。

愈々五月一日の朝になつて見ると誠に静穏である、馬車も走らねば電車の響きも聞えず自動車も見當らず凡ての店は閉鎖されて居る。昨夜貯へて置いた水で顔を洗つて居るとガルソンが兎に角パンとコーヒーを運んで呉れたホテルだけに相當の準備はあるらしいがそれでもパンは古いので味が悪い。暫くすると蹄鐵の音がするので、窓外を眺むれば騎馬歩兵が一分隊程威風堂々と進んで行く、萬一を慮りて警戒して居るのである事云ふ迄もない。市内の状況はどんなものか、恐い物見たさに出掛けた。行く事数町にして一臺の電車が来た停留場には三名の兵卒が武装して立番をなして居るのみならず、電車にも前後の入口に一名宛銃剣を持った兵士が陪乗して居る。何處に行くと云ふ宛もなしに出掛けたのであるから兎に角其電車に乗つて市内を見物する事にしたが北停車場行きであつた。聴く處に依れば旅客の便宜を計り、市内の中央部と各停車場間には強制的に電車及び自働車を運轉せしめ車掌や運轉手は有志家を募集したのであるが労働者の暴行を豫防する目的で兵士を陪乗させて居るのであつた、次には東停車場に行き其處から武装の自動車で

エトアール迄行き、更に徒歩にてブーロニユの森に入れば澤山の労働者が公園内を逍遙して居る、食事の時刻になつてもレストランは無論閉鎖されて居る晝食は抜きにする覺悟で出掛けたのであるが、食ふ事が出来ないとなると俄かに腹の蟲が騒ぎ出して来る、何處と云ふ宛もなく足に任せ歩いて居ると横町から賑かな蓄音機の音が聞えて来た。近寄つて見ると小さなレストランで店内は労働者で一杯になつて居る、労働者も人間であるから喰はずに生きられない。従つて幾ら五月一日は總休業日であると宣言しても、労働者に喰はせる爲に働く労働者は例外で休業をしな

い者と見える、勞農政府の治下にある積りで早速労働者の仲間入りをした。

三太郎「茲に自働占の箱が備へてあるよ。西洋のお囃はどんな物が出るだらう。」

五九郎「十五サンチームを捨てたつもりで一本引いて見よう、やあ二十二番が出たよ。」

三太郎「何が書いてあります。」

五九郎「君は優柔不斷の性質でつまらぬ事に頭を悩ます、殊に最も悪い事は何もかも一度に成さうと企て、色々の事が頭の中に雑居して居るので畢竟何をしたら良いか判らずに終つてしまふ。

三太郎「それは君が引いた御圖だから君の性質を云つて居るのでありませんか。」

五九郎「頭の中には可成り良い考を持つて居る、外の事は考へずに今の考を何處迄もやつて見るが良い、必ず成功する、君は社交上に於ては甚だ快活であるが故に世人は君を樂天家であると信じて居るけれども、それは表面上の事で内心には始終煩悶が断えない。」

三太郎「日本の自働占とは可成り相違があるね。」

五九郎「之を要するに性質は善良だが餘りに人を信じ過ぎる、子供は澤山生れて軍人志願の者も出て来る、將來は尊族と争を生ずる兆があり戀愛關係に於ては誘惑せらるゝ機會が度々あり勝負事をすれば當る見込は充分あるが餘りに頭を使ひ過ぎる恐れがある故に、成る可くやらぬ方が良い。」

其内にガルソンがご馳走を運んで来たが空腹にまづい物なし、況んや場末とは云ひ乍ら料理の本場巴里の市中である。英國流の鹽料理などの比でない事は勿論である、いくら裏店の葡萄酒でも東京の真中で賣つて居る和製の葡萄酒よりは遙かにうまい。

隣客「あなた方は日本人でせう、日本でも労働祭がありますか。」

五九郎「さうですね。そんな噂が時々出ますが未だに労働祭らしい労働祭を日本では見た事があ

りませんでした。兎に角私自身が労働者でないから詳しい事を知る事が出来ません。」

隣客「あなた方は學者ですか、佛蘭西では高等なる大學教育は佛蘭西が誇つて居る處の知識的選良にだけ授けられます。」

三太郎「佛蘭西には極めて聰明にして教養ある人士、有識者及び學者が多い。」

隣客「それは甚だ結構に違ひない、然し年々各大學を卒業する六千乃至八千の青年の内、父親の後継者として地位を得ない者又は官僚界に入らざる者は、無爲に暮し不生産的な浮浪者の數を増加するばかりであります。凡ての國も凡ての個人も假令思想上に於てなりとも強大ならんと慾するならば、永續する事の確實なる物質上の生活と自由とは之を持たなくてはなりません。物質主義でも現實主義でも良い是は凡てを物質的利益を以て定むる現代に於ては止むを得ない事である。佛蘭西の第一懸念は、勿論祖國の偉大と不羈との犠牲となれる廢兵並に其家族に對する國家的感謝の大問題を如何に決定すべきかである可き筈であります。佛蘭西は過去に既得の繁榮に怡も金利生活者が他の努力に無關係なる如くに生きて来た。今日迄我國の學者は多く國外に出なかつた。他國を知らない者は即ち己れ自身の國を知らないのである。是を全く變更しなくてはなら

五月一日(メーデー)

三六六

ぬ。佛蘭西は今や一般的改造を必要として居ります。』

五九郎「今度の戦争では佛蘭西人が非常に勇敢に戦つたではありませんか。」

隣客「我々は必ずしも好んで兵士となつたものではありません、誰が労働者に槍や鐵砲を持つ事が國家に對する義務だと教へたか、其母親などではありません。居酒屋の娘が母に進化した處でそんな事を自分の子に教へない。労働者の大部分は殆んど學校に通つた事もないのであるから學校の先生が教へたのでもない。然らば何が故に英雄の如く戦つたかと云ふに、我々の凡ては自分の國に敵が侵入して居る、其敵を國境外に逐ひ出さなくてはならぬ事を承知して居るからであります、勿論我々の大多數は自分の家もなければ財産もない。従つて獨逸兵が幾ら侵入して來た處で直接自分の損害を受くると云ふではないが、資本家は私慾私利の爲に戦ふかも知れんが我々労働者は人に譲らないと云ふ本能、人から征服される事を慚しなないと云ふ本能から最後まで戦つたに過ぎません。』

三太郎「獨逸では何故に戦はなければならんかと云ふ事を凡ての國民に教へた様です、戦争は一時的の感激や興奮などで勝つてると信じて居るならば大いなる誤りでせう、國の力と云ふ物は主

として其組織的な繼續的な正確な努力に據る筈ですからね、此室内の空氣の分子は一秒間に何百メートルと云ふ速さで運動して居ても其方向が滅茶苦茶であるから外部には少しも認められないが、其運動の方向が一致すれば僅に毎秒二三十メートルの速さでも大暴風となります、國民の力も亦同じ事です。』

労働者の氣焔はなかく、止みさうにもないが良い、加減な處で逃げ出してしまつた。

## 四五 國境通過

巴里の見物も一通り済んだので今度は瑞西に遊んで見る氣になつたが戦争後の歐洲は旅行者には不便此上もない物と變化して居る。先づ巴里に在る日本大使館に行つて瑞西に旅行する旨を告げて旅券の査證を申請し、次には巴里の警視廳に出頭して此者は佛國滯在中不都合の所爲之無きに付き、國境外に出しても差支ないと云ふ證明書を貰つた。萬一此證明がないと犯罪逃亡者と認め、國境にて捕へられ投獄の危難に逢ふと云ふのであるから恐ろしい。愈々準備が出来たから銀行に行つて貨幣の兩換をやつた。本來はラテン同盟とか言つてイタリー、フランス、ベルギー、ス

キツツル等の諸國に於ては互に貨幣が共通にて佛國の十フランは戰前なら前記の何れの國に於ても其儘十フランとして通用するので兩換などは爲んでも差支なかつたが、戰後の今日では各國の經濟状態に大變動あり、金貨は勿論銀貨さへ姿を見せず、紙幣の價值には國に依りて非常な高低が生じて居り、佛國の千フランを兩換して僅かに約四百フランの瑞西紙幣が得られる割合に成つて居た、換言すれば同一額面の佛國紙幣に比して瑞西の紙幣は二倍の價格を持つて居るのであるから冗談ではない、旅費の算定には大影響がある。

ガル・デ・リオンに行き切符を買はんとしたが、過日の鐵道ストライキ以來の大混雑で其手續が容易でないから赤帽に頼んだ處が、自分で買つたら良いだらうと言つて引き受けて呉れない、勞働者の鼻息の荒いには一驚を喫し止むを得ず旅行會社として有名なクツクの店を探がして依頼する事にした。午後八時半發の列車に乗るのであるが停車場に着いて見ると夕食後と見えて赤帽は一人も居らぬ、自分で手荷物の仕末をして兎に角寢臺にもぐり込んだ。急行であるから早朝四時半には既にリオン市に着いた。急行車は凡てマルセーユ港に行くのである故に瑞西に行くには是非此處で乗り換へる必要がある。停車場の改札口には驛夫の代りに一人の兵卒が立番して切符を改

めて居り、待合室には武装した兵士が三々五々假睡をして居る、言ふ迄もなく過日の鐵道ストライキ以來は軍隊の手で汽車の運轉を引受けて居る結果である、食堂に入つてカフェーを飲み乍ら一と休みをしたが、約二十分にして急行車が出發すると食堂も店も閉たのでローン河の岸に沿つて散歩を試み、適當の時刻を見て當地にある日本領事館に行つて本國からの郵便物を受取り、次に瑞西領事館に出頭し入國許可の手續を済ました。是をやらすに行けば國境で入國拒絶に逢ひ追ひ返されるのである、日本を出發する際に瑞西の公使館で旅券の査證を得て置いたから差支ない積りで、數日前に伊太利の方面から瑞西に入らんとして追返された者があると云ふ話を領事館で聞いたからである。夕方停車場に行きて切符を買はんとしたが乗車當日でなければ切符は賣らないと拒絶された。翌日午前七時頃旅裝を整へて停車場に行つて見ると立錐の餘地もなき程に旅客が充満して居る。長い列の後に就いて兎に角切符を買ひ、驛夫に乘車すべきブラットホームを尋ねた所が掲示を見なさいと言ひ乍ら行つてしまつた。戰争後人氣の悪くなつたのには驚く外はない。

無事に乘車して先づ一安心して居ると憲兵が來て旅券を改めて行つた。同室には多數の將校が

一杯に乗り込んで居たがアンペリウ驛迄來ると凡て下車した爲に其後は二三の乗客を残したに過ぎん、汽車が進むに連れてローン河は幾度も消えたり見えたりする、國境なるベルガルド驛に着けば佛國の汽車は此處が行き止りで。是から先は瑞西國の汽車に乗り換へる筈であるが其乗換は簡單には許されない。先づ手荷物と共に全部下車して荷物は凡て検査場に運ばれ、旅客は一列になつて旅券の検査を受けるのである。此際に警察の證明を受けて居なければ犯罪逃亡の嫌疑で投獄の災難に逢ふ恐れがある事は前に述べた筈である、次には一メートルもあるかと思はれる自動電話室の様な所に、一人宛呼び入れて身體検査ではないが懐中物の検査をするのである。其側の壁には英獨佛伊等の各國語で書いた規則書が張つてあり先づ是を讀ませる。正直に讀んで見ると要するに金貨は一切國外に持出してはならぬ銀貨は十フラン以上持出してはならぬのみならず紙幣と雖も千フラン以上を持って國外に出る事を禁じ、之を犯したる者は其財貨を沒收した上に體刑に處すると云ふのである。金貨は實際の處目下の日本國と同様で手に入れる事は殆んど不可能である故、初めから問題にもならぬが銀貨はそれ程でもない、目下の爲替相場にして日本の約一圓四五十錢に過ぎないのであるから。十フラン以上の銀貨を懐中に持つて居る位は我々から見れば何でもな

いのである。況んや外國を跨に掛けて旅行するに千フラン位の旅費を持たずに出掛けられる筈がないのであるから、此規則を見せられては異様の感が生ぜざるを得ない。千フラン以上持つて居ると正直に自白した處が多い分は此處で預るから歸りに受取つて行けと言つて取り上げられた。一列車に乗り込んで居る旅客は少くとも三百人や四百人は居る筈であるのに、一人一人に就て所持の金額を質問し、怪しいと思へば懐中物を出させて検査するのであるから手間の取れる事は豫想外である、長蛇の如き行列が手提鞆や小包類を持つた儘端半よりも遅い速度で關所を通つて行くのであるから呆れて物が言へない、検査室の外壁には「苦難の關」とか「少くとも二時間を待て」など云ふ種類の樂書が鉛筆や萬年筆の色も鮮かに認められる。

懐中物の検査が済んでから手荷物の検査がある。私の荷物を検査した検査員は生憎と婦人であつた爲に其緻密なには驚いた、單に鞆の内部を一應改めた丈にて満足せず、旅行案内や汽車の時間表の類迄一々頁をめくり乍ら検査するのであるから幾ら日の永い筈でもたまらない、多分書物の中に紙幣を隠して居りはせぬかと疑つて居る物らしい、兎に角無事に検査を終了して柵外に出づれば、其處からは瑞西領となるのであるから、今度は瑞西の検査員が控へて居て、一人宛旅券

の検査を成し、入國の目的や滞在期間の豫定日数などを質問する。少しでも怪しいと認めれば入國拒絶で此處から追返されるのである。許可の印を旅券に捺して貰つてから停車場内の食堂で大急ぎに中食を済まし、瑞西の汽車に乗り發車したから是で安心と思つて居ると又も旅券の検査をやつて來た、要するに今日は四回の検査を受けた事になる、生れてから始めて出會つて不愉快な旅行である。

検査員が一枚の印刷物を置いて行つたから讀んで見た。

五九郎「凡て瑞西國に入國した者は、目的地に到着したならば直に其地の警察に出頭し滞在の許可を受くべき事、次に其地を去らんとする時は出發前に再び警察に出頭し行く先を明言して其許可を受くべしと書いてあるよ。」

三太郎「全で我々を前科者扱ひにして居るんだね、刑務所から出て來たばかりの人間であるまいし、そんなに嚴重に取締まらんでも別に悪い事は爲ないつもりだがね。」

五九郎「我々は悪い事をせんけれども、此處は今度の大戰では兩敵國の間に峽まつて居た爲に兩方から入り込んで種々の策戦をめぐらした、結果こんな風に入人をやかましく云ふ様になつたのせうよ。」

三太郎「警察になんか出頭せんでもホテルで泊めて呉れるだらうがな。」

五九郎「國內を旅行するだけなら別に警察に行かんでも不都合がないかも知れんが、今度國境を出る時に困りませう、旅券には今日の日附で入國許可の印が捺してあるから、若し滞在して土地の警察の證明がなかつたら、其間何處に居たか不明な爲に國境で犯罪逃亡者と認めて押へられても致し方があるまい。」

三太郎「さう云へばさうだね、仕方がないから警察に出頭するかね、税關の女検査員の馬鹿丁寧で調べるのには呆れたね。」

五九郎「それでも女だけに何處かの税關吏の様に金を出して見せなさいとは云はずにしまつたね。」

三太郎「それは當然さ、金を持ち出す事は佛國の規則で禁じてある筈ですもの。」

### 四六 新式の空間



午後一時半にゼネバ市に到着し、ホテルに荷物を置いて早速市内の見物に出掛けた、ラクレヤン即ちゼネバ湖の水が瀧の如く流れ出で、ローン河となる其出口の處に發達したのがゼネバ市である。其左右の兩市街を連絡する長さ二百六十メートルの白山橋はゼネバ名所の一つであり、橋上に立ちて湖水の彼方遙に白雪皚々たる連峯を眺むれば涼風を包むべき袖こそなければ、見飽かぬ山水の佳景に身心共に此世の苦惱を忘れてしまった。

一組一フランの繪葉書を買つて十フラン紙幣を支拂つた處が釣銭として一フランの銀貨九枚を呉れた、それは不思議でも何んでもないが目下の佛國では殆んど紙幣ばかりであつたから、珍らしく思つたので特に注意して見ると何れも佛國の銀貨ばかりである。

三太郎「是は可笑しいね、佛國で兩替した時には佛貨一千フランに付き瑞西の貨幣約四百フランの割合で換へて來たのであるから、今拂つた十フランの瑞西紙幣は佛蘭西のなら二十五フランに相當する筈でないでせうか。」

五九郎「さう云ふ勘定になりますね、我々は他國人であるから何も知らんと思つて誤魔化したのかも知れんよ、一つ談判して見ようでないか。」

再び店頭に戻つて其話をした處がそれは紙幣の場合には儘に貴殿方の仰せらるゝ通りでございませうが、金貨や銀貨ならば昔も今も變りはありません、佛國の一フラン銀貨も瑞西の一フラン銀貨も銀に區別がないばかりでなく、其一個の目方が同一でありますから其間に差別を附ける必要なく、戦後の今日でも戦争前同様に共通でありますと店主の説明を聞いて見れば成る程尤も道理であるから、さうですかと言つたきりこの句が續けずに引き下つてしまつた。

三太郎「斯うなつて來ると今迄學校で教はつた算術や代數は何の役にも立たなくなるね。」

五九郎「何故ですか、何も數學の原理に關係はありますまい。」

三太郎「大にあるよ、吾々が學んだ代數學に依ると  $A=B$  と同時に  $C=D$  なる時に若しも  $B=C$  であるならば必ず  $A=D$  であると云ふ結論が得られる筈でありませんか。」

五九郎「それは勿論さうです  $A=B$ ,  $B=C$ ,  $C=D$  であるなら  $A=D$  と云ふ事は當然ですもの。」

三太郎「其處で君考へて見給へ。」

A=佛國の五フラン紙幣

B=佛國の五フラン銀貨

新式の空間

C=瑞西の五フラン銀貨

D=瑞西の五フラン紙幣

と置く時、佛國內では銀貨でも紙幣でも同様に通用するから

A=B

と云ふ關係があり、又瑞西國內では同様に銀貨でも紙幣でも同一であるから

C=D

でありませう。然るに今此處の店の主人の説明に依ると佛國の銀貨でも瑞西の銀貨でも銀貨の價値に變りはないと言ふなら

B=C

となりませう。處で吾々が銀行で兩替した際には佛國の千フラン即ち五フラン紙幣二百枚が瑞西の四百フラン即ち五フラン紙幣八十枚であつたから

$200A=80D$  或は  $5A=2D$

従つて

A≠D

と言ふ結論に達するではありませんか。』

五九郎「成る程、さう云ふ風に論じて見ると我々が中學校で學んだ様なスミスの代數學は戰争後の歐洲には通用出来ん事になりますね、して見るとアインスタインの相對性原理に依つて時間や空間の見方が變り、非ユウクリッド幾何學の方がユウクリッド幾何學よりも更に深く空間の本質に觸れて居るさうだから、今度はスミス代數學よりも更に現在の歐洲の經濟界に適切なる非スミス代數學でも創説する大數學者が飛び出すかも知れんね。』

三太郎「佛國の國境で懷中物をやかましく改めた理由が是でわかりましたね、銀貨を百フラン持つて居れば紙幣を二百五十フラン持つて出たと同じ勘定ですから。』

五九郎「それで思ひついたが佛國のリオンから巴里を経て英國のロンドンに行く場合を考へて見ると、リオンから巴里に行のはリオンからロンドンへの行程の一部分である事は言ふ迄もない筈である、其處で部分は全體より小なりと言ふ公理が適合する空間ならば、リオンから手紙を出す場合を考へて見るとロンドンへ出す手紙には、巴里へ出す手紙と同額或はそれ以上の郵税を課せられるのが當然であり、少くともユウクリッド幾何學で教育された讀者にはさう思はれる事と察せ

られるのであります。』

三太郎「それは當然さうあるべき筈です。』

五九郎「處が事實はそれと正反對ですから面白いではありませんか。』

三太郎「正反對と言ふと國內の巴里へ出す手紙よりも外國のロンドンへ出す手紙の方が少額の郵便で済むのですか。』

五九郎「さうです、リオンから巴里へ出す手紙には十五サンチームの切手を張る必要がありますけれども、ロンドンへなら僅に十サンチームの切手で澤山であります。』

三太郎「成る程、夫れで見ると戦後の歐洲には部分は全體より大なりと云ふ變つた公理が適合する新式の空間が出来たわけですね。』

舊式思想より見て不合理なる如く思はれる歐洲の世界は果して永續し得る物であるか。或は近き將來に於て改造さるべき運命の第一歩を踏み出したのであるか。それは吾々の知り得る範圍外であります。

翌日は午後當市を發車しゼネバ湖の西岸に沿うて北上し、ローヅンヌからフリボルグに出で夕

方には首府ベルンに着いた、ホテルで買切りの棧敷があるから芝居見物に行かんかと番頭がすゝめに来た、藝題は「蝶々さん」である。兎に角英佛白等の交戦國の慘狀を見てから瑞西に来たので、戦争に加らなかつた國の民衆は如何に幸福である乎と云ふ事が沁々と感ぜられる。佛國が瑞西に来て見ると全地獄から極樂に来た様な感じがする、瑞西の山水は著しく其恩恵を國民に與へて居る。或は天然が其慈悲深き手を以て人類の爲に供へたバラダイスであるかも知れない。尠くとも瑞西は世界の公園であると云ふ其名には背かぬ、往來の人々を見ても交戦國の市街と中立國の市街とは顔の色に非常の差があるのに氣がつく。

郊外散歩に出掛けチーフエナウにてアーン河を涉れば大森林がある、夏日の炎天を凌ぐに恰好の場所である故に休息して居た所が一労働者來りて話を仕懸けた。

労働者「日本はバラダイスの如き幸福な國ださうですね、さう云ふ國に生れた貴殿方はほんたうに仕合せ者です。』

五九郎「貴殿の國こそ本當のバラダイスでありません乎、自然の恵に成る山水の美は世界の公園と稱せられ、大國の間に挟まれ乍ら今度の世界戦争にも加らず、自由と平等とが理想的に行はれ

て居るですもの。』

労働者「自由、平等、博愛なる語を民間に放つたのは最早昔の夢に過ぎません。自由、平等、博愛と云ふ様な言語丈は世界の隅から隅迄宣傳せられ、幾多の政治家や偽宗教家は此旗幟をかつき廻つて居りますけれども、其實際を見ると是等の標語は到る處に平和や安寧や一致を破壊し社會の基礎を破り吾人の幸福を侵蝕して居ります。現に私などは其幸福を奪はれて居るばかりではありません、將に生存の権利さへも奪はれ様として居るのであります。』

五九郎「生命が危いと申すと何乎犯罪でもして逃亡して居るのです乎。』

労働者「罪を犯す様な悪徒ではありません、萬一私が犯罪をやるならこんな見すほらしい風彩をして居る必要はない筈です、立派な生活をして居る奴等程重大な犯罪をやつて居るのです。』

五九郎「それならどうして貴殿の生存権が危いのですか。』

労働者「私は是でも一個の生物であります。生物が其生存を繼續して行くには飲食物が必要であります。國家や社會が我輩の生存権を認むるならば其生存を繼續して行くに必要な物を保證して呉れる義務があるではありませんか、然るに私は二箇月以來續いて居るストライキの爲に宿る可

き家なく食ふ可きパンの一片だになく、三晩程既に此森の中で寂しい夜を明かして居るのです。それでも雨が降らないのは何といふ天恵でせう、併し夜明けまで樹の根に近かく寄りかゝつて居ると何時ともなく濕氣が肉體迄通つて参ります、そんな事情ですから今日などは朝から何一つ口に入れないのです。多少に關らず御補助下さるわけには行きますまいか。』

五九郎「一番安い所で一晩泊るにいくらかゝりますか。』

労働者「どんなに安い所を探がしても一日四フランなければ生活が出来ません。』

五九郎「一日労働していくらの賃銀が得られますか。』

労働者「一時間毎に一フランの割合であります。』

五九郎「それならば働かさへすれば食ふに困らないではありませんか。』

労働者「毎日仕事があれば勿論困りませんが、戰爭中は資本家が手に利益を得る事が出来たので國家の爲と乎人類の爲と乎吾々労働者をおだて、働かせ乍ら、不景氣になればどしどし工場を閉鎖してしまひました。それでも資本家は遊んで居て食つて行けるから良いが、吾々は働いた時だけ食つて行く権利があつても、次の日からは生存権がなくなるのであります。』